

PRESENTED BY
鏡裕之
イラスト
牡丹

探ませでよ おれの 正義5

ジャストライズ



Infinia
Demonia-commander

Shizuru

Blue-gorgeous



5

PRESENTED BY
鏡裕之
イラスト
牡丹

揉ませてよ
おれの正義



ぷちぱら文庫
creative

デモニア救星団 第〇八一基地

本星の領土を守る為に、地球に設置された八十一番目の基地。ベルゼリアを筆頭に基地を守る。



アイゼナハ

庸の才能を見抜き、乳揉み係にすることでパワーアップを図る。

インフィニア

〇八一基地の女暗黒騎士。庸の活躍で、最強部隊の座を取り戻す。



奉仕局員 29号

クラリッサの救星団での姿。庸の活躍を認め、協力的になった。

目次

第一章 疾風のピンクポリス

第二章 手コキアイドル

第三章 ルミナの爆乳

第四章 エージェント侵入

第五章 超乳A

第六章 庸の力

第七章 決断

第八章 生贄のブルー

第九章 崩壊

学校への寄付金や生徒の能力によって、特別生、優待生、一般生、修道生のヒエラルキーが存在する。

ぼろかわ よう 庸

一年ブロンズ組の修道生。学院では未だに底辺の扱いだが、救星団では躍進を続けている。

クラリッサ・ローズウェル

一年ブロンズ組の特別生。クラスの最上位に位置するお嬢様。



ピンクポリス

人気アイドルの秋元理奈のエージェント姿。力を失っていたが復活する。



ローズスコラ

庸の同級生、聖ルミナが変身した姿。中学から一緒だった庸を慕っている。



ブルーゴージャス

プライドの高い、学院の特別生・真王寺詩鶴が変身する弓使いのエージェント。



デモニア救星団壊滅を狙う正義の味方達。聖母教会を拠点にし、〇八一基地への攻撃をしかける。

セイント・ エージェント

グローバル国際学院

第一章	疾風のピンクボリス
第二章	手コキアイドル
第三章	ルミナの爆乳
第四章	エージエント侵入
第五章	超乳A
第六章	庸の力
第七章	決断
第八章	生贄のブルー
第九章	崩壊

赤や青や黄色のステンドグラスが割れた教会の窓から、月夜が覗いていた。堂内に射し込んでいるはずの月光は、教会内の照明に負けて見えない。

教会の身廊には、侵入者が二人、並んで立っていた。

一人は、黒いセミロングの女だった。眼鏡を掛け、逆V字のマイクロトップを身に着けていた。豊かな乳房が、高く突き出ている。ハイレグのボトムの下からは、ムチムチの長い脚が伸びている。

もう一人は赤いショートヘアの女だった。赤い髪から一對の角を覗かせ、野性的な双眸を向けていた。妖艶なグラマラスボディを、胸元に龍を描いた黒い戦闘スーツで包み込んでいる。

デモニア救星団第〇八一基地のツートップ、暗黒騎士のアイゼナハとインフィニアだった。セミロングの眼鏡がアイゼナハ、角つきの赤いショートヘアがインフィニアである。二人とも、庸のセックスパートナーだ。

アイゼナハは、聖母教会の中で敵を睨みつけていた。

男が一人。超乳の女が一人、爆乳の女が三人。

自称正義の味方、セイント・エージェンツたちだ。そのうち一人の爆乳の女が、高校一年生の男子のペニスを、胸で挟み込んでいた。

(庸……！)

アイゼナハの髪の毛が怒りで逆立った。

遅かった？

もうポールシフトされてしまった？

自分たちの味方から正義の味方に変えられてしまった？ 濁川庸は、アイゼナハにとってアイゼナハ隊所属の戦闘員というだけではなかった。アイゼナハやインフィニアに力を与える乳揉み係であり、アイゼナハのかわいい彼氏である。数カ月前に庸がデモニア救星団に入団し、出会っ

た。出会ってすぐに肉体関係に陥った。今では、本気で庸に惚れている。

「見ろ」

とインフィニアが注意を促した。

庸の首に、金色の首輪がはまっていた。指には金のリングがはまっている。エージェントたちにボールシフトさせられてしまったのだ。

（遅かった……!）

思わず、

「庸！」

悲痛な声がアイゼナハから洩れた。

「よくも庸を！」

インフィニアがダツシユした。アイゼナハもつづいた。

庸はボールシフトされてしまった。つまり、デモニア救星団の暗黒騎士をパワーアップする存在から、セイント・エージェントたちをパワーアップする存在に、変えられてしまったのだ。

ならば、奪い返してもう一度ボールシフトを起こすのみ！

「濁川を守るのです！」

青色のボディコンに身を包んだエージェント——ブルーゴージャスが鋭い命令を発し、白いジャケットに白いズボン姿の男のエージェント、ホワイトグラスがアイゼナハたちに向かって踏み出した。

庸の後ろから、蝶眼鏡を着けてタイフロント・シャツを着、ミニスカートを穿いたセイント・エージェント——ローズスコラが飛び出した。ハンドランチャーを構える。

「撃つな！ 教会が壊れるぞ！」

とホワイトグラスが制止する。その時には、インフィニアがローズスコラの目の前に迫っていた。

「遅いんだよ！」

インフィニアがパンチを撃ち込んだ。

（絶対、庸くんを渡さない！）

とローズスコラは胸の奥で誓った。

中学の時から、庸くんのは好きだった。同じ高校に通えるを知って、どれほどうれしかったか。庸くんが自分たちの敵、デモニア救星団の一人だと知った時にはショックだった。でも、ボールシフトをすればいっしょに戦えるとわかった。そしてようやく庸くんが正義の味方になったのだ。自分と同じ正義の味方に――。また奪われるなんて、絶対させない。

ピンクボリスは、まだバイズリフェラが終わったばかりだった。ピンクボリスは戦闘態勢に入れていない。

（その前にわたしが……）

ローズスコラは庸とピンクボリスの前に出た。ランチャーを構える。その途端、

「撃つな！ 教会が壊れるぞ！」

ホワイトグラスの声が飛んだ。

ローズスコラの武器はハンドランチャーである。砲弾には、重力弾と無重力弾が装填できるようになっている。重力弾が直撃すると、直撃されたものに重力が掛かる。逆に無重力弾を喰らうと重力がなくなって浮いてしまう。

ローズスコラは無重力弾を撃とうとしたのだ。だが、インフィニアに躲されて教会のどこかに当たれば、その部分が無重力状態になってしまう。教会を破壊しかねない。ためらった時には、インフィニアが眼前に迫っていた。

（間に合わない……！）

やられると思った。

拳が自分の腹部に向かうのが見えた。

声は出なかった。

音も聞こえなかった。

ただ見えていたのは、自分の腹部に向かう拳と、突然横方向に吹っ飛んだインフィニアだった。

（え!? え!? え!?）

何が起きたのかわからなかった。自分はインフィニアに腹部をパンチされてうずくまるところだったのではないのか？　なのに、なぜ……!?

答えは、自分のすぐそばで構えるセイント・エージェン
トの背中が教えてくれた。

ピンク色のつるつるのマイクロットップとピンク色のミニ
スカート。ミニスカボリスみたいな衣装――。

(まさか……)

そのまさかだった。ローズスコラを救ったのは、庸にバ
イブリフェラをした直後の、ピンクボリスだったのだ。

エッチなことをしていたはずなのに？

どうやって？

どこに、そんな反射神経があつたの!?

「ローズは下がっていて。庸クンのそばにいて」

とピンクボリスは低い、落ち着いた口調で言って、前に
一歩踏み出した。

「貴様っ!」

インフィニアが蹴る。

ピンクボリスがしゃがみ、くるりと身体が反転した。ハ
イキックがインフィニアの頭部を直撃する。



いや。

片手でブロックされていた。

すぐにピンクポリスが逆向きに身体を反転させてローキックを飛ばす。インフィニアがジャンプで躲すのを待っていたかのように、ピンクポリスの身体が低い姿勢のまま、インフィニアに突っ込んだ。矢継ぎ早にパンチをぶち込む。腕でブロックしながらインフィニアが後退する。

凄いや、とローズスコラは驚嘆した。

ピンクポリスって、あんなに格闘技、強かったわけ？

違ったよね。

なんだか別人。

どうして？

ピンクポリスがホルスターから拳銃を抜いた。コルトパイソンの引き金を引く。

つづけて銃声が鳴った。

インフィニアがまるで獣のように跳ねて銃弾を躲す。だが、ピンクポリスも冷静に影を追いかけて引き金を引く。

インフィニアのすぐ毛先を弾丸が通過した。ドリーム弾——直撃を喰らった者は、夢に誘われて放心状態になってしまう。

「惜しいよ」

とピンクポリスが唇の端に不敵な笑みを浮かべた。

アイゼナハが鞭を振るった。電光が唸りを上げてピンクポリスに向かう。ピンクポリスはコルトパイソンを向けた。

銃声とともに、電光が飛び散った。ピンクポリスが、ドリーム弾で電撃を撃ち返したのである。

(す、凄い……)

ブルーゴージャスは、一瞬戦いを忘れて仲間の速さに息を呑んでいた。あのピンクポリスが、インフィニアの速さについていている。否、インフィニアを上回らん勢いで、インフィニアに肉迫している。

強い。

セイント・エージェントに復活したばかりなのに。

どうして？

まさか、濁川とセックスしたから？

これが、修道生の力？

そんな馬鹿な。

そんな都合のいいこと、あるわけじゃない。

「ブルー！ ホワイト！ 敵を追い出すよ！ ブルーはアローを射って！」

言うが早いか、ピンクボリスが走る。

ブルーゴージャスは弓矢を構えた。アイゼナハに向けて《拘束の矢》を射る。アイゼナハが鞭を振るう。弓矢が落ちる。

（負けるか！）

つづけて《拘束の矢》をお見舞いする。アイゼナハが矢を払い、その隙にピンクボリスが接近する。

ホワイトグラスが、インフィニアにアイスフロストを放った。教会の中に、氷の枝が伸びる。

「アイゼナハ！」

インフィニアが叫んだ時には、ピンクローズがコルトパysonを向けていた。

引き金を引いた。

アイゼナハが鞭を向けたが、間に合わなかった。

ドリーム弾が、アイゼナハに命中した。胸を手で押さえ、てふらつく。

「イツちゃえ、イツちゃえっ！」

ピンクボリスがつづけて引き金を引きまくる。アイゼナハの身体が痙攣する。

「くそっ！」

インフィニアが走った。ホワイトグラスがアイスフロストを放つ。宙に氷の枝が巨大な棘となって伸びる。その間をもの凄いスピードで抜けて、インフィニアはピンクボリスに突っ込んだ。

ピンクボリスが後退する。

「引くぞ！」

アイゼナハの身体を抱いて、教会の床を蹴った。

「逃がすか！」

ピンクボリスがコルトパイソンを向けた。

引き金を引く。

インフィニアはアイゼナハの鞭を奪って振るった。電光が弾丸を打ち払う。インフィニアは割れたステンドグラスから外に飛び出した。ピンクボリスはコルトパイソンをぶっ放したが、すでに暗黒騎士の姿はなかった。

アイゼナハとインフィニアは、聖母教会のある高層ビルから数ブロック離れたビルの屋上にたどり着いたところだった。

聖母教会のあるビルの方を振り返ると、アイゼナハは、「庸……!」

と泣きそうな声を洩らして両手で顔を覆った。涙は流れなかった。いや、流さなかったと言うべきだろう。泣かなかったのは、暗黒騎士としてのプライドである。それでも、心は泣いていた。

デモニア救星団に入団してからずっとかわいがってきた庸を、ポールシフトされてしまったのだ。おまけに、奪還にも失敗した。自分のせいで庸を奪い返せなかった。

「おまえのせいじゃない。あのピンク野郎のせいだ」

とインフィニアは慰めの言葉を掛けた。

「あの野郎、いつの間にか復活してやがった。庸が復活させちまいやがったんだ」

あの野郎とは、ピンクボリスのことである。ピンクボリスは、一度庸によって倒され、セイント・エージェントから一般人に戻されてしまった。だが、またエージェントに復活してしまったのだ。きっと、庸と復活の儀式を行ったに違いない。庸にはそれだけの力がある。

「きっと無理矢理よ。庸は望んでやる人間じゃないわ」

とアイゼナハが言い返す。

「わかってる。あいつが自分からやるものか。あいつは心底、デモニアのために戦うことを望んでいたんだ。第一、進んでわたしたちを裏切るはずがない」

二人は黙った。

庸は、最高の乳揉み係だった。庸に胸を揉まれると、それだけで力がチャージされ、パワーアップできる。アイゼナハもインフィニアも、それで強くなったのだ。

だが、庸は敵側——セイント・エージェント側の手に渡ってしまった。女エージェントは三人。そのうち一人——ピンクボリスが、恐らく庸によってパワーアップされている。

一人パワーアップしただけでも苦戦して、撤退せざるを得なかったのだ。さらに二人パワーアップすれば、太刀打ちできなくなる。

「やっぱり戻るわ。今から戻って庸を奪い返す」

とアイゼナハは屋上の縁の方へ向かった。

「一人で行ってどうする！　もしかしたら三人チャージさせられているかもしれないんだぞ！」

とインフィニアがアイゼナハの腕をつかむ。

「まだわからないでしょ？　時間をおけば、それだけ三人がチャージさせられる可能性が増すのよ！　今なら、一人だけよ！」

「二人では無理だ！　もっと仲間を掻き集めてもう一度襲撃するしかない！」

とインフィニアが強く言い張った。

「とにかく基地に戻って部下を招集する。他の暗黒騎士にも声を掛ける。庸は、何をしても取り返す」

2

ホワイトグラスこと白井京一郎は、ステンドグラスの破片を集めていた。ステンドグラスは、鉛線に沿って色の違うガラスをはめ込んでいる。普通の窓ガラスと違って、体当たりでガラスを割って侵入するのは難しい。鉛線に邪魔されるからだ。きつと、アイゼナハが鞭で電光を放って、鉛線ごとステンドグラスを破壊したのだらう。それだけ相手も、庸を本気で取り返しに来たということだ。

今でも、信じられなかった。

あのグラビディアイドルの理奈が、パワーアップした暗黒騎士の攻撃を躲して、ドリーム弾を撃ち込むなんて——。

エージェントAが庸を奪え、ポールシフトさせると言うわけだ、とホワイトグラスは納得した。

ロボットアニメの世界では、スーパー的な一機
力により戦局が変わる姿が描かれる。だが、リアルな軍隊
の世界でそんなことはない。自分たち正義の味方にしても
同じだと思っていた。

——違っていたのである。乳揉み係というところでもない
スーパー的なバックアップによって、味方の戦闘力
が劇的に上昇し、戦局を変えてしまうのだ。

もしピンクボリスの戦闘力が劇的に変わっていなけれ
ば、自分たちは負けていただろうし、庸を奪い返されてい
ただろう。

だが、素直に凄いと称賛できないのが、京一郎であつ
た。パワーアップのためには、エージェントは胸を揉まれ
たり吸われたりしなければならない。つまり、修道生の庸
がとてもいい思いをするのである。クラスメイトと呼ば
たくない、学校での最低ランク男が——！

しかも、京一郎にも自分の立場というものがある。庸が
スーパー的な存在になれば、自分はどうなるの
か？ 最後まで食べてもらえない漬け物と同じ存在になっ
てしまうではないか。

学院では自分は優待生。濁川は修道生。なのに、エー
ジェントの中では庸の方が重要な存在になってしまう。そ
して自分は——。

3

ピンクボリスの放ったドリーム弾を集めながら、ローズ
スコラこと聖ルミナはピンクボリスに目をやった。

同じグローバル国際学院一年ブロンズ組の優待生で、現
役のグラビアアイドル。

秋元理奈は、身体的には自分とそれほど変わらな
かったはずだ。体育の授業でも、凄い運動神経を見せてい
たわけではない。

なのに。

強化されたあのインフィニアと互角に戦っていた。果敢
に拳を撃ち込んで、凄い速さでドリーム弾を撃っていた。

なぜ？

答えは一つしかない。

庸くんだ。

庸くんは胸をさわってもらったから——それでパワーアップしてしまったのだ。

凄い……とルミナは思った。

庸くん、凄い……。本当に凄い……。やっぱり、庸くんは凄いんだ……。

憧憬が強まると同時に、ルミナは胸の奥がときめいた。

4

ブルーゴージャスこと真王寺詩鶴は、ピンクボリスの放ったドリム弾をすべて拾い集めたところだった。

ホワイトグラスもまだ信じられないような様子だったが、自分も同じだった。ピンクボリスが、あんなに速く動けるなんて。

敵と互角？

ううん。

凌駕していた。

あんなに凄くなるんだ……。乳揉み係一人の力で——。

秋元理奈のことは知っていた。学園の中では上から二番目の階級、優待生で、現役のグラビアアイドル。学園では花のある存在だった。だが、本名を知らなかった頃——かつて自分とともにピンクボリスとして戦っていた時は、あんな格闘技の力を持っていなかった。インフィニアと互角に戦う力はなかったはずだ。それが——。

「もうそのへんでいいわ。あとはわたしがやるから、第二教会に移って。わたしもすぐに追うわ」

と、超乳のサングラスの女性が近づいてきた。パールホワイトの大きな襟の半袖ブラウスに、紺色のデニムのストリートパンツを穿いている。胸は、重さ八キロのスイカを詰め込んだみたいに法外に突出している。

エージェントA——セイント・エージェントたちの親玉である。ここにいるエージェントたちは、皆、彼女の勧誘

を受けて正義の味方になった。

「わたしちも残ります」

と詩鶴は言い張った。

「いいえ。ガラスの割れる音も、銃声も、誰かに聞か
れているはずよ。いくら深夜でも、それが東京でしょ？」

とエージェントAが微笑む。

「あなたたちは誰にも見られてはいけない。戦闘員βを連
れて、第二教会に行きなさい。そこで早く儀式を行いな
さい。パワーアップしたのがピンクボリス一人だけでは、β
を守り切れない。ブルーもローズも、儀式を」

儀式——つまり、庸に胸を揉まれなさいと言っているの
だ。

「わ、わたしは……」

と詩鶴はうつむいた。

詩鶴は処女である。男性と付き合ったこともないし、も
しろん、セックスしたこともない。前戯を許したこともな
い。手を握る以外、身体に触れさせたことがないのだ。

「ピンクボリスの力を見たでしょ？ パワーアップしなけ
れば、あなたたち二人が今度は敗北の元になる。それでも
いいの？」

エージェントAの問い詰めに、詩鶴は答えなかった。い
くら何でも、敵を殲滅するために胸をさわらせるの？と思
う。濁川庸に——グロバリア国際学院で最下層に属する修
道生に——。

「あの男を誘惑なさい。そして、胸を揉んでもらいな
さい。吸ってもらえば、もっと強力なチャージができるけ
ど、揉まれるのでも充分よ」

（誘惑？）

詩鶴はエージェントAに疑惑の目を向けた。

（誘惑って、どういうこと？ まさか、あの男がわたしの
胸をさわりたいようになるように仕掛けるってこと？）

「あの……庸くんがいやだって言ったら……？」

とルミナがおずおずと尋ねた。不安の色が海苔みたいに
顔に張りついている。

「そんなの簡単じゃん。エージェントAが強制すればいい

じゃん」

と理奈が割り込んできた。

「エージェントの復活については強制できるけど、チャージについては無理なの。あなたは幸運だったのよ。何も言わなくても濁川があなたの胸をさわったから。あの誘惑はよかったわ」

とエージェントAが説明する。詩鶴は仰天した。

（誘惑って、濁川がわたしの胸をさわりたくなるように娼婦を演じろってこと!?!）

胸の中を動揺が走り抜ける。エージェントAがつづけた。

「お願いするのでも誘惑するのでもいいけど、とにかく、あの男に胸をさわらせなさい。わたしたちの勝利のためには、あの男が必要なのよ」

詩鶴は答えなかった。ルミナも沈黙している。

（絶対いや）

と詩鶴は思った。

（あの男に胸を見せるなんて、絶対いや。敵を倒すために——強くなるために——女の誇りを捨てて媚びるなんて、絶対いや。わたしは娼婦になるためにエージェントになつたわけじゃない!）

自分は娼婦ではないのだ。自分は真王寺詩鶴であり、女としての権利を持った存在であり、敵を倒すエージェントなのだ。

「早く、行こ」

とピンクボリスが声を掛けた。パワーアップしたせいか、ピンクボリスは生き生きとしている。

この女は、きつと濁川と肉体関係があるのだろう。だから、胸を揉ませるのも吸わせるのも、なんとも思っていないのかもしれない。でも、自分は違う。

「わたしが庸クンを連れてく。ローズ、ホワイトもいっしょに」

とピンクボリスは、離れて様子を見守っていた庸に駆け寄った。

「お、おれは行かない」

と庸が抵抗しようとする。かまわずピンクポリスは庸を抱き抱えた。ローズスコラが扉を開け、秘密の通路から外へ向かう。

「何をしている！ 早く来い！ 警察が来てもいいのか！」

とホワイトグラスが詩鶴に叫ぶ。詩鶴は扉へ向かって走り出した。

5

庸はなさけなかった。

ほんの一時間前まで、自分はデモニア救星団の一員だったのだ。正義の味方なんて、なりたくないと思っていた。なのに。

正義の味方になってしまった。理奈がセント・エージェントに復活する手伝いをさせられ、さらに彼女をパワーアップさせてしまった。アイゼナハとインフィニアが自分の救出に失敗したのは、自分のせいである。せつかく助けに来てくれたのに――。

本当なら、アイゼナハとインフィニアの許に駆け寄りたかった。そのまま二人に拉致されて、ポールシフトを解かれたかった。だが、庸には何もできなかった。庸は、正義の味方のための、ただの乳揉み係だった。

このまま自分はずっと正義の味方なのか、それともまたデモニア救星団の一員に戻るのかはわからない。だが、アイゼナハやインフィニア、そしてかつて自分たちとともに戦ってきたデモニア救星団の仲間たちと戦うのだけはいやだ。

だが、抵抗できない。

今だって逃げ出せずに、ピンクポリス――正体は同じクラスの爆乳アイドル、秋元理奈――に捕まえられたままなのだから。抵抗しようとしても、身体が言うことを聴かないのだ。

悔しかった。

自分の無力さが、自分の不甲斐なさが――。

おれはこれからどうなるんだろう？ おれはこれからどうすればいいんだろう？

戻りたい？

できれば、戻りたい。

本当は絶対に戻りたい。でも、身体が――。

6

第二教会も、高層ビルの八階にあった。アイゼナハとインフィニアは、まだ近くにいるのだろうか？ と庸は思った。これで自分の居場所はわからなくなってしまったかもしれない。

入り口はまるで美容サロンの受け付けだった。デモニア救星団の地下基地が懐かしい。あそこに戻りたいと思う。

「行こう」

理奈に腕を引っ張られて、庸は奥に入った。声を、失った。

広さ三十畳ほどの広いリビングには、コの字型にソファが並び、壁一面に窓ガラスが張られていた。その向こうに見えるのは、東京の夜景である。リビングの隣には十人ほどが座れる長テーブルが置かれたダイニングルームがある。

客室は六つ用意されていた。そのうちの一つは、プールつきである。三人で寝られそうな広いベッドにソファセットがあり、そこからすぐプライベートプールに入れるようになっていた。

「驚いた？」

とエージェントAが部屋に入ってきた。

「あ、あの、ここは……」

とローズスコラが入って、立ち止まった。まだ変身を解いていない。庸には今でもまだ、彼女が同じ中学出身で同じクラスの聖ルミナであることが信じられない。

「いざという時のための避難所よ」

エージェントAが答える。

「でも、これって……」

「避難所がみずばらしい感じじゃ、神経がびりびりするでしょう？」

とエーリエントAが答える。

「ブルー、ローズ、ピンクはここに。ブルーとローズは戦闘員βと儀式を済ませなさい。ホワイトはわたしといっしょに二階へ」

庸には聞こえないように囁いてエーリエントAが退室し、ホワイトグラスもついていった。プールつきの部屋には、庸とピンクボリス、ローズスコラ、ブルーゴージャスが残った。

（正義の味方って、こんな凄い部屋を持ってたのか……）

庸は驚嘆した。正義の味方という豪華さから縁遠いように思えるが、そうではなかったらしい。

庸はクラリツサのことを思いだした。クラリツサは、学費を出せない庸に代わって、自分のポケットマネーから学費を出せるほどの、大金持ちである。彼女の屋敷も、こんなふうな感じだったのだろうか？ エーリエントたちに誘拐されることがなければ、庸はクラリツサの豪邸で一晚泊まっていたはずなのだ。そして朝には、暗黒騎士になっていた。

ローズスコラこと聖ルミナは凍りついていた。ブルーゴージャスも固まっている。一人だけ動いているのは、ピンクボリスこと秋元理奈だった。リビングに設けられたクローゼットを次から次へと開けている。

「あ、水着」

と理奈が水着を取り出した。

「色々ある。結構サイズ違いもある。これを着ろってことかな？」

とじゃんじゃん水着を取り出している。

「あの、ピンク……」

「何してんの？ 着替えないの？」

と理奈が二人の女性エーリエントに尋ねた。

「え？」

とブルーゴージャスが聞き返す。

「だって、庸クンに胸さわってもらわなきゃ。みんな強く

ならないよ」

（何!? おれ、みんなをさわるの?）

庸はうろたえた。

うれいような、しかし、突然すぎて困ってしまうような……。

（いやいや! たとえボールシフトされても、心はデモニア救星団の一員! 敵を強化するような真似はしないぞ!）

「早く」

と理奈が二人を促した。

「わたしは――」

とブルーゴージャスが怯む。

「やんないの?」

と理奈はブルーゴージャスに言葉の矢を向けた。疑問形だが、半ば、命令である。

「わ、わたし、やる」

と言いだしたのはルミナの方だった。

「つ、強くなりたいもん。それに……濁川くんだから……」

と語尾がごによごよになった。顔は真っ赤である。

ボールシフトの際に庸をパイズリしているといっても、今日がパイズリ初体験。一度のパイズリで羞恥心が吹っ飛ぶものではない。女の羞恥心は砂上の楼閣ではないのだ。

「色々あるよ。エッチいのもあるし、スクール水着もあるし」

と理奈が取り出す。

セックス経験者で庸とは何度もしたことのある理奈は、余裕である。すっかり砕けている。

ルミナは――自分にパイズリしてたけど、きつと処女のはずだ。中学時代から地味だったし、遊び歩くタイプの女ではない。彼氏がいるという噂も聞いたことがない。

ブルーゴージャスも、たぶん、処女だろう。シャコ貝のように表情を硬く閉ざしている。彼女も、自分と同じ高校生なのだろうか? それとも、女子大生? まさか、自分と同じグローバル国際学院?

（おれ、さわるの?）

庸は三人の女たちを見た。

（さわってみたい……）

一瞬、男の欲望が芽生え、

（いやいやいや！）

庸は欲望を打ち消した。

（さわんないぞ。絶対さわんない。おれ、デモニアの味方だから）

「これにしようよ」

と理奈が水着を一つ手に取って、ルミナに渡そうとした。

「え、これ……？」

とルミナが引く。

「だって、庸クンを誘惑しなきゃ。庸クンがその気になってくれないと、さわってもらえないよ」

「でも……」

「早く着替えてきて」

理奈に押し切られて、ルミナは客室へと着替えに走った。

（何を選んだんだろう？）

少し気になる。が、すぐに、

（どんな水着を着てきたって、答えは同じだ。おれ、協力しないから）

庸は決意を固め直した。

「庸クンのもあるよ」

と理奈が海パンを持ってきた。

「どれがいい？」

「おれ——」

「お願い、助けて」

と理奈が庸を見る。グラビアアイドルをしているだけに、上目づかいで見つめられるだけでドキッとする。

（でも、色香に惑わされるものか……！）

「毎日エッチさせてあげる。毎日バイズリしてあげるし、毎日オッパイさわらせてあげる。学校でもしてあげる」

と理奈が囁いた。
ゾクッとした。

グラビアアイドルを毎日自由に？

今までも毎日のように基地でエッチしていたし、学校でエッチしたこともあるけど、これから毎日……？

いやいやいや。やっぱりだめ。

「おれ——」

「着替えよ♪」

理奈が庸の手を引いた。隣の部屋に入る。

「先に着替えるね」

と理奈が背中を向けて指輪をひねった。瞬間的にコスチュームが消えて、オーバーオールが現れた。Tシャツは着ていない。裸の上からオーバーオールである。オーバーオールの隙間から、グラビアアイドルの生乳が覗いている。

若々しいIカップの半球の輪郭は、完全に露わになっていた。あまりに隙のある格好だった。オーバーオールの隙間に手をつまめば、簡単にこの生乳をものにすることができのだ——アイドルの生乳を！

庸はいきおい欲望を覚えた。

理奈はすでに庸によってパワーアップしている。いまさらエッチなことをしても、アイゼナハやインフィニアに迷惑をかけることはあるまい。

庸は後ろから抱きつき、オーバーオールの中に手をつまんだ。隙間だらけのオーバーオールの生地の下に、庸の手が滑り込む。すべすべした手触り——。庸は、アイドルのIカップ乳をむっちりつつかんだ。

「あん、庸クンったら♪ オッパイは、あ・と」

「今さわりたい」

と夢中でオッパイを揉みまくる。グラビアアイドルのIカップ乳がやわらかく手の中でひしゃげた。乳肌が指に吸いつき、若々しい弾力が十指の中で喘ぐように弾ける。

「あん……だゝめ、ローズをさわるのが先♪ わたし、着替えるんだから」

と理奈が宥めにかかるが、庸は言うことを聴かない。勃起したペニスを押しつけたまま、両手の中のふくらみをこねまわす。

同い年の女子高生の乳房は、むっちりしていてよく手に吸いついた。手にしているだけで気持ちいい。さらに揉みまくると、やわらかさといっしょに充滿した乳房の張りと弾力が指を弾き返してきて、それだけで射精しそうになる。なんといっても、相手は現役のグラビアアイドルなのだ。千人単位の男たちがさわりたいと願っている相手なのだ。その理奈のオッパイを、思う存分に揉みしだいているのだ。

「あん…もう♪ ビキニに着替えさせて♪」

と理奈がオーバーオールの上から庸の手をつかんだ。

「だって、さわりたい」

「んもう、庸くんは」

とかわいくふくれる理奈の背後から、執拗にバストをこねまわす。瑞々しい豊球に、気持ちよく指が沈み込んでいく。指が食い込むにつれてオッパイが悲鳴を上げるかのようにはしゃげて、そして抵抗と反発感を指にまき散らす。乳房に受け止められながら指を押し返される心地よい感覚に、庸はさらに興奮し、ペニスを勃起させながら淫乳をこねまわした。

「ああん、もう、庸クンッ」

執拗にバストをこねまわされて、理奈がもがいた。

「理奈ちゃんのおっぱい、気持ちいい」

「だうめ、聖さんのオッパイさわらなきゃ」

「理奈ちゃんのおっぱいの方がいい」

と駄々をこねながら、乳首を指でつまむ。敏感に尖った先端をコリコリとつままれて、理奈が甘い声を洩らして身を揺さぶった。

「んもう、したいの？」

と悶えながら理奈が庸の手首をつかむ。が、阻止には至らない。庸は両手で豊球をますます揉みしだいていく。乳球がひしゃげ、乳房の重さと反発力とを指に伝えるたびに、興奮が込み上げて累積していく。



「あん、もう……こっち向いて。パイズリしてあげるから」

「まだ胸さわりたい」

と執拗に乳房をこねまわす。乳首を指でこすりながら、同時に豊球を揉みしだいていく。

「ああん、もう、庸クンったらあ……パイズリしないの？」

感じて甘ったるい声を上げながら、理奈が尋ねる。

「オッパイしやぶったら」

答えると、理奈が身体を反転させた。庸はすぐにオーパールの隙間から乳房を取り出してしゃぶりついた。

「あん♪」

理奈が手を伸ばして庸のペニスをしごいてきた。思わず腰を引く。

「逃げてる♪」

さらに理奈がペニスをしごく。理奈の指は細くしなやかで、しゅっしゅっとこすられるだけでイキそうになる。

（理奈ちゃんの手、気持ちいい……）

呻きながら、庸は理奈の乳房に顔を押しつけた。優しい、やわらかい豊球がひしゃげながら、頬に密着する。女性の中で最もまろやかな、きめ細やかな乳肌が、庸の顔に吸いついた。コリコリにしこった乳首を軽く舌で払うと、理奈がピクンピクンと身体をふるわせる。

「そんなことしたら、手でイカせちゃうから」

と理奈が手コキを加速させる。チンポがとけそうになり、

「理奈ちゃんっ……」

庸はさらに腰を引いて逃げようとした。だが、理奈の手が追いかけてくる。細い指が、加速とともに絶頂へと追い込んでくる。

（やば、イキそう……）

射精の予感を覚えながら庸はIカップの豊球を吸引した。さらに理奈の手コキストロークが、凶悪なスピードに跳ね上がる。

「んぐう！」

庸はもがいた。

（やばい……！ 出る……！）

ムチムチのオッパイを吸いながら、庸は腰を引いた。だが、逃すかとばかりに理奈の手が追いかける。アイドルの手はしつこく、いやらしい。

「んぐう……」

（だめ、理奈ちゃん、イク……！）

庸は思い切り射精しそうになった。相手は四枚のDVDを出しているグラビアアイドルなのだ。

DVDを見る者たちは、誰もが理奈とセックスしたいと思っている。その、みんながしたいと欲情しているグラビアアイドルのオッパイを吸いながら、グラビアアイドルに手コキされているのだ。

「あん……逃げてもだめなんだから……イカせちゃう……！」

理奈の手が一気にスピードアップし、庸は腰を振った。クネクネと腰を左右に揺さぶってグラビアアイドルの手から逃れようとする。だが、理奈の手コキは悪魔のストロークだった。逃げるペニスを完璧に手中に収めて、最も心地よいリズムで高速でしごいてきたのだ。

（んあっ……イク……!!）

庸は腰を振りながら、グラビアアイドルの手の中に射精していた。白いどろどろの濁液が理奈の手には噴射する。

「あん♪ イッちゃった♪」

とうれしそうに声を上げながら、さらに理奈の手がペニスをしごく。

庸は呻いた。また腰を躍らせる。

「もっとうして♪ ほ・ら♪」

とさらに手コキストロークを浴びせて精液を搾り立てる。庸はまた呻きながら射精した。

「オッパイ吸って♪」

理奈に言われて、腰をふるわせながら夢中でオッパイを吸引した。理奈が甘い声を上げる。

アイドルのオッパイを吸いながらアイドルに手コキされるのは、最高の気分だった。相手が人気の爆乳アイドルだ

けに、オッパイを吸うだけでも、手でしごかれるだけでも
気持ちよくなってしまう。

「凄いい、ねばねば♪」

と理奈が表情を弾ませた。DVDでも見たことがないほど、
目元が優しく、やわらかい。愛情と淫欲とが入り交
じった表情だ。

「パイズリ、する？」

グラビアアイドルに聞かれて、庸はうなずいた。

理奈の手は気持ちよかった。でも、やっぱりIカップの
オッパイでイキたい。グラビアアイドルのオッパイで果て
たい。

理奈が庸から少し離れ、膝を突いた。ズボンとトランク
スを下ろすと、勢いよくペニスが飛び出した。射精したば
かりなのに、すでに発射台のロケットのように上を向いて
いる。

理奈がオーバールのストラップを外した。Iカップ
の豊乳が露わになる。高校生にして、すでに爛熟という言
葉が似合いそうなほど、重々しくたつぷりとふくらんだ房
が双つ、並んでいる。

理奈がペニスをつかんだ。両乳で挟み込む。肉棒の両側
から瑞々しい肌が密着し、さらにやわらかいふくらみが押
しつけられる。ぎゅうつと心地よい圧力が加わる。

つづいて、理奈はIカップ乳を揺さぶりはじめた。やわ
らかい豊球が瑞々しい乳肌を押しつけながら、たつぷりと
ペニスをこすっていく。

早くも庸は呻いた。

理奈は、撮影に出かけていない時は毎日のように庸をパ
イズリしていたので、すっかりパイズリが上手になってい
た。どうペニスを締めつけて、どう揺さぶれば庸が気持ち
よくなってしまうのか。理奈は熟知している。

「くす。もうイッちゃうの？」

理奈が笑みを浮かべて、挑発してきた。

「だって、理奈ちゃんのパイズリ、気持ちいい……」

「庸くんが感じやすいだけ♪」

と応えて、さらにバストを弾ませる。両乳がダイナミッ

クにばいんばいんとバウンドをくり返して、ペニスをしごいてくる。

「あぁっ……」

庸は呻いた。

爆乳の女の子にパイズリしてもらえるだけでも気持ちいいのに、相手がグラビアアイドルとなると余計に気持ちいい。

「お口でも責めたらどうなるかなあ♪」

言うが早いか、理奈は龟头を咥え込んできた。軽く先端を口に含んで、舌先を押しつける。

（やばいつ）

思った時には遅かった。舌が前後に激しくふるえはじめたのである。

ペニスの両側からは、パイズリの刺激。

龟头には、舌の刺激。

ダブルの責めに、庸は呻いた。ちりちりした快感の粒子が激しく上昇し、肉茎に充満していく。理奈が、ばいんばいんとバストを弾ませる。

「理奈ちゃん、それ、やばいつ……」

「何がやばいの？」

庸のオチンチンを咥えたまま、爆乳アイドルがさらに乳房を揺さぶりまくる。アイドルのIカップ弾が、さらにねちっこくいやらしく乳肌をこすりつけて、ペニスを颯り立てる。

性感が一気に上昇した。

やばい。

イク。

ほんとイツちゃう。

こらえようとした瞬間、庸の感じ具合を完全に見通しているかのように、理奈がペニスを吸引した。舌先で龟头をふるわせながら、同時に龟头を吸い立てる。

「あぁっ、だめ、理奈ちゃんっ……!」

「我慢ひたら、らめえ♪」

さらに吸引の音が鳴り響き、パイズリストロークが加速した。乳房が猛烈に揺れ、猛然とペニスをこすり立てる。

庸は首を横に振った。イキそうになって、腰が引く。

「逃げちゃ、らめ〜♪」

理奈が首を横に振った。びちゃびちゃと舌で亀頭を叩く。左右に揺れながら、敏感な亀頭を叩いてくる。そうして、乳房でこすり立てるのだ。

「あぁっ……!!」

ついに、庸は腰をひくつかせながら、アイドルの口腔に射精していた。爆乳アイドルが、一心不乱に同級生の精液を飲み込んでいく。

嚥下の音が鳴った。

庸は腰をふるわせて、さらに射精した。理奈が再びペニスを吸引する。吸引しながら、もっと出して♪とおねだりするかのようになり、Iカップ乳をこすりつける。ねばっこい乳房がペニスに密着し、精液を搾り立てる。

庸はまた腰をひくつかせて射精した。ヒクヒクと腰が前後に往復をくり返す。理奈の喉が鳴る。

（理奈ちゃん……）

庸は宙を見た。

（やっぱり、理奈ちゃんのオッパイ、気持ちいい……）

恍惚に浸りかけたところで、理奈が深くペニスを咥え込んで、フェラチオストロークを浴びせてきた。リズムカルに顔を前後に動かして、同級生の肉棒をしごいてくる。

庸は唸った。

理奈はパイズリも巧いが、フェラチオも巧い。

「理奈ちゃん、出るっ……!!」

爆乳アイドルのフェラチオご奉仕が激しくなった。さらに速いピッチで首を前後に往復させて、庸の精液を搾りにかかると。

腰が砕けた。あまりの快感に、思わず腰を引く。

その機を、理奈は見逃さなかった。さらにストロークを加速させて、アイドルの口でペニスをしごいてきたのだ。

（だめえ……!!）

庸はまた、呻き声とともに射精していた。一度パイズリで射精させられたはずなのに、同じくらいの量の精液が、爆乳アイドルの口腔に流れ込んでいく。

（理奈ちゃんのフエラ、気持ちいい……）

庸はぶるっと腰をふるわせた。ふるわせながら、宙を見た。正義の味方にされてしまったのに、今この瞬間だけは、自分はまだデモニア救星団の一員で理奈にご奉仕させているかのような錯覚を、庸は覚えていた。

客室でルミナは葛藤していた。

理奈から手渡された水着は、一見すると何の変哲もないスクール水着だった。受け取った時にはほっとしたのだが、いざ着てみるとドキドキしてしまう。

（こんなところにこんなのが二つもついてる……。これ、ジジジ……ってしたら……）

そう思うと、赤面しそうになる。

もっとおとなしいもの、普通のものと思ってリビングに戻ってみたが、クローゼットには大胆なものしかなかった。理奈は一番恥ずかしいものを選んでくれたのだ。

（これを着て庸くんの前に出るしかないの……!?!）

葛藤していると、

「本当にやるの……?」

ブルーゴージャス——同じグロバリア国際学院に通う二年生、真王寺詩鶴が後ろに立っていた。いかにも不安そうな表情である。

詩鶴は、学校では貴族だ。特別生という最上位の位置にランクしている。高い車に乗って、特別生専用の玄関で昇降して、いつも修道生の出迎えを受ける。学校を出る時にも、修道生の送迎を受ける。

だが——今の彼女は、ただの一人の少女だった。見知らぬ土地に置いてきぼりにされた幼女のように、学園の貴族といった雰囲気はどこにもない。不安と心配が彼女の気高さを完全に奪ってしまっている。

「強くなるために、胸をさわらせるの?」

詩鶴が尋ねた。咎める調子が入っていた。

（強くなるためだけ……?）

ルミナは引っこかった。

前に、庸くんのが好きだって、みんなの前で告白したのに、なんでそんなことを言うんだろう?

「あの修道生が凄いののはわかるけど、でも、強くなるために胸をさわらせるなんて……」

さらに咎める口調が強まる。

（庸くんのが嫌いなのか？）

ルミナは思った。

だから、咎めている？

「やっぱり間違ってると思う……」

と詩鶴が言葉を継いだ。強くなるために胸をさわらせるのは、間違っていると言いたいらしい。

どうしてそれをわたしに言うの？ とルミナは思った。わたし、庸くんのこと好きだって、みんなに言ったじゃない。真王寺さんにも言ったじゃない。なのに、どうして？ それに、ピンクボリスは、庸くんを胸をさわってもらったおかげで、あんなに強くなったんだよ？ 強くなりたくないの？

「ピンク一人だけに任せるんですか？」

ルミナは尋ねた。

「みんなでカバーすれば——」

「濁川くんのこと、嫌いなんですか？ 濁川くんを胸さわられるの、いやなんですか？」

ルミナは踏み込んだ。

詩鶴が黙る。

（嫌いなんだ）

詩鶴は、庸のことを「修道生」と言っていた。個人名ではなく階級名を言うのは、好きではない証拠である。

「強くないと、デモニアを倒せない。それに、せっかく濁川くんを奪って、せっかく味方にしたんだもん」

「あの修道生、きっとピンクとできてるのよ？ それでも——」

（どうしてそんなことを言うの!？）

感情がわっと込み上げて、ルミナは泣きそうになった。そんなの、わかってる。

ピンクボリスは、庸くんと凄く親しげだった。普通の親密さでないのは自分にだってわかる。ピンクボリスは、きっと庸くんのが好きなのだ。

でも？

だから？

好きな気持ちをすぐには止められない。自分は庸くんのことが好きだ。今だって、好きなのだ。

「わたし、濁川くんのこと、好きだもん。濁川くんだったら——」

胸を自由にされてもいい。

他の人なら、絶対胸をさわらせてたくない。強くなるためであつても、絶対、さわらせてたくない。

でも、庸くんならば——。もうパイズリはしてしまったのだ。胸だって——。

ルミナは葛藤を振り切って、部屋を出た。

2

気持ちいい射精をしたからといって、それで男は黙従するわけではない。濁川庸も同じであつた。

（理奈ちゃんとはエッチしたけど、だからって聖の胸をさわるわけには……）

と、理奈に引率されながら庸は決意を新たにしていた。

たとえ正義の味方にされても、心はデモニア救星団。自分の心は、同じ団員たちとアイゼナハとインフィニアともにある。

あ、もちろんデモニア星人ナースのルクレツィアとも、同級生のクラリツサとも、ともに——。

ブルーには、背中を向けてルミナが浸かっていた。紺色の生地が見える。地味な性格の聖ルミナのことだ、きっとスクール水着にしたのだろう。

（なんだ、スクール水着か）

一瞬、庸はがっかりした。がっかりしてから、

（何を、おれ、がっかりしてるんだよ。期待してたのか？）

と自分に突っ込んだ。

（おれは聖の胸は揉まないんだぞ。これ以上、デモニアが不利になるような真似をするものか）

庸は己を引き締め直した。

（たとえボールシフトされたといっても、心の中ではおれはデモニア救星団。聖に味方するわけにはいかない）

煽情的なコスチュームでない方が、我慢できるからありがたいというものだ。

「ローズ、こっち向いて」

聖ルミナが、ゆっくりと身体を向けた。

（大丈夫、大丈夫。スクール水着だから、破壊力はない。

たとえ爆乳といえど――）

庸は一瞬、口を半開きにした。

確かに、ルミナが身に着けていたのは紺色のスタンダードなスクール水着だった。標準的なデザインのものである。だが、胸元からウエストに掛けて、ファスナーが付いていたのだ。しかも、ファスナーを開閉する時に引っ張るスライダーは、二つも付いていた。

庸の視線は、ファスナーの噛み合わせの部分――務歯に吸い寄せられた。エレメントは、鎖骨の間から左右の乳房の真ん中を経て、お臍回りまでつづいている。パストの部分で隆起しているのがいやらしい。

（まさか、開けられるの？）

ファスナーがあるからには、開けられるに違いない。ファスナーが下りると同時に白い胸の谷間が姿を見せて――。

（やばいやばいやばい！ 想像するな、おれ！）

躍起になって庸が煩惱を消そうとしている間に、理奈がプールに入った。ルミナの背後に立つ。

「ファスナーがついてるの♪ いいでしょ？」

と理奈が言う。

庸は無言である。

（いいけど、よくない。いいけど、やばい）

理奈がスライダーに手を掛けた。上下二つあるスライダーのうち、下の方のスライダーを引き下ろした。

（い!? 下ろすの!?）

開いたエレメントの間から、肌色が覗く。さらにファスナーが下ろされると、紺色の生地が左右に開いた。同時に

双つの乳房が寄せ合ってできた深い谷間が姿を見せた。

(おっきい……!)

庸は思わず釘付けになった。突然露わになった谷間は、まるでやわらかい乳肉のクレヴァスだった。谷間の奥へと向かうほど、陰影が濃くなっている。指を突っ込んだら、ぎゅうっと強く挟まれそうだった。

気持ちよさそうな谷間だった。そして、気持ちよさそうなオッパイだった。むっちりとした豊満に充滿した双球が、互いに寄せ合いながら立体的に盛り上がっている。非常に高さとボリュームのある爆乳である。谷間にペニスを突っ込んだら、どれだけ気持ちいいことだろう。

(パイズリしたい……)

と欲望が起き上がった。ポールシフトされる時、初めてルミナからパイズリをされたが、気持ちよかった。本当に凄いオッパイだった……。

陶酔の記憶を思い出しかけて、

(だめだめだめ! パイズリしたら――)

庸は自分を制止した。

「おっきいでしょ?」

と理奈がルミナの後ろから声を掛けた。

(いや。全然大きくない)

自分に嘘の冷水を浴びせる。

「聖さん、一〇〇センチあるんだよ♪」

理奈の言葉に、冷水が一瞬で蒸発した。

(ひゃ、一〇〇センチ!?)

「そ、そんなにない……」

とルミナが真っ赤になって否定する。

「嘘。身体測定の時、一メートル越えだってみんな騒いだじゃん。いくつだったっけ? 庸クンに教えてあげたら? きっと庸クン、さわってくれるよ」

ルミナがうつむく。

庸は唾を呑んだ。

「いったい、いくつあるのだろう。本当に一〇〇センチあるのか?」

(って、何を気になってるんだ、おれは! 理奈の術中に

はまってるじゃないか！ 耳を塞げ、おれ！ バストサイズなんか気にするな！ 敵をパワーアップしてたまるものか！

欲望を打ち消そうとしたところで、

「Iカップあるんだよ」

と理奈がカップサイズを明かした。

（Iカップ……！）

もう一度パイズリしたいという欲望が、さらに強まった。目の前に谷間があるのだ。そして、恐らくルミナは拒まない。ならば、チンポを突っ込んでパイズリ――。

「パイズリしてあげないの？」

と理奈が促した。

「さわるのはパワーアップにつながっちゃうからいやかもしれないけど、パイズリなら関係ないでしょ？」

（あれ？ そうだったっけ？）

庸は記憶を掘り起こした。

デモニア救星団でアイゼナハ隊の戦闘員になる前は、庸は乳揉み係だった。アイゼナハのバストを揉んで、アイゼナハをパワーアップする役目だった。アイゼナハにいっぱいパイズリはしたけど、それはアイゼナハが許してくれたからで、庸はパイズリ係ではなかった。

（つてことは、パイズリしても、アイゼナハとインフィニアを苦境に陥れない？ だったら、パイズリ――）

（いやいや！）

庸は今度は頭の中ではなく、物理的に首を横に振った。

おれの心はデモニアにあり。セイント・エージェントの味方をしてたまるものか……！

理奈が、ルミナの双乳に両側から手を触れた。真ん中に向かって双球を寄せる。乳房がたわんで、谷間がさらに深く、縦に長く走った。

（凄いオッパイ……！ やっぱパイズリしたい……！）

欲望がさらに爆発しそうになった。

パイズリしても聖ルミナがパワーアップするわけではないのなら、パイズリしてもいいではないか。いや、むしろパイズリすべきだ。

だが――。

庸は横を向いた。

パイズリしたら、絶対さわりたくなるに決まっている。

そうしたら、自分を抑えられない。

理奈がため息をついた。

「そっか。じゃあ、仕方ないね」

あっさり理奈は折れた。

（え？ おれ、パイズリしなくてもいいの？ もう聖にパイズリできない？）

ほっとする気分よりも、残念な気分が強く起こった。葛

藤から解放されたはずなのに、口惜しい。

（おれ、めっちゃめっちゃ好機を逃した？）

後悔を始めたところで、理奈がルミナに囁いた。ルミナが驚愕の表情を向ける。理奈がまた囁き、少し考えてルミナがうなずいた。

「じゃ♪」

と理奈はプールの中を横切ってプールから出た。ルミナもプールから上がる。

（え？ 出ちゃうの？ パイズリ、終わり？）

プールのある寝室から、理奈とルミナは出ていった。あとにはプールに一人――庸だけが残った。

突き放された欲望と孤独が、胸の奥でいやな後味を滲ませた。臨界へ向かって膨張を始めていた欲望が、あつと言う間に収束し、冷え込んだ後悔が代わりに忍び込んできた。

自分は馬鹿をやったのではないか。パイズリしても問題がないのなら、パイズリすればよかったのに。なぜ痩せ我慢なんかしたのか。自分は馬鹿ではないのか。

パイズリしておけばよかった、と庸は思った。それで終わっておけば、今頃は――。

ルミナは理奈に連れられてリビングに戻ったところだった。庸をプールに残して寝室を出るのはかわいそうな感じ

がして忍びなかったが、これも作戦である。それでも、やっぱり庸に悪いことをした気がしてならない。

「濁川くん、平気かな？」

クローゼットの中を漁る理奈に、ルミナは声を掛けた。

「平気だよ」

「でも、かわいそう……」

「ローズがもっとエッチな水着を着てあげたら、きっと喜んでくれるよ」

ルミナはうなずいた。

がんばってジップアップの競泳水着を着てみたのだけれど、庸はのってこなかった。

「濁川くん、わたしに興味ないのかな……」

小さい声でつぶやく。理奈がくると振り向いた。

「そんなわけないじゃん。庸くん、巨乳好きだもん。凄くいさわりたそうな顔をしてたよ。パイズリしたいって顔してた。耐えてた。デモニアの暗黒騎士たちのためにこらえてるんだよ」

そんなに敵の女性の方がいいのかな、とルミナは思う。自分よりも？

「これにしよう」

と理奈が水着を手にとった。

「え？ それ？」

見せられて、ルミナは思わず戸惑った。さっきのより、全然面積が小さい。

「小さすぎるよ」

「小さすぎるからいいの。庸くん、葛藤してんだから。葛藤を突き破るためには思い切りエロいのを着るしかないの。ローズだって、パワーアップしたいでしょ？」

ルミナはうつむいた。

もちろん、パワーアップはしたい。でも――。

わたしの胸なんかさわりたくないなんて拒否られて、傷つきたくもない。

「拒否られたらどうしようって考えてんだ」

と理奈が図星を言い当ててきた。

「平気だって。さっきさわらなかったのは、ローズのオッ

パイがいやなんじゃなくて、二人の暗黒騎士を不利な目に遭わせたくないからだ。庸クンが下った時に、二人がかわいがってくれたから、二人に対して恩を仇で返したくないって思ってるんだ。だから、これを着るの」と理奈は熱弁した。

「今度こそ、庸クン、ローズの胸をさわるよ」

4

庸は温水プールの中で後悔していた。

やはり自分とはんでもない好機を逃したのではない。自分が何もしなかったから、理奈もルミナも怒って寢室を出てしまったのではない。そして二度と戻ってこないのではない。

（さわつときやよかった……せめて、パイズリを……）

ふいに足音が近づいて理奈が戻ってきた。理奈の後ろには、上半身をバスタオルで覆ったルミナもいる。

二人がプールに入ってきた。

（戻ってきてくれた！）

少しうれしくなる。別に自分の行為に——行為をしなかったという意味では非行為に——怒ったというわけではなさそうだ。でも、聖はどうしてバスタオルなんか掛けているのだろう？

「ね。身体測定してみない？」

と突然理奈が持ちかけてきた。

（身体測定？）

「オッパイを計るの。計るだけだったら、別にパワーアップにはならないでしょ？」

庸は沈黙した。

身体測定は男のロマンである。男は数字に引きつけられる。登山の話をする時でも、男は山の高さ——数字を口にする。女体を見る際にも、スリーサイズはチェックする。

身体測定は、女の肉体的性能を——性的魅力を——数値化する。その数値化の絶好の機会に、多くの男が立ち会いたいと願っている。だが、それは永遠に叶えられぬ夢であ

る。透明人間か養護教諭にでもならない限り、無理な話だ。

でも——理奈は計っていいというのだ。

(は、計るって……マ、マジ?)

理奈がルミナの背後に回り、バスタオルを剥ぎ取った。庸は凍りついた。

ルミナが着ていたのは、極小のマイクロビキニだったのだ。緑色のビキニの左からも右からも、乳房がはみ出している。ビキニの上からも下からも、乳肉がはみ出している。大きすぎる乳房に対して、ビキニが小さすぎるのである。

乳房の輪郭は、完全に見えていた。輪郭はどこもビキニに覆われていない。乳房の真ん中をホルターネックのビキニがかりうじて覆っているだけである。ビキニは乳輪を隠す程度の役割しかこなしていない。

半球の形をした、実に美しい、立体的な爆乳だった。まるで双つのメロンが並んだように、双つの豊球が胸に並んでいる。

(聖の胸、凄すぎる……)

興奮する中、

「はい♪」

と理奈が何やら庸に手渡した。手を広げると、巻き尺だった。

「ローズのオッパイを計ってあげて。ビキニの上からでいいから」

ビキニの上から!? 聖のバストを……!?

(生乳じゃないのか……)

というがっかり感と同時に、

(ビキニでよかった……)

という安堵が込み上げた。遅れて、理性が頭をもたげた。

(その手には乗らないぞ。計らせて、おれにさわらせるつもりだな。そんな目論見——)

「ローズは計ってもいいって言ってるよ。あとは庸くんが計るだけ。まさか、それもできないって言うつもり?」

そう言い寄られると、理性が揺らいだ。

バスト測定は男のロマンだ。そのロマンを無理矢理実現しようとする、犯罪となる。だが、今なら、それが犯罪となることなく実現できるのだ。

心臓はバクバク鳴っていた。耳の近くでごうごうと血流が唸っている。

「本当に計るの？」

とルミナが不安そうに理奈に尋ねた。バスト測定を喜ぶ女は少ない。

「そ。計るよ」

と答えて、理奈が耳打ちする。ルミナがうなずく。少し恥ずかしそうだ。

（おれ、本当に計るのか？）

庸は自問した。

女の身体測定を盗み見るのは、男の叶わぬロマン。自ら女を身体測定するのは——特にバストを測定するのは——ロマンの中のロマン、夢の中の夢である。こんなチャンスはめったにない。否、二度とないかもしれない。心臓は激しく鳴動していた。本当に口から心臓が飛び出しそうである。興奮して、口はカラカラだ。

「ほら、計って」

理奈が促した。まるで破壊へ向かって暴走を始めた内燃機関みたいに、庸の心臓は爆走にシフトアップした。

（い、い、いいのか……？ 本当に計っていいのか!?）

ルミナが赤面してうつむいた。諦めたように胸を突き出してみせる。黄緑色の小さな極小のピキニの下から、ツンと高く突き出す豊かな双つのふくらみ——。

（は、は、計るぞ……!）

込み上げる欲望に衝き動かされそうになりながら、庸はルミナの背中にメジャーを回した。あまりのバストの突出度に、庸の胸に乳房が触れそうになる。

（どさくさに密着したい……!）

興奮と欲望に狂いそうになりながら、ルミナの背中にメジャーを回した瞬間、

（今、ここで抱き締めてオッパイの感触を確かめる？）

欲望の囁きが聞こえた。

（いやいやいや！　いくら何でも、それは！）

庸は欲望を振り切って、まずアンダーバストの測定に掛かった。メジャーを前にやって交差させる。

穢れない、まだ自分しかさわったことのない同級生のバストが、目の前に双つ並んでいる。まるで愛撫を待つ、快感の双子である。少し首を伸ばせば、オッパイをしゃぶれそう。

（本当に凄い……）

垂涎の思いで、庸は目盛りを読んだ。

七〇・四。

ちょうど身体がばつんばつんになる女子高生からすれば、超ナイスバディである。

（バストは――）

いよいよ待望のトップバストの測定に庸は取りかかった。ちょうどバストの後ろ側にメジャーの紐を回して、「0」の目盛りを手前に持ってくる。

小さな極小ビキニに覆われた、双つの立体的なムチムチ豊球――。その上に、少し食い込む形でメジャーが触れる。

（オッパイ、凄い……）

興奮しながら、庸はメジャーの数値を読んだ。

一〇一・三――。

（本当に一〇〇センチある……！）

トップバストは一〇一・三。アンダーバストは七〇・四。

その差、三〇・九センチ――。

トップとアンダーの差が約三〇センチがIカップだから、確かにIカップだ！　もう少し大きくなれば、Jカップである。

（でかい！　めっちゃめっちゃでかい！　一〇〇センチあるよ！　さわりたいっ！）

欲望が最大ボリュームでシャウトした。

理奈のバストでも、一〇〇センチはない。アイゼナハとインフィニアのバストも、一〇〇センチ未満だろう。

でも、ルミナのバストは――。

庸は、わざとメジャーを引っ張ってみた。細い紐が、バストにめり込む。乳球に沈み込み、さらに乳輪にも食い込んでいく。そうして乳首を軽く押し潰す。

（凄い……！ オッバイムチムチい！）

そう思った時には、もう遅かった。反射的に、本能的に、庸はルミナのバストに顔をうずめていた。

「きゃん」

ルミナがかわいい声を上げる。パツンパツンの弾力が、果汁たっぷりのオレンジみたいに顔面で弾けた。部分的に素肌が、部分的にビキニが顔に触れ、顔を包み込んだ。弾けるような弾力が顔面を受け止める。さらに激しく顔を押しつけると、ムチムチの豊球が若々しさを炸裂させてひしゃげ、すぐに強い反発力で顔を弾き返した。

（凄い弾力……！）

一度味わってしまったと、もうだめだった。逃げないようにルミナの腰に手を回すと、庸はさらに顔を押しつけた。むちいつ、むちいつと乳肉が反発して庸の顔を心地よく押し返す。押し返しながら、やわらかく庸の顔面を受け止めていく。

（聖のオッパイ、凄い！ 聖のオッパイ気持ちいいよぉ〜！）

欲望がごとく唸った。ペニスが勃起し――次の瞬間、庸は顔を離し、両手でバストを握り締めていた。

指が、ビキニと乳肌に触れる。指の上部はじかに肌に触れている。聖の乳房は、まるやかで、ビチビチしている。豊潤で、ムチムチだ。その質感の次に、弾力が指に弾けてきた。むっちりとバストが沈み込み、そして急激に強い反発力が指を押し返す。

（凄い！ 聖の胸凄い……！）

庸は、もみいつ、もみいつ、もみいつと続けざまにバストを揉みしだいた。豊満すぎる半球が激しくたわみ、何度もひしゃげては両手にビチビチの弾力を炸裂させる。手のひら全体で、指全体で生乳の感触を――素肌を――味わえないのが口惜しい。

「あんっ……ああん……濁川くん……」

ルミナがか細く喘いだ。恥ずかしがりながら、でも、オッパイを揉まれて感じている。

もっとさわりたい。もっと生乳を、乳肌を味わいたい。でも、ビキニが邪魔だ

庸はビキニの下に手を滑り込ませた。生乳が手のひらにびったりと吸いつく。しつとりと豊潤な肌が、指に、手のひら全体に吸着してくる。すばらしい肌の質感である。

「ああん……！」

（気持ちいいっ！）

夢中でルミナの一〇センチ乳を揉みしだいた。さらに乳肌が手のひらに吸着し、乳房がたわんだ。指がやわらかく沈み込み、即座に弾けるような弾力が充満して勢いよく指を押し返す。凄い若さ、凄い張りのオッパイである。柔乳の多い日本人にあっては、非常に珍しい弾力乳だ。

（凄い……！ 聖の胸、ほんと凄いよ……！）

猛烈に興奮しながら庸は、ぎゅう、ぎゅうつと何度も何度も、若々しいIカップを握力の餌食にした。そのたびにしつとりと潤った乳肌が手のひらに吸着し、若さいっぱい、のびのびのIカップ球が手のひらに弾けて指を押し返してくる。

ルミナのオッパイは、実に揉み応えのあるオッパイだった。やわらかさよりも張りと弾力が際立っている。揉むと理奈やアイゼナハよりも激しく弾き返してくる。反発力が半端ではない。

こんな凄いオッパイを、ルミナはずっと服の下に隠し持っていたのだ。中学生の頃から――！

ルミナのことは中学の時から知っていた。三年生の時は同級生だった。その時から、大きなオッパイには釘付けになっていた。ルミナに気づかれないように、何度盗み見したとか。自宅に帰ってから、何度オナニーのオカズにしたとか。そのルミナのオッパイを、今、自由にしているのだ。

（もっと揉みまくりたい！ しゃぶりたい！）

庸はルミナのビキニを外した。半球形の、美しい豊弾が

姿を見せた。Iカップなのに、ほとんど垂れていない。まるでインドの女神のようにずどんと勢いよく、立体的に飛び出している。決してルックスと違って地味ではない。むしろ、派手さと輝かしさと存在感に満ちている。そしてその輝かしいパストの頂点に、双つの乳首がぶっくりと隆起している――。まるで、いじめて♥と甘く囁いているように見える。

（ほんと凄いオッパイ……！ エッチな乳首……！）

込み上げる興奮と欲望に、庸は双つの乳首をつまんだ。

「あん、やつ、濁川くん……」

双つの乳首が指の間でぶにゅんとやわらかく潰れた。ルミナの肢体がびくんとふるえ、後ろに逃げた。逃げようとするルミナのオッパイを、さらに引っ張る。引っ張りながら、指と指の間で乳首をこすってやる。ぶにぶにの肉が優しく潰れ、ルミナがまたかわいい悲鳴を上げた。

庸はますます興奮を覚えた。ブライベートブルーの中で、ビキニ姿のルミナの乳首を舐っているのだ。地味な女の子の凄いオッパイを、自由にしているのだ。地味な女

（こんなオッパイ、もう手放せない！ もっといじめてやる……！）

庸はさらに執拗に指で乳首をこすった。

「あは、あは、あは、あはっ！」

ルミナの身体がさらに細かく、激しくふるえる。庸の指から逃げようと半身をひねるが、敏感な肉塔は庸の指の虜囚である。庸はさらに乳首をこすりながら、オッパイを引っ張った。半球形の美しい豊球が、ラグビーボールのよう

うにいやらしく尖る。



「濁川くんっ……」

ビクン、ビクンとルミナの上半身が痙攣した。思わず、指から乳首が離れた。双つの豊弾がブルンと暴れる。

（逃すか！）

その直後——庸は左のオッパイ——ルミナからすると右のオッパイ——にしゃぶりついた。若々しい、弾力と潤いのある肌が顔に吸着する。乳房がたわみ、顔面を受け止める。甘い乳房の薫りが鼻腔にあふれた。実にしっとりとした乳肌に豊満な弾力、そして瑞々しいやわらかさである。乳房をしゃぶっていると、乳房に甘えているような、同時に乳房を犯しているような感覚に囚われて興奮してくる。

乳首は勃起していた。ぶにぶにの突起が舌を突く。逆襲とばかりに、庸は舌先でぴちゃぴちゃと肉の尖塔を叩いた。

「ああん！」

ルミナが胸を突き出した。乳房が凄い圧力で庸の顔を押しす。乳圧に戦きながら、庸はさらに同級生のオッパイを吸いまくった。ちゅゅつ、ちゅゅつと吸引する。そのたびに乳房がいやらしく尖り、はあん、はああんとルミナが悩ましい声を上げる。

（聖って、こんなかわいい声してたんだ……！）

庸は、さらに舌先で乳首を弾いた。ルミナが、あうつ、あうつと声を上げる。その声に興奮しながら、ちゅゅつとバストを吸引する。

「ひあん……！」

ルミナが抱きついてきた。顔面に乳房が押しつけられる。ムチムチの若々しい弾力が、これでもかとはかりに顔を圧迫する。

（凄い乳圧……！）

庸はルミナの背中に腕を回した。ルミナの身体を抱き寄せる。庸は、ルミナを捕まえたような——奴隷にしたような気分になった。このオッパイはおれのもの。この身体はおれのもの——。そんな感じがして、興奮する。

乳圧を味わいながら、庸は乳房に顔を押しつけてオッパイを吸引した。しつこくいやらしい音を響かせながら、執

拗にオッパイを吸い立てる。吸いながら、敏感な乳首をびちゃびちゃと舐めまくる。

「濁川、くうん……だめ……」

甘い声で制止しようとしながら、ルミナがピクンピクンと身体をふるわせる。感じているんだ、と庸は確信した。オッパイを吸われてルミナがイキそうになっている。

プールの中で同級生のオッパイを吸うのは、最高の気分だった。中学時代からずっとルミナのオッパイをさわりたいと思っていたのだ。教室で、体育の授業で、何度窃視したかわからない。そのオッパイを貪っているのだ。

（もつと食りたい……!）

庸は顔を離して、右の乳房にしゃぶりついた。またルミナがピクンと身体をふるわせた。左だけでなく右のオッパイも自分のものにしてやったという満足感にさらにペニスを勃起させながら、夢中でバストを貪り吸う。

「やはあん、濁川くうん、だめえ……」

甘い声を放ちながら、ルミナの身体が躍った。同級生が、自分にオッパイを吸われて身体をひくつかせている。正義の味方が、オッパイでイキそうになっている。

ルミナは胸が敏感なのかもしれない。舌先でびちゃびちゃと乳首を弾くと、小刻みにルミナの身体がふるえた。びくんとふるえて、それからびくびくと小さな顫動が追いかけて、またびくんと肢体が波打つ。

（やっぱり敏感なんだ）

庸は乳房を舐めながら、左手で左の乳房を揉みしだいた。たつぷりとポリュームを味わうように円を描いてこねまわしていく。

「あん……んふ……」

またルミナが身体をふるわせる。人差し指で乳首をコリコリと弾くと、

「あああつ……!」

少し大きな声が上がリ、同級生の肢体が波打った。本当に感じやすいオッパイだ。

（両方の乳首、舐めたい……）

庸は弾力抜群のオッパイをつかんだ。柔乳ではないの

で、乳首を真ん中に寄せるのが難しい。すばらしい張りが邪魔しようとする。それでも乳首を双つ寄せて、しゃぶっていた。じゅるじゅるじゅると吸引音を響かせながら、舌先で乳首を上下に弾く。双つの乳首の間に舌先を押しつけるようにして、執拗に舌を往復させる。

「ああっ、濁川くん、あはああっ……！」

ルミナの声がかすれた。びくんびくんと大きく肢体がふるえる。膝もふるえる。庸はさらにねちっこく乳首を舐めた。敏感な双つの尖塔が庸の舌に薙ぎ倒され、何度も上下に倒れる。倒れるたびに舌が乳首を舐め、勵っていく。ルミナの腰が右に左によじれた。気持ちよくてじっとしてられないのだ。

（もつと乳首をいじめてやる）

庸はさらに横に首を振りながら、舌を上下に往復させた。上下の運動に横の振幅が重なって、乳首が斜めからも玩弄される。

「あああっ、やんっ、ああああっ……！」

ルミナが庸にしがみついていた。乳房が凄いい勢いで庸の顔面に押しつけられ、まるでバルーンのように顔を弾こうとする。

いくら味わっても、すばらしい爆乳だった。まるで外人モデルみたいに乳房がまんまると立体的にふくらんでいて、重力を嘲笑っているように思える。顔だちこそ地味だが、胸には華がある。グラマーモデルとしても充分やっていけるぐらいの逸材である。乳房だけで言うなら、理奈以上だ。

（もつと聖のオッパイをしゃぶりたい……！）

顔を押しつけて乳首を吸いながら首を左右に振ると、ルミナが甘い声を上げた。

「に、濁川くん、だめ、変になっちゃう……」

「変になれ……！」

庸は双つの乳首を吸い伸ばした。オッパイを激しく吸引して、ムチムチの爆乳をラグビーボールのように尖らせる。

かわいい悲鳴が上がった。ルミナがイキそうになって、

左右に顔を振ってかわいくイヤイヤをする。庸も乳房に吸いついたまま、首を横に振った。さらに乳房が揺さぶられ、ブルンブルンと揺動する。揺さぶられた分、乳首への刺激が倍加し、ルミナが身をよじった。思わず庸の頭をつかんで引き離そうとしたが、庸の舌は双つの乳首を颯り立てていく。庸はさらに首を横に振って乳房を吸い颯った。

「庸くん、やつ、やあああつ、オッパイやあつ……！」

ルミナが思わず、庸の名字ではなく名前を呼んだ。庸はさらに双球を吸い伸ばした。ルミナが悲鳴を上げ、若い高校生をひくつかせ、ふいに声を消失させた。大きな痙攣がルミナに襲いかかった。庸に双乳を咥えられたまま、激しく肉体を波打たせる。

オッパイを吸われるのは初めてのはずなのに、初めての乳吸いでルミナは絶頂に達してしまったのだ。

プールの水が波立った。上半身が、つづいて腰が、大きくひくつく。そのたびにプールの水が騒ぐ。

（聖がイッた……！）

征服欲を満たされて、庸はさらに乳首を舌で颯った。軟体動物のように舌を乳首に巻きつけて、ぴちゃぴちゃと乳塔——乳首の尖塔——を叩く。

「くあつ……だめえ……また……！」

スイッチを押された機械のようにルミナの身体がひくつき、鋭い痙攣が同級生の肢体を襲った。つづけざま、ルミナが絶頂に達する。それでも、庸の乳吸いは終わらない。陰湿な音を立てて、執拗に一〇センチのIカップ乳を吸い颯っていく。

「やあつ……庸くん、だめえ……またイク……！」

「聖の胸、凄いかいよお……オッパイ美味しいよお……」
吸引音が鳴り響き、また高校生の肢体が波打ち、ルミナが絶頂に達した。中学からの同級生が際どいビキニ一枚のか弱き姿で乳房を突き出し、そのバストを吸われながら何度も何度も絶頂に喘いでいる。男として最高の満足を味わう瞬間である。

庸のペニスは、もうはちきれそうなほどふくらんでいた。爆発したくてたまらなくなっていた。

この胸でイキたい、と庸は思った。我慢なんか、できない。

「聖、パイズリ……」

5

ルミナは、初めて味わう絶頂に何度も身体をふるわされて、喘いでいた。男の多くはオナニーを経験するが、女はそうではない。男子高校生の八十六パーセントはオナニー経験者だが、女子高校生のオナニー経験者は十九パーセントしかない。

ルミナも、オナニーをしたことはなかった。だから、今日の絶頂が初めての絶頂だった。まさか胸だけでイクなんて思わなかった。それも、何度も、何度も――。

正直、胸をさわられる前は不安だった。極小ビキニを着た時も、恥ずかしくてたまらなかった。逃げたかった。もし、庸くんが胸をさわってくれなかったら……。いったい、自分はどんな顔をすればいいのか。自分は魅力がない、庸くんが胸をさわりたいと思わない相手ということになってしまわないか。そうだったら、もう……。

だが、庸は自分の胸をさわってくれた。プールに入った時から、自分がジップアップのスクール水着を着ていた時より庸が自分のバストに釘付けになっているのがわかった。

恥ずかしかったけど、うれしかった。

庸くんが見てくれている。

今度こそ、さわってくれるかな。見るだけに終わっちゃうのかな。

不安はすぐに消し飛んだ。バストを測定した後、庸は我慢できなくなっただけ自分の胸に顔をうずめてきたのだ。

びっくりした。でも、うれしかった。大好きな庸くんが、自分に抱きついてくれたのだ。そして、胸をさわってくれた。中学生の頃からずっと好きだった庸くんが、胸をさわってくれた――。

すれ違いざまに痴漢に胸をさわられたことはあるけれ

ど、好きな相手に胸をさわられるのは初めてだった。揉むという行為は同じはずなのに、庸くんには揉まれると気持ちよかった。

ああ。庸くんがさわってくれてる。凄い。庸くんの指が……。

うれしい驚きと幸せに、凄く感じてしまった。気持ちよくてたまらなかった。オッパイをもみもみされても気持ちよかったし、乳首をいじられるともっと気持ちよかった。そうしてオッパイを吸われてイッてしまったのだ。

庸くんが自分を求めている。

自分のオッパイを求めている。

自分を欲しがっている。

中学時代からずっと好きで、ただ片思いでいるだけ、遠くから見つめるだけでしかなかった庸くんが、自分を求め、欲しくれている。

その庸くんが、パイズリしたいと言ってくれた。

庸くんには二度パイズリしている。きっと、それが気持ちよかったのだ。

断る気持ちなんか、全然なかった。庸くんは自分のオッパイを気に入ってくれたのだ。パイズリを気に入ってくれたのだ。またパイズリでイキたいと言ってくれているのだ。

（いっぱいイカせちゃう。わたしのオッパイで、気持ちよくしちゃう。今度もいっぱい、気持ちよくなってるね）

ルミナはビキニを着けたまま、プールに膝を突いて胸を突き出した。プールは深くなかったので、水かさはちょうど胸のすぐ下だった。

ビキニがずれて、乳輪と乳首が見えていた。庸くんに吸われたから、乳首が赤く火照って、大きく尖っている。自分で見ても、いやらしい。

庸が前に進み出た。ルミナは両手で一〇センチのバストをつかんだ。太くなった庸のペニス、双球の間にめり込む。

（あ……）

ルミナは幸せを感じた。

（庸くんのオチンチンが来た……）

好きな人のペニスは、硬くパンパンに張っていた。反り返っていて、胸の中をずりずりと進んでくる。

庸の表情に、一瞬恍惚が浮かんだ。

（わたしの胸、気持ちいい……？）

すぐに庸が腰を振りはじめた。ずりゆつ、ずりゆつとペニスが自分の双つの胸の間を往還する。ペニスが外れないように、ルミナも双つのIカップ乳でしっかりペニスを挟みつける。

庸にパイズリするのは三度目である。

一度目は、旅館の温泉で。二度目は今日、聖母教会で。そして、三度目が今――。

少しは慣れてきた？

ううん、全然。

今も不安と戦っている。庸くん、イッてくれるかな、気持ちよくなってくれるかな。そんな不安でいっぱいになっている。

好きな人のオチンチンをオッパイで挟むのは特別だ。凄くドキドキしているし、不安もあるけど、うれしい。

庸が自分の肩をつかんできた。さらに激しく腰を振る。凄い勢いで、ペニスが谷間に突き刺さる。

庸くん、どうしたの？

怒ってる？

怒ってない？

「あ。イクかも」

理奈が庸の背後から近づいてきた。

「わたしもイクように手伝ってあげる」

そう言うと、理奈が庸の背中に乳房を押しつけながら庸の乳首をしゃぶりはじめた。

「あうっ……理奈ちゃん……」

「ここ、気持ちいいでしょ？」

レロレロと乳首をふるわせながら理奈が言う。

（気持ちいいの？ 庸くん、そうされると気持ちいいの？）

首を伸ばせば届くところに、庸の胸がある。ルミナは思

い切って首を伸ばした。もう片方の乳首にしゃぶりつく。

「ああっ……聖い……」

切なそうな庸の声に、

（気持ちいいんだ！）

興奮した。

（もっと気持ちよくなって♡）

オッパイで強くオチンチンを挟んでこすりながら、庸の乳首を舐める。さっきいっぱい乳首を舐めてもらったから、そのお返しだ。

（庸くん、イッて♪ いっぱい気持ちよくなって♪）

「ああっ……聖い……理奈ちゃん……」

庸が喘いだ。喘ぎながらさらに激しく腰を振る。荒々しいほどの勢いで、ルミナの豊球にペニスを突き刺してくる。胸の谷間を何度も何度もペニスが往還する。

きっとイキたいのだ。庸は射精したいのだ。

「やばい……出る……」

庸が呻いた。

「出しちゃ出しちゃえ♪」

理奈の舌が乳首に密着したまま、激しく振動した。凄い勢いでレロレロと舌をふるわせて庸の乳首を舐る。ルミナも理奈の真似をして、庸の乳首を舐めた。舌を上下に往復させて、速いスピードで男の乳首を舐め、舐る。舐りながら、双つのIカップ球でオチンチンを挟み込んでこすり立てる。

「ああっ……イク……!!」

ふいに庸が腰をふるわせ、熱い精液が胸の谷間にほとばしった。腰の痙攣と同時に、二弾、三弾と精液の噴射が胸に襲いかかる。深い胸の谷間に、庸の精液がほとばしっていく。

熱い。

精液が熱い。好きな人の精液だ。

（庸くんがイッてくれた……!）

ルミナは思わず目を輝かせた。いっぱい乳首を舐めてパイズリをしたら、イッてくれた。うれしくて、自分から乳房を弾ませる。

「んあっ……聖い……」

「ローズ、もっと揺さぶって♪ 庸クン、気持ちいいって♪」

ぴちゃぴちゃと執拗に庸の乳首を舐めながら理奈が言う。励まされて、ルミナも庸の乳首を舐めながらバストを揺さぶった。一〇一センチのIカップ乳をばいんばいんと弾ませる。

「ああっ、聖、それイクからだめ……」

庸の腰が躍った。



（庸くんがイキそうになってる……！）

ルミナは歓喜と興奮を覚えた。

「気持ちよく……なって……！」

さらにIカップ乳を激しく弾ませる。重量二キロオーバーの爆乳で好きな人のオチンチンをしごきまくる。若い乳肌をこすりつけて、ペニスを颯り立てる。

「んあっ……聖いっ……！」

庸が苦悶と歓喜の声を上げた。腰がふるえ、また庸は射精した。熱い濁液が派手に飛び散り、ルミナの胸いっぱい広がる。

（ああ……またイッてくれた……）

ルミナは夢中で庸の顔を見上げた。庸は恍惚の表情を浮かべている。

好き、とルミナは思った。

庸くん、好き……。

1

聖母教会第二教会の二階で、サングラスを掛けた爆乳の女が、自分の胸に顔を押しつけて目を閉じる高校生の頭を撫でていた。

高校生はホワイトグラスこと白井京一郎、爆乳の女はエージェントたちの親玉、エージェントAである。

京一郎の頭を撫でながら、エージェントAは庸のことを考えていた。

戦闘員βの力は圧倒的であった。ピンクボリスは復活し、あのアイゼナハとインフィニアを相手に互角以上に戦ってみせた。二人を撃退できたのも、戦闘員βのおかげである。

あの少年は力になる。少年がいれば、エージェントはパワーアップし、デモニアを倒すことができる。基地などわけもないだろう。

ただ、そのためにはピンクボリス一人では無理だ。ブルーゴージャスもローズスコラも、戦闘員βに胸を揉まれる必要がある。

(二人ともパワーアップした暁には……)

エージェントAの目が、強く光った。

2

ブルーゴージャスこと真王寺詩鶴は、派手なきらきらの青いボディコンドレスに推定Gカップの美球を包みながら、ルミナたちの様子を窺視していた。

お嬢様育ちの詩鶴には、あまりにも破廉恥な光景であった。同じ学院の下級生が、乳輪が見えそうなほど小さなピキニを着けて同級の修道生にバストを測定させている……。おぞましき狂態であった。

なぜ、学院の男に——それも最下層の男に胸など測らせ

るのか。そのようなことをすれば、男は襲いかかるに決まっているではないか。性犯罪を誘発するなど、どうかしている。狂愚とは思えない。

案の定、濁川庸は我慢しきれなくなってルミナに襲いかかっていった。バストを揉み、しゃぶりまくる。挙げ句の果てにはパイズリを――。

ああ。

なんて痴態を。

なぜそこまでするの？ 胸をさわらせるだけじゃなかったの？

やっぱり、間違ってる。

いくら強くなるためといっても、同級生に胸をさわらせるなんて間違っている。しかも、相手は学園では最低ランクの修道生なのだ。修道生に胸を自由にさせるなんて……。おぞましい光景だった。正義の味方が娼婦に堕したのだ。越えてはならぬ一線を、正義のために踏み越えたのだ。

これは勇気なんかではない、と詩鶴は思った。自分たちエージェントは、悪徳に手を染めたのだ。エージェントAは間違っている。セイント・エージェントは娼婦ではないのだ。正義の味方なのだ。

ルミナは、プールの中で恍惚としていた。修道生の射精を受けて、歓喜と法悦の入り交じった表情を浮かべている。よくも格下の男の精液を浴びてうれしそうな顔ができるものだ。

理奈がくるりと顔を向けた。視線が自分を射貫いた。

(気づかれた！)

ドキッとした。

理奈がプールから上がって、まっすぐ自分のところに向かってきた。

「しないの？」

まさか！

特別生の自分が、年下の修道生に胸をさわらせるというの？ 正義の味方の自分に娼婦を演じろというの？

「お断りよ」

びしゃっと詩鶴は言い返した。自分では決めたつもりだったが、動揺していた。

「絶対やらないのね」

「正義の味方は売春婦じゃないわ」

今度こそ、びしゃりと言い返した。だが、理奈も負けてはいなかった。

「足引っ張らないでよ」

言葉の剣を詩鶴の胸に突き刺すと、プールに顔を向けてルミナを呼んだ。

「行くよ。作戦を立てて先制攻撃をかけなきゃ」

理奈の言葉に、詩鶴は驚いて顔を向けた。

「ピンク。あなたに出撃命令を下す権利はありません」

「じゃあ、このまま自宅に戻って寝るわけ？ 明日は月曜日だよ？ 庸クン、学校に行くんだよ？ 学校に行ったら――」

その言葉で、詩鶴は悟っていた。

デモニアの連中は、きつと学校にもやってくる。濁川庸を奪ったといっても、それで安泰ではないのだ。

「少し話をしましょう」

「話をしてる暇はないよ」

と理奈が急かす。

「いいえ。手短に作戦会議を済ませて、出撃します」

3

デモニア救星団第〇八一基地のアイゼナハ隊の控室の時計は、午前一時半を指していた。部屋には、普段ならその時間帯にはいない金髪の爆乳の新米戦闘員が一人、ソファに座っている。

金髪の女は、明らかに欧米系の顔だちをしていた。目が青く、彫りも深い。鼻筋がまっすぐ切り立っていて、小さく美しく鼻尖が尖っている。まるでスーパーモデルのような誇り高き顔つきである。バストはロケットのように高く突出していた。

クラリッサ・ローズウェルである。学園では庸と同じグ

ロバリア国際学院一年ブロンズ組。庸の学費を出す特別生である。学院内の貴族の一人だ。

だが、デモニア救星団では成り立ての戦闘員である。少し前までは、奉仕局員だった。戦闘員に引き立ててくれたのは、先に戦闘員となって作戦を任されるまでに出世していた戦闘員βこと濁川庸である。

本来なら、クラリツサは自宅に戻っている時間だった。でも、自分から志願して基地に戻ったのだ。

今でも、あの瞬間のことを思い出すと悔しさが滲む。

深夜〇時。

庸はクラリツサとアイゼナハ、インフィニアとともにリムジンに乗っていた。セイント・エージェントの襲撃を避けるため、クラリツサの屋敷で一晩過ごすことになっていたのだ。夜が明ければ、庸は暗黒騎士に昇格する予定だった。

だが――。

リムジンを真っ二つに両断され、庸を奪われてしまった。インフィニアの話では、庸はポールシフトされて、エージェントの味方になってしまったという。

庸が敵の味方……!?

今でも信じられない。庸はデモニア救星団を心底気に入っていた。アイゼナハとインフィニアとも深い肉体関係にあったし、自分とも関係していた。エージェントになど惹かれてはいなかった。その庸が、敵の味方……?!

パイズリの儀式がなされると、自動的に敵の味方になってしまうのだという。本人の気持ちは関係ないそうだ。理屈はわかってても、クラリツサの感情が追いつかない。やばかったあ、なんて笑顔を見せながらひよっこり帰ってくるんじゃないかと思うが、庸は帰ってこない。

（本当に敵の味方になってしまったの？　あなたがそんなふうになるわけ、ないでしょ？　わたしを戦闘員に引き立ててくれたのに）

自分のせいだろうか、とクラリツサは思った。自分が屋敷に連れていくなんて言い出したからだろうか。でも、そうするか――。

戦闘員とアイゼナハ、インフィニアたちは、会議室で作戦会議を開いていた。どうやって庸を奪還するか、考えているのだ。

ふいに自動ドアが開いて、爆乳のデモニア星人看護婦が入ってきた。童顔の顔だち——ルクレツィアである。

「まだいたんだ」

と少し驚いたような、呆れたような口調でルクレツィアは言った。

「帰ったら？」

とルクレツィアが促す。

「わたしにも責任があるわ」

とクラリツサは言い返した。

「インフィニアが、あんたにはないって言ったでしょ？」

あいつらが上手かったんだよ」

クラリツサは黙った。

エーリエントたちに連れていかれる庸の姿が、脳裏に蘇る。あの時、何とかできなかったのだろうか？ 何とかして庸を——。

「庸を奪還すれば、何とかなるよ。もう一度ポールシフトさせれば、こっちの味方になる」

とルクレツィアが言い切った。

「本当？」

4

白い天井と木製の壁で囲まれた部屋に、長方形の長机が並べられていた。アーム付きの椅子に腰掛けているのは、デモニア星人の戦闘員たちと二人の暗黒騎士、アイゼナハとインフィニアである。

第〇八一基地の会議室は、作戦会議の真っ最中だった。序盤はセイント・エーリエントへの非難が集中していたが、今はようやく対策の案出しに移っていた。

アイゼナハは硬い表情で沈黙していた。他の暗黒騎士たちにも招集を掛けたのだが、自分たちは休みである、ベルゼリアの命令でない限り休出はしないと断られてしまった

のだ。

元々、各戦闘隊は不羈独立の精神が強い。それがいいこともあるが、悪い面が出てしまった。

それでも、自分の隊とインフィニア隊の戦闘員が全員参加してくれたのは、よかったと言わねばならぬだろう。

戦闘員たちは積極的に発言していた。だが、アイゼナハは沈黙の中に閉じこもっていた。頭に浮かぶのは庸のことが多かった。

リムジンに乗っていた時、油断していたわけではない。でも、突然リムジンが裂け、庸と切り離されてしまった。そしてホワイトグラスに庸を奪われてしまった。

なぜ、自分が庸の隣に座っていなかったのだろう。隣にいれば、奪われることはなかったのに。

わたしのせいだ。

わたしが隣に座っていなかったからだ。

罪の意識にさらに突き刺さるように、聖母教会での庸の姿が思い浮かぶ。金色の首輪をはめて、悲しそうに自分を見ていた庸――。

助けてあげたかった。奪い返して、元に戻してあげたかった。

でも、できなかった。二人だけでなくもっと仲間がいれば奪い返せたのに……。

「連中はルールを破った。ならば、おれたちが破っても文句はない。夜だろうが昼間だろうが、急襲して奪い返せばいい」

と一人の戦闘員が言う。

「真っ昼間はまずいだろう！ おれたちはなるべく目立たなくやってきたんだ！ あからさまに目立てば、大問題になる！ 基地が潰されたらどうする!? デモニア本国の領土が縮小するぞ！」

と別の戦闘員が強い口調で反論する。

「おれたちだけ正々堂々とルールを守ってやるっていうのか!？」

と最初の戦闘員が嘯みつく。

「正々堂々と攻撃するにせよ、ルールを破って攻撃するに

せよ、片づけねばならぬのはピンク野郎とホワイト野郎だ。やつの攻撃を何とかしなきゃ、手が出せん」

と三人目の戦闘員が言い出した。

アイゼナハとインフィニアの報告で、かつて自分たちに囚われていたピンクボリスが復活したこと、庸にチャージされて戦闘力がパワーアップしたことを、戦闘員たちは知っている。ホワイトグラスが邪魔をしたことも――。

「いや、二人だけではないぞ。βを奪われちゃったんだ。

他のエージェントもチャージされると見て間違いない」

と別の戦闘員が言う。チャージとは、βにバストを採まれて戦闘力がパワーアップすることである。

「あのホワイト野郎もか？」

聞かれて、

「男は……さすがにチャージしないんじゃないか？」

とひきつった笑みを浮かべた。

「エージェントは女が三人。三人チャージしたとなると、果たして基地を守りきれるか……」

戦闘員たちが沈黙した。

今はチャージされているのは、ピンクボリス一人である。ピンクボリスは、ドリーム弾という武器を持っている。直撃を喰らうと、放心状態に陥って戦闘できなくなってしまう。なかなか厄介な敵である。

だが、他の二人の女エージェントも厄介だった。

ブルーゴージャスは弓矢を放つ。敵の攻撃を食い止める矢と、生け捕りにする矢の二つの矢を持っている。

ローズコラはハンドランチャーを持っていて、重力弾と無重力弾を武器としている。重力弾が命中すると、突然重力が増加して立てなくなってしまう。無重力弾が当たると、逆に重力が少なくなってしまう。庸をリムジンで護送している最中に、リムジンに無重力弾を浴びせられて宙に浮き上がったところで、ホワイトグラスによってリムジンを両断、庸を奪われてしまっている。

アイゼナハとインフィニアの話では、チャージされたピンクボリスは格段の速さを見せていたという。インフィニアと完全に互角に戦っていたそうだ。他の二人の女エー

ジェントたちも、チャージされればスピードアップすると見て間違いない。

「基地に侵入されるかもしれんな」

と一人の戦闘員がこぼした。反論はなかった。過去に一度、エージェントたちは基地内に侵入している。あの時は、三人はチャージしていなかった。だが、もし、今回三人ともチャージしていたとなると、戦闘員では歯が立たない。

「やつらの天下はつづかぬ」

インフィニアの断言に、戦闘員たちが一斉に顔を向けた。

「なぜ言い切れるんです？」

「βだ」

とインフィニアは笑みを浮かべた。

「β？」

と戦闘員が庸のことを尋ねる。

「βには学校がある。やつらもずっと自分たちの隠れ家に匿っておくわけにいくまい。βは必ず学校に行く」

「学校で襲うと？」

と戦闘員が食いついてきた。

「授業中でも、授業の終わった後でもよい。学校が終われば、βは寮に帰る。連中も警護するだろうが、毎日毎晩というわけにはいくまい。ベルゼリア様も帰ってくる。何日もつづければ、自ずと奪い返せる」

とインフィニアは自信满满である。アイゼナハは硬い表情を浮かべたまま、沈黙していた。頭の中は庸のことについてばいだった。早く庸を助けてあげたい。何日も待つなんて――。

「連中が夜も安全な場所にβを匿ったとしたら？」

戦闘員が質問を向けてきた。

「学校でβを左右できるのは、奉仕局員29号だ。勝手にどこかへ連れていくことはできぬ」

とインフィニアは答えた。奉仕局員29号とは、クラリツサのことである。

「連中もそのことは知ってるんでしょう？」

と戦闘員が尋ねた。

「だとしたら、今日、けりをつけようとするんじや……」

戦闘員の言葉に、緊急を告げるブザーの音が重なった。

スピーカーから風雲急を知らせる女性の声が飛び込んできた。

「エージェント侵入！ エージェント侵入！ D5から四人のエージェントが侵入！」

濁川庸は、第二教会に一人取り残されていた。ルミナたち四人のエージェントは皆、出撃してしまった。あとは庸とエージェントAという謎の超乳女がいるだけである。

庸は、プールのある寝室に一人佇んでいた。ルミナも理奈もいなくなって、部屋は他人の顔を突きつけている。非人称の沈黙が冷たい。ここは自分の知らないところなんだな、自分の居場所じゃないところなんだな、という感じが沈黙から伝わってくる。それとともに、庸の中で少しずつ後悔が漸増を始めていた。

欲望に負けて、ルミナの胸をさわってしまった。パイズリはよいとしても、ルミナの爆乳を揉み、しゃぶってしまった。ルミナは間違いなくチャージされたはずだ。きつと庸とも顔見知りの戦闘員たちをぶちのめし、アイゼナハとインフィニアにも攻撃を加えるだろう。デモニアの利益になることはしたくなかったのに、己の弱さのせいで——欲望のせいで——エージェントに利することをしてしまった。

（もうエージェントの味方をしたくない……）

もう何度も抱え込んだ思いだった。だが、思うたびに、自分によって裏切られている。自分はエージェントの乳揉み係——命じられれば、パワーアップせざるをえないのだ。

（デモニアに帰りたい……）

と庸は思った。

今なら逃げ出せる？

戻っても自分の居場所があるのか、元に戻るのかはわからないが、戻りたい。自分の居場所は、デモニアだ。デモニアの〇八一基地に、自分の居場所がある。

庸は寝室を出てみた。

廊下には誰もいなかった。リビングにも人の姿はない。

監視カメラもないようだ。

（行けるかも……！）

行ってみえ。

逃げるなら今だ。

庸は走り出した。一気に玄関に出る。

シューズボックスを覗き込んだ。

（おれの靴は——）

突然、衝撃が真上から襲ってきた。何かが落ちて庸に命中したかと思うと、一瞬で庸は吊り上げられていた。

「うわああっ！」

思わず声を上げた。

天井の方に引き上げられて、庸はようやく事態を呑み込んだ。庸たちデモニアの奉仕局員がつくっていた拘束ボールが落ちてきて、自分に命中。自分の両手を拘束して天井から吊り上げたのだ。

デモニアの秘密基地の武器にやられるとは、皮肉であった。

そして、ぶざまであった。

（くそ……！　こんなの天井に隠してたのかよ……！）

足は地面には着かなかった。ぶらぶらして脱出してみようとしたが、身体が揺れるだけである。

「監視してないと思ったの？」

サングラスをかけた超乳女——エージェントAが二階から姿を見せていた。さきほどまではパールホワイトのブラウスに紺色にデニムのストレートパンツを穿いていたはずだが、上着が変わっていた。裸の上から紺色のブレザーを羽織っていた。

上から見下ろすと、凄い胸の突出ぶりだった。赤ん坊の頭ほどの大きさの乳が双つ、ブレザーから突き出しそうになっている。谷間は深い。庸のチンポなど、簡単に埋もれて消えてしまいそうである。

思わず、むらっとした。ブラウス姿の時も凄い爆乳だと思っていたが、裸にブレザー姿だと、さらにエロ的な破壊力が倍増する。

「まだ抜け出そうとするなんてね。そんなに反逆者どもが

いいの？ こっちにだって女はいっぱいいるのに」

「女じゃない！」

と庸は言い返した。

デモニアでは、自分はメインだった。最優秀戦闘員として表彰されて、褒賞も受けた。作戦の立案も任されていた。アイゼナハもインフィニアも戦闘員たちも、自分を頼りにするようになっていた。自分は仲間の中心にいたのだ。

でも、ここでは自分はサブ的存在だ。あくまでもエージェントをパワーアップするバックアップ要員。控えの中の控え。理奈とルミナを自由にできるかもしれないが、自分はメインではない。

だが、庸の否定はエージェントAには通じなかったらしい。

「女でしょ？ ピンクとローズより、デモニアの女の方がいいなんてね」

と、吊り下げられている庸にエージェントAが近づいた。エージェントAが近づくにつれて、庸から胸への角度は鋭角となり、さらに谷間が奥深くまで覗いた。本当にきつそうな谷間である。ペニスを挟み込まれたら、二度と逃げられそうな感じがしない。

「あなた、大きなオッパイが好きみたいね」

とエージェントAは微笑んだ。

庸は答えなかった。見破られるのも癪に障るが、関係の薄い女に性癖を明かしたくない。

「じゃあ、こういうのはどう？」

ふいにエージェントAが庸の身体に歩み寄り、股間に爆乳を押しつけてきた。ブレザーから覗く双つの生乳の間に、庸のペニスが挟み込まれる。ズボンの上からだだが、すばらしいバストに密着攻撃を受けて、庸は一瞬で勃起していた。

（この人、で、でかい……！）

エージェントAは得意気に微笑んでいた。

強がっていても、所詮、男ね。ほら、オッパイ気持ちいいでしょ？ そんなに巨乳に弱いんだ。

そう見透かされているみたいで、庸はそっぽを向いた。だが、双つのふくらみはズボン越しに庸のペニスに密着している。圧倒的なポリウムである。

「あなたがもう逃げないって約束してくれるのなら、これで挟んであげてもいいのよ」

庸は驚いて、エージェントAを見た。

エージェントAは唇に艶笑を浮かべて庸を見ていた。双眸はサングラスに遮られて見えない。

自分をからかっている？

揺さぶっている？

「そんなので折れるか」

半分強がって突っぱねると、

「そ」

いきなりエージェントAは庸のズボンを引き下ろした。

なっ！ と声を上げた時には、すでにトランクスを露出させられていた。ペニスが、トランクスを突き上げてテントを形作っている。

強がっていても、勃起は隠せない。庸としては恥を掻かされた気分である。

(くそ、この女……)

エージェントAはトランクスに手を近づけた。指で、トランクスの上からペニスの輪郭をなぞる。

いやらしい指遣いだった。庸は思わずもぞもぞした。撫でられるだけでゾクゾクしてしまう。

愛撫してほしい。気持ちよくしてほしい。

気に食わない相手のはずなのに、反射的に欲望が走る。

(いやいやいや！ 誰がこんな女に……！ 敵の首領だぞ!?)

心の中で抵抗しようとしたところで、エージェントAがブレザーで隠した生乳の谷間にペニスを挟み込んできた。

(や、やば……)

腰の奥がゾクゾクした。

(で、でかい……)

「もう逃げないって約束しなさい」

エージェントAが畳みかける。

「い、いつから正義の味方が娼婦になったんだよ」

庸はなおも強がった。

じかに挟まれたら、陥落しそうだ。絶対、射精してしまう。

(やばい……めっちゃめっちゃやばい……)

エージェントAが無言で微笑んで、トランクスからペニスを引っ張り出した。

「や、やめろ」

庸は思わず腰を揺さぶった。反動をつけてエージェントAを蹴ろうと試みる。だが、片手で庸の腰をつかむと、エージェントAはブレザーから覗く豊満な胸の谷間に、剥き出しのペニスを挟み込んだ。

きめ細かい、しっとりとした豊潤な雪肌が、びったりとペニスに吸着した。乳肌の密着と同時に、超弩級の、驚異的なポリュームの乳塊が四方からペニスを包み込む。やわらかい豊乳がたつぷりとペニスに吸着した。鼠蹊部にも、やわらかい爆乳が密着する。密着感を通して、とろけそうなやわらかさと桁違いのポリューム感が法悦とともに広がった。

(うあっ……うあっ……)

まだバイズリは始まっていないのに、庸は洩れそうになった。

なんという快感。なんというポリューム。

挟まれただけで、もうイキそうになっている。いざバイズリが始まれば、一分ももたないに違いない。

「やめていい?」

尋ねると、返事の暇も与えず、エージェントAは双つのたわわを揺さぶりはじめた。圧倒的なポリュームの白乳がゆっさゆっさと弾む。まるで桁外れの量感を見せつけるかのように、豊満な肉弾が乱舞していく。

(うああ……あああ……!)

重々しい上下動に、早くも腰がひくつきはじめた。

(このオッパイやばい……! めっちゃめっちゃ気持ちいい……! めっちゃめっちゃおっきい……! 絶対めっちゃめちゃにイカされる……!!)

射精を逃れようと、庸は腰を右に左に振った。だが、乳房のポリウムは圧倒的だった。双つの超乳に、庸のペニスは完全に挟み込まれていた。龟头は肉塊に埋没して見えない。見えない中で、双つの乳塊にずりずりとこすられている。そして庸は両手を拘束されて、天井から吊り下げられている。庸はパイズリされる虜囚である。

「止めてもいい？」

エージェントAが微笑んだ。唇が、淫欲に濡れている。

庸へのパイズリを楽しんでいるのだ。

「やめろ……いつから正義の味方が脅迫者になったんだよ……」

強がって庸は呻いた。

「脅迫って、これ？」

双つの肉塊が、盛大に暴れだした。特大の乳球が、ばいんばいんと派手に波打ちながらとろけそうな乳肌でペニスを颯り立てる。庸は思い切り呻いた。大きすぎるオッパイでしごかれた上に、やわらかい乳肌で執拗に愛撫されると、もう我慢できなかった。

（うああっ……だめえ……!）

庸はもがいた。なんとか射精から逃れようとしたが、無駄な戦いだった。一瞬で庸は、エージェントAの超乳の中で爆発していた。

凄い勢いで、大量の濁液が噴射していく。胸の谷間が深すぎて、龟头も精液も見えてこない。完全にオッパイの中でチンポが爆発し、射精している。



(全然先っぽが見えない……めっちゃめっちゃでかい……)

庸は天井から吊り下げられたまま、腰をふるわせた。ブレザー姿のサングラスの爆乳女の胸に、痙攣しながら精液を注ぎ込む。

完敗であった。

だが、本当の完敗はこれからだった。エーリエントAは、さらにながしりと両乳でバストをつかんで、凄まじい勢いで揺さぶってきたのだ。双つの乳房が二頭の暴れ馬となって、ばいんばいんと跳ねまわる。圧倒的な乳塊が、執拗にペニスを挟み、とろけそうな雪肌をペニスをしつこく颯り立てる。

(だめええ……!)

腰が砕けそうな快感にペニスが爆発しそうになった。庸はまたこらえようとしたが、一秒射精を遅らせられただけだった。超乳の中で、庸はまた噴射した。淫乳の中で、どろどろの精液が噴き上がる。だが、やはり精液は見えない。庸のペニスは乳房の中に埋もれてしまっている。

エーリエントAは、胸の中で庸の絶頂を――射精を味わいながら、さらに双球を揺らしまくっていた。これがパイズリ凌辱よとばかりに、ばいんばいんと爆乳を乱舞させる。そうして執拗に雪肌をペニスにこすりつける。

(またイク……!)

庸は再び腰をふるわせた。

もはや、エーリエントAの超乳パイズリを我慢するのは不可能だった。パイズリストロークが加速すると、たちまち腰をふるわせて射精してしまう。庸は、まるで蛇口をひねれば水を放つ水道であった。そしてやっばり、胸の谷間から精液は見えてこなかった。乳房からぼたぼたと落ちてこない。ペニスは完全に超乳にホールドされて、包み込まれてしまっている。

(やばいよ……この人のパイズリ、やばいよ……めっちゃめっちゃ気持ちいい……今まで味わった中で、ダントツに気持ちいい……)

「あなたがもう逃げないって約束するのなら、わたしが毎日パイズリしてあげるわ。ホワイトには内緒でね。それで

も不満？」

庸は首を横に振った。

「受ける……もんか……」

完全に強がりだった。陥落しないという意思表示だったが、ペニスはすでに陥落していた。

「人間って、嘘が下手ね。それとも、あなたが下手なのかしら」

とエージェントAは微笑んだ。

（人間？）

引かかる言い方だった。まるで自分が人間でない言い方である。

（まさか、デモニア星人……なわけないよな）

快感の中で考えていると、ふいにエージェントAが庸から離れた。ねちゃつと精液が糸を引く。庸は初めて自分の精液を見た。ペニスは精液まみれである。

（今度はどうするつもりだろう……？）

心の中で身構えていると、エージェントAはちらつと庸を見て、いきなり抱きついてきた。庸のお尻に手を回して、自らペニスを胸の谷間に咥え込んだきたのだ。エージェントAが超乳を突き出し、谷間に庸のペニスが突き刺さる。庸のチンポは根元まで超乳の谷間に埋もれて見えなくなった。

（うはっ……！）

ペニスが谷間深くに突き進むだけで、庸はゾクツと身体をふるわせた。

「さつきより気持ちよくしてあげる」

そう言うと、エージェントAは庸のヒップをつかんで自分の胸に引き寄せはじめた。庸のペニスが、ずぶつ、ずぶつとバストの中にめり込んでいく。そのたびに、圧倒的な肉塊が肉棒を挟み込み、四方から優しく締めつける。

庸が動くのではなく、女が庸のヒップを動かして行う、突き刺しパイズリであった。ペニスが谷間を突き進むたびに、とろけそうな雪肌がペニスに吸着し、ムチムチの弾力とともにペニスを颯り立てる。

（やばい……これ、絶対イク……）

庸は腰を振った。エーリエントAの手と乳から逃れようとするが、エーリエントAは完全に庸のヒップをつかんでいる。そればかりか、ピッチを上げて自分のバストに庸の腰を引き寄せてくる。

パイズリストロークが加速し、凄い勢いで特大オッパイがペニスをしごいた。豊潤な雪肌が何度もペニスに絡みつき、ペニスを愛撫する。

（んああっ……またイク……！）

庸は右に左に腰を振り——その途中で射精した。どろどろの粘液が凄い勢いでエーリエントAの谷間に噴き出していく。

（ああ……）

腰を痙攣させながら、庸は天井を見た。

気持ちいい。

腰が砕けそうだ。

いったい何発目の射精なのだろう？ 五発？ 六発？

「まだ許してあげないから。逃げないって約束したら、パイズリ、やめてあげる」

今度は前とは逆のことを口にして、エーリエントAは庸の腰を再び引き寄せた。ずりっ、ずりっ何度も乳房に庸の鼠蹊部を押しつける。そのたびに庸のチンポが超乳に挟まれ、しごかれる。

（んああっ、イク……！）

「もうイツちゃうの？ 元戦闘員のくせに、だらしないわね」

言葉でも責め立てながら、エーリエントAがパイズリでも庸を齧っていく。驚異的なポリウムと弾力と雪肌とがペニスに吸着して、法悦を掻き立てていく。

（気持ちいい……この人のパイズリ気持ちいいよお……）

拘束されたまま、庸は呻いた。こらえようとしても、次から次へと超乳パイズリがペニスを搾り立ててくる。気持ちよくて我慢できない。

（もうだめえ……！）

庸はまた射精した。射精している間も、エーリエントAはパイズリストロークをやめない。庸の腰を何度も何度も

淫乳に引き寄せる。射精中にもかかわらず、庸のペニスは
何度も何度もパイズリで責め抜かれていく。

「んあっ……もうやめてえ……」

「じゃあ、約束なさい。もう逃げないって」

「何度でも逃げてやるう……んああっ!!」

庸はまた射精した。射精しても、またエージェントAが
パイズリで責め立ててくる。

気持ちよすぎて、腰が砕けそうだった。天井からぶら下
げられていても、腰が崩れそうになってしまう。あまりの
快感で腰の感覚が半分なくなりそうだ。

「ほら、早く約束しなさいっ」

ハアハアと熱い息を吐きながら、エージェントAが何度
も超乳を突き出し、谷間にペニスを咥え込んでいく。庸の
ペニスは谷間に挟まれ、執拗に奥深くに突き刺さる。その
たびに雪肌とポリウムたつぶりの肉塊がペニスを颯り立
てていく。

（んああっ、またイク……!）

「やめて……」

庸は腰を振って強制突き刺しパイズリから逃げようとし
た。だが、両手は拘束され、ヒップはエージェントAにつ
かまっていた。

ペニスが何度も乳房に突き刺さった。雪肌と肉塊が執拗
にペニスをこすり立てる。庸はまた呻き声を上げて、爆発
した。どろどろの精液が大量に飛び散っていく。

まるでパイズリの拷問だった。それも、あまりにも甘美
な、気持ちよすぎる拷問だった。

いったい、あと何回自分は射精させられてしまうのだろ
う。

気持ちいいけど、苦しい。

苦しいけど、絶対やめてほしいという気持ちにはなれな
い。むしろ、身体は逆のことを求めている。

もっといじめられたい。もっとパイズリで颯られたい。

もっとパイズリで食られたい……。

「もっといじめられたいんでしょ」

とエージェントAが言い当ててきた。

「ば、馬鹿言え」

しらばっくれる。

「もつとパイズリで鬨ってほしいんでしょ？ 食られたいんでしょ？」

とエージェントAが正確に当てる。

庸は答えなかった。

（やばい。完全にバレてる）

「約束しない子には、お仕置が必要ね」

エージェントAは立ち上がった。その場を離れる。

（え？ いなくなっちゃうの？）

庸は両手を拘束されて、天井から吊り下げられたままである。そして、チンポは剥き出し――。

（超かっこ悪いっ！ まさか、放置プレイ!? 何、それ！ 下ろせよ！）

2

二階に戻ったエージェントAは、服を脱いでシャワールームに入った。胸は、庸の精液でべとべとだった。

庸が逃亡を試みるのは計算済みだった。逃げると思っ
て、庸が玄関に下りたら拘束ボールが落ちるように仕掛けておいたのだ。そして、ぬいぐるみに仕掛けたカメラで監視していた。

だが――。

自分でも予想外だった。虜にするために庸をパイズリしたのに、一度精液を浴びたら自分の方が夢中になっていた。

庸をパイズリするのは、凄く気持ちよかった。思い切り興奮した。年下の少年が両手を拘束されて、自分のパイズリに腰を振って悶えている――。それだけでも濡れてしまった。一回だけパイズリして、もつとしてほしければ、逃げないと約束しなさいと迫るつもりだったのに、何度もパイズリしてしまった。

人間だから？ 戦闘員βだから？
わからない。

アイゼナハとインフィニアは、庸にはまっていた。そして自分も、少しパイズリしただけで庸にはまりかけている。シャワーを浴びながら、もっとパイズリしたい、もっとオッパイでいじめたいと思っているのだから。そして同時に——オッパイをいじめられたいと思っている。いっそのこと、胸を押しつけて、じらしてやろうか？ 顔の前に生乳を突き出して、もっとじらしてやろうか？

人間の男には、自分たちを虜にする何かがあるのだろうか？ とエージェントAは思った。優秀な乳揉み係だからこそ、虜にするものがあるのだろうか？

シャワーを止めて、エージェントAはバスタオルで身体を拭った。超乳がたわむ。自分でも大きな胸だと思う。自分の周りでも、自分以上の胸の持ち主を探すのは難しい。このバストに、男は誰も夢中になる。乳房は自分の誇り、女の誇りだ。

(もっといじめてやろうかしら)

エージェントAは部屋に戻ると、また紺色のストレートパンツを穿いた。それから、ブレザーに手を伸ばしかけて、やめた。

今度は違う服にしてやろう。

やっぱりノーブラで？

もちろん。

エージェントAは、さきほどは身に着けなかった衣装に手を伸ばした。

3

玄関で、庸は下半身を剥き出しにしたままぶら下がっていた。放置ブレイというより羞恥ブレイである。これで訪問客が玄関に入ってきたら、庸は何と挨拶すればよいのだろうか？

助けて？

逃げられるに決まっている。

やあ、今流行りのエクササイズをしているところなんだ。君もいっしょにどう？

そんな馬鹿な。

《警察に通報して》

これぐらいかな、と庸は思った。だが、通報されれば、自分もややこしいことに巻き込まれる。そこまで考えて、誰かが来るはずがないと庸は思った。玄関に拘束ポールを仕込む女が、訪問客の侵入を許すわけがない。

(とにかく脱出あるのみだ)

庸は何度も腰をひねって脱出を試みた。だが、庸の身体は天井から吊り下げられたままである。天井はびくともしない。

(だめか……)

諦めたところで、ようやくエージェントAが姿を見せた。

ブレザーのジャケットは着ていなかった。下半身は以前と同じ紺色のストレートパンツ。そして上半身は、パールホワイトのブラウスだった。ボタンはすべて留められていたが、あまりのポリウムにブラウスが二十センチ近く前に迫り出して、合わせの間から生乳が覗いている。ブラウスの両側には、ちょうどバストトップの辺りに鋭い突起が浮かび上がっていた。

乳首であった。エージェントAはノーブラであった。

シャワーを浴びてきたのか、少し肌が火照っている。

エージェントAがリモコンを向けた。ピツと電子音が鳴って、庸の身体は下がった。床に足が着いた。

(おれを解放するつもり?)

エージェントAが歩み寄った。

いきなり庸の頭を手をつかんで、顔面を乳房に引き寄せた。凄い超乳に、庸の顔が密着する。

(んぐう!)

凄いポリウムに、凄い弾力だった。

甘い香水っぽい香りがする。

「オッパイ、しゃぶりたい? もみもみしたい?」

と誘惑の言葉を囁きながら、エージェントAがさらに乳房をこすりつける。

(凄いデカパイ……!)

庸は勃起した。胸のポリウムは、アイゼナハやインフィニアの比ではない。バストーメートル越えのルミナも到底敵わない大きさである。JカップやKカップの比ではない。LカップとかMカップ……。きつと一一〇センチとか一一五センチのクラスに違いない。

（さわりたい……！）

爆乳を押しつけられて、猛烈に激しい欲望が走った。

（オッパイ、しゃぶりたい……！）

エージェントAが庸の顔を離した。サングラスのせいで、双眸は見えない。でも、口許は意地悪く微笑んでいる。

エージェントAがボタンに手を掛けた。一つ、外す。生乳の露出面積が増える。

（生乳を見せるつもり？）

さらにエージェントAがボタンを外した。さらに一つ、さらに一つ――。

パール色のブラウスの下には、白い肌色が覗いている。ノーブラの超乳が待ち構えている。

「見たい？」

とエージェントAは囁いた。

見たい、と庸は思った。だが、同時に、見てたまるかと逆ベクトルの意地も起こしていた。エージェントAの目論見はわかっている。

「見たけりゃ、約束しろって言うんだろ。約束なんかするか」

エージェントAはブラウスに手を掛け、両側の方向にブラウスの合わせを開いた。

4

現れたのは、双つの椰子の実だった。特大の椰子の実のような形と大きさの美形の超乳だった。

ただでかいだけで垂れているという感じではなかった。でかい上に、きれいな形をしていた。たつぷりと果実のように充滿してパツンパツンにふくらみながら、美しい球形

に張り出している。片乳だけで優にエージェントAの頭ほどの大きさがある。

(す、凄い……)

庸は圧倒されていた。こんなでかいオッパイを間近に見るのは初めてだった。写真では海外の超乳モデルを何人も見ているが、実際に目の当たりにするのは初めてだ。

(こんな凄いオッパイしてんだ……)

庸は言葉を失っていた。自分のチンポは、こんな凄いオッパイに挟まれていたのか。パイズリで何度も射精させられても、当然だという気がする。

エージェントAがじっと庸を見た。サングラスに隠れて相変わらず表情はわからないが、妖艶に微笑んでいるのはなんとなくわかる。唇がそうなっている。

エージェントAが近づいた。顔ほどの大きさの美形のオッパイは、庸の目の前である。生々しい乳肌と超絶的なボリュームが近づいてくる。

(さわりたい……!)

抑えがたい欲望が唸った瞬間、エージェントAはいきなり庸に生乳を押しつけてきた。殺人的なボリュームのバストが、むっちりした乳肌とともに庸の顔を覆う。

(んぐっ！ んぐっ！)

庸は悶えた。

胸を押しつけられただけで、イキそうなほど勃起していた。凄い乳圧に凄いボリュームだった。顔が後方に弾き飛ばされそうである。

(ほんと、でかい……! こんなオッパイ、経験したことがない……!)

エージェントAが超乳を離した。

「どう？　しゃぶりたい？」

しゃぶりたいに決まっていた。でも、どんなにしゃぶりとくても、うんと答えたくない。自分の心は、デモニア救星団にあるのだ。

「意地っ張りね」

またエージェントAは爆乳を押しつけてきた。庸の顔が思い切りバストに沈み込む。口は完全に乳房に塞がれてい

て、息ができない。

(んぐぅっ！)

さらに庸のチンポは勃起した。両手が拘束されているのが悔しくてたまらない。拘束されていなかったら、思う存分揉みまくってやるのに……。揉めないのなら、せめて思い切りしゃぶってやりたい。

エーリエントAがまた乳房を離れた。狡猾な、妖艶な笑みを口許に浮かべて、いきなり軽くオッパイで庸の顔を打った。オッパイビンタである。乳輪と乳首が、庸の顔をこすった。

(くそ！ 今、啜え損ねた……！)

またエーリエントAが身体を振る。オッパイが庸の顔を打った。

(ちきしょう！ また乳首を啜え損ねた！)

エーリエントAが黙笑する。庸が乳首を啜えようとしているのはわかっているに違いない。

エーリエントAがオッパイを近づけた。

(今なら――)

啜えようとした途端、エーリエントAは身体を引いた。

(くそっ！ からかってやる！)

またエーリエントAが超乳を突き出した。庸は知らんぷりをした。もっとオッパイを近づけさせるためである。

(早く来い……)

エーリエントAがさらに淫乳を突き出した。生々しい乳肌とバストはすぐ目の前である。

(今だ！)

顔を向けた途端、またエーリエントAは身体を引いた。

(くそ！)

「約束したら、しゃぶらせてあげる」

お決まりの台詞を吐いてきた。

「約束するか！」

「強情ね」

エーリエントAが乳房で庸の顔を打った。それを庸は待っていた。ドンピシャのタイミングで口を開き、ついに乳房にしゃぶりついたのだ。

口の中に乳首が飛び込んできた。甘く、コリツとした大粒の乳首だった。

「あん」

エーリエントAがびくんと身体をふるわせた。

（やった！ オッパイにしゃぶりつけたぞ！）

まさか、庸に啜えられることはあるまいと油断していたに違いない。庸は一気に乳首を吸引して、舌で乳首を齧った。ちゅーっ、ちゅーっ、と吸引音を立てながら、同時に敏感な尖塔を舌でめった打ちにする。

「はぁあん、離さないっ……あぁんっ」

超乳を左右に振ろうとして、エーリエントAの身体がビクンと跳ねた。庸にオッパイを吸われて、感じているのだ。

（逆襲開始……！）

庸はさらに特大のバストを吸引した。吸引しながら、舌先を激しく往復させる。ぬめぬめの濡れた舌で、乳首を高速で殴打する。

「あはっ、あはっ、あはっ、あはっ♥」

エーリエントAの豊かな肢体がビクビクと跳ねた。紺色のストレートパンツを履いたまま、生乳をゆさゆさと弾ませてエーリエントAが身悶える。

「わたしをイカせようっていうの？ 生意気ね」

とエーリエントAが庸のシャツを脱がせてきた。指先で庸の乳首をくりくりとこする。

（うっ……！）

解剖学的には、女の乳首と男の乳首は同じである。男も乳首は感じるのだ。

（負けるか……！）

庸は横に首を振りながら、舌を縦にふるわせて乳首を連打した。首振りの横方向の動きと舌の縦方向の動きが重なって、乳首を責め襲る。

「あぁっ、あぁっ、あぁっ、それ、いい……あなた、上手……」

エーリエントAの上半身がひくついた。腰がクネクネと悶える。だが、エーリエントAは両手で庸の乳首の愛撫を

つづけている。

(くうっ……)

負けじとさらに舌を加速させる。ぴちゃぴちゃと陰湿な音が玄関に響きわたる。

「ああっ……はああっ……ほんと、上手……」

腰をクネクネと躍らせながら、エージェントAが庸のペニスをつかんだ。細い指を這わせて、しゅっ、しゅっ、しゅっ、と素早くしごき立てる。

庸はもがいた。

エージェントAの手は気持ちよかった。強すぎず弱すぎず、抜群の握り具合で庸のペニスをつかんで、抜群のスピードでペニスをしごいてくる。たちまち快感の粒子が肉棒の中で収束を始め、じいんと狂悦の電流が広がりはじめた。ペニス全体が気持ちよくて爆発しそうになっていく。

(チンポ、とけるう……)

庸は腰を振った。だが、エージェントAの手は、冷静に、的確に、庸のペニスをしごいて責め立ててくる。

(んぐう……!)

快感で口を開きそうになりながら、庸はエージェントAの淫乳を吸引した。ちゅっ、ちゅっといやらしい音を響かせながら、必死に乳首の尖塔を舌で叩く。執拗にバストの快感タワーを何度も薙ぎ倒す。

「ああっ……ああっ……それ、イク……♥」

エージェントAがさらに腰をくねらせた。身体を引いて、庸の乳吸いから逃れようとする。

(逃すか!)

庸は舌で乳首を捕まえて、吸引した。舌で挟みながら、舌をずりずりと動かす。

「ああっ、それ、だめ、あなた上手すぎ、だめえ……!」

イキそうになってエージェントAの手が加速した。軽く握りながら、とろけそうなスピードでペニスをしごき立てる。

(んああっ、イク……!)

腰を引きながら、庸はオッパイを吸いまくった。超乳を

吸引し、乳首を舌で玩弄する。ぬめぬめの舌で、何度も敏感な尖塔を薙ぎ倒し、連打する。

「あはあつ、だめ、ほんとにだめ——」

ふいにエーリエントAが声を失った。ビクビクツと激しく身体を痙攣させる。痙攣させながら、それでも庸のペニスをしごき立てる。

庸は呻きながら、エーリエントAの手の中で爆発した。精液が凄い勢いでほとばしる。庸の絶頂に、エーリエントAの絶頂が重なった。ビクツ、ビクビクツとエーリエントAの上半身がひくつき、跳ね上がる。庸に超乳を吸われて、イッてしまったのだ。

エーリエントAがサングラス越しに庸を見た。

(い?)

突然、エーリエントAはもう片方の乳房を押しつけてきた。

「吸って……」

庸は夢中でバストにしゃぶりついた。すぐに乳首を舐めまくって勃起させてやる。

「ああ……」

エーリエントAがリモコンを押した。さらに庸を吊り下げていた鎖が下がる。でも、両手の拘束はまだ解けない。ふいにエーリエントAが庸をしゃがませた。玄関上がったところに、庸の身体を後ろに倒す。寝転がった状態の庸に跨がり、エーリエントAは乳房を垂らしてきた。特大の双つの房が、まるで地面につきそうな勢いで垂れ下がっている。いやらしい胸の果実である。

庸はまだあまりしゃぶっていない方の乳房にしゃぶりついた。あん、とエーリエントAが声を上げる。

庸は一旦、乳房を離れた。

「おれを自由にするのなら、もっとしゃぶってやる」

庸は強がって言ってみた。

「それはどうかしら」

そう言うと、エーリエントAは身体のそばにリモコンを置いて、紺色のストリートパンツに手を伸ばした。

(あそこにリモコンを置いた……! あれを奪えれば……)

どうやって奪うか考えていると、エージェントAは、いきなりストリートパンツを脱いだ。下にはショーツ一枚だけ——その真ん中は濡れている。庸にさんざんオツパイをしゃぶられて、濡れてしまったのだ。

(嘘っ!)

庸は仰天した。

(パンツを脱いだってことは……まさか……)

自分とやるつもり?

そんな馬鹿な!

(そっか! やりたきゃ、約束しなさいって言うつもりだな。引つかかるもんか! 我慢できないと思ったら大間違いだ!)

掛かってこいと庸は待ち構えた。誘惑なんか、撥ね飛ばしてやる。早く来い。

エージェントAが自分を見た。サングラスに遮られて、目は見えない。でも、考えていることはわかる。

エージェントAがショーツを脱いだ。

(ほら、見る。やつぱり、約束したらさせてあげるって言うつもりなんだ。そんなのでおれがうんって言うかよ。おれを甘く見るな!)

エージェントAがちらつと庸を見た。

(さあ、来るぞ。誘いの言葉が来るぞ)

エージェントAがしゃがみこんだ。

(チンポにオマンコを触れさせて、じらすつもりだな? そんな手に——)

いきなり温かい美肉が庸のペニスを包み込んだ。じゅくじゅくの柔肉がびつとりとペニスに吸着する。

(いっっ!?)

庸はひっくり返りそうになった。てっきり条件を押しつけてくると思っていたのに、エージェントAは無条件にペニスをオマンコに咥え込んだきたのである。

(そ、そっか! 少し動いて抜くつもりだな! それで、イキたいのなら、約束しなさいって言うつもりだ!)

エージェントAがヒップを動かしはじめた。ぬちゅっ、ぬちゅっといやらしい音を響かせながら、ヒップを弾ませ

ていく。じゅくじゅくの美肉がペニスに密着し、肉襞でこすり立てる。

(うあっ……!)

庸は呻き声を上げそうになった。
気持ちいい。

細かな肉襞がいくつもペニスに吸着していて、気持ちよくこすれる。ヒップを弾ませるたびに、オマンコが優しくペニスを掻き撫で、優しく狭搾してくる。おまけに丰满なオッパイは揺れ放題だった。

(凄い揺れてる……!)

と思ったら、庸はイキそうになった。

(やばっ……!! 洩れそう……!!)

エージェントAが上体を近づけてきた。

(今度こそ、来るぞ。『あなた、イキそうなんですよ？ 抜いちゃおうかしら。イキたいでしょ？ じゃあ、逃げないって約束しなさい』)

エージェントAの乳房がゆさゆさと揺れている。スイカ大の果実乳が、美味しそうに弾んでいる。

「吸って……」

エージェントAが乳房を近づけた。

(え!?)

庸は虚を衝かれた。

吸って？

今、相手は吸ってと言ったのか？

「早くっ」

「バストサイズを教えたら吸ってやる」

「いいから吸って!」

エージェントAがさらにバストを揺さぶった。

(だめだ、たまらない……!)

庸はエージェントAの爆乳にしゃぶりついた。あまり吸わなかった方のオッパイを思い切り吸引する。

あゝと悲鳴が上がった。オマンコがきゅっと窄まる。

(んぐう……!! 今のやばかった……!)

「乳首、舐めて……」

庸は乳房を吸引しながら、舌先で乳首を連打した。コリコリに固まった乳首を、舌で何度も殴打して溶かしていく。

「ああっ……ああっ……いいっ……もつとべろべろしてえ……」

甘い声を放ちながら、エージェントAがばいんばいんとヒップを弾ませる。乳首とオマンコでいっぱい快感を味わおうとヒップを揺さぶり、乳房を押しつけてくる。

（オマンコ気持ちいい……。オッパイも気持ちいい……）

超乳を押しつけられて、庸は反射的にバストを吸った。ちゅーっ、ちゅーっ、と吸引音を響かせて、乳首をひたすら舌で颯り立てる。乳首が口の中で唾液まみれになり、何度も舌に薙ぎ倒される。

「あはああっ、それ、いいっ、もつとお……！」

エージェントAのヒップがさらに跳ねまわった。とろとろの果肉が何度もペニスをこすり立てる。オッパイも凄かったが、オマンコも凄かった。チンポは柔肉にこすられてとけそうである。

（この人、気持ちいい……！ まじでイク……！）

庸は呻いた。だが、呻こうにも乳房が口に押しつけられてくる。

（このオッパイ吸ったら、おれ、絶対イッちまう……）

そう思うのだが、特大のオッパイを前にして我慢なんかできるわけがなかった。庸はひたすらにオッパイを舐めまわった。敏感な乳首に、吸引責めとねぶり責めとを浴びせていく。

エージェントAが歓喜の声を上げた。超乳を吸われて感じまくっているのだ。ヒップがばちゅんばちゅんと跳ねた。エージェントAが足の場所を移動させたために、リモコンが飛ばされて庸の手許にすべってきた。

（しめた！）

庸はついに、自由を——リモコンを手に入れた。解錠のスイッチを押す。

両手の拘束が解けた。

相手の首を絞めて、脅す？

あるいは逃れる？

これでデモニア基地に戻るかも……。

だが、庸は両手でバストを揉みしだいていた。指が、すばらしい豊球にめり込んでいく。指先は完全に乳球に隠れて見えない。

（気持ちいい……！ めちゃめちゃ気持ちいい……！）

庸は揉んだだけでイキそうになっていた。

（もっともみもみしてやる……！）

さらに激しく指を食い込ませる。LカップかMカップかわからない、推定一〇センチオーバーの超乳に、庸の指がめり込んでいく。

「かはあん……！ いいっ……！ 両方吸ってえ……！」

エーリエントAがおねだりした。庸は両手でバストを寄せた。双つの乳首を咥え込む。舌で、双つの乳首を弾いた。吸引しながら、双つの胸の生贄をびちゃびちゃと舐め、颯り責めにする。

「あああああっ！ あああああああっ！！」

エーリエントAの身体が反り返った。明らかに感じ方の違う、トーンの高い声が響きわたった。

（イッチまえ……！）

庸は下からペニスでオマンコを突きながら、双つの乳首を舌で凌辱した。ペロペロの舌で執拗に乳首を弾き、唾液をこすりつける。唾液でべとべとにしながら、しつこく乳首を弾く。

「それ、イク、それ、イクう……!!」

エーリエントAのヒップが暴れ、オマンコがペニスに吸着してきた。美肉が絡みつき、蜜壺がペニスを甘く締めつける。



(んああっ、オマンコ気持ちいい、イクうう……!!)

チンポが快感で融解しそうになり、あまりの甘美さに感覚が半分消失した。庸は双つの乳首をしゃぶりながら、エージェントAのオマンコに精液を打ち放った。

自分でも信じられないくらい、大量の射精だった。どろどろの淫液が、エージェントAのオマンコに噴射していく。

庸の腰が、エージェントAのヒップが、激しく痙攣した。絶頂のさざ波が、エージェントAの下腹部から上半身へと駆け上がり、また駆け下りて、また駆け上がる。

「ああ……ああ……ああ……」

うわ言のように、エージェントAが法悦の声を洩らす。洩らしながら、オマンコで庸のペニスを締めつけていく。

(またイク……!)

庸は十指を爆乳にめり込ませた。乳房にしがみつき、顔を埋める。乳房にしゃぶりついたまま、ぶるつと腰をふるわせる。

また精液が噴射した。二度、三度、大きな痙攣に腰が跳ねそうになる。快感に中枢神経を乗っ取られたみたいに、庸のヒップが波打つ。チンポがきゅんとした。あまりの射精に、腰が砕けそうになる。

「ああ……凄い……」

エージェントAのオマンコがさらにうねった。蠕動しながら、ペニスに吸着してまた甘く締め上げる。ところどころ肉襞でこすりながら、ペニスを狭搾していく。快楽な感覚が根元から龟头へと駆け上がった。またペニスが溶けそうな感覚に襲われ、庸は腰を引いた。引いたまま、腰を波打たせ、また激しく射精していた。

(んああっ……気持ちいい……苦しいけど、気持ちいい……)

「オッパイ……!」

エージェントAが特大のバストを押しつける。射精の快感に腰を躍らせながら、庸は両方の乳房を吸い込んだ。双つの乳首を舌で連打する。エージェントAが悲鳴を上げ、また絶頂に達した。同時に庸もチンポを搾られて射精し

た。

（全部搾られた……）

庸はエージェントAの身体にしがみついた。豊かなバストと豊かな肢体に顔と身体を押しつけて、腰をふるわせる。

気持ちいい。

はまってしまいそうなくらい、気持ちいい。

（アイゼナハやインフィニアとした時と同じくらい、気持ちいい……）

エージェントAがはあはあと息をついた。少し上体を起こす。乳房が庸の口から離れて、下を向いた。特大のラグビーボールみたいなふくらみが、先端を尖らせている。まるで胸のロケット砲だ。

「胸を搾りなさい」

エージェントAの命令に、庸は両手でバストを握り搾った。

「ああっ！」

エージェントAが歓喜の声を上げて背中を反らす。すぐにヒップを揺さぶりはじめた。美肉が再びペニスに吸着し、細かな肉髪を押しつける。

「またイク……」

「イキなさい……何度でもイカせてあげる……その代わり、何度でもイカせなさい……」

エージェントAのヒップが躍った。まるで暴れ馬のようにくねくねとうねりながら、上下動をくり返す。

（やばい、またイク……!）

庸は両手で――〇センチ超のバストにしがみついた。イキそうになってバストを揉みまくる。指が信じられないくらいに深さまで沈み込んだ。揉むだけでイキそうになる。オッパイもオマンコも気持ちよくて、チンポが融けそうだった。

イクまでの時間を引き延ばそうと、庸は激しく乳首を引き伸ばした。だが、エージェントAは腰を激しくくねらせてただけだった。膣肉がペニスに吸着し、ペニスを狭搾した。快感が一気に炸裂し、精液が輸精管を上昇した。激し

く呻きながら、庸は双つのバストをギチギチに搾った。だが、それが限界だった。チンポがとけそうな快感に襲われ、庸は超乳を搾りながら射精していた。エージエントAも歓喜の悲鳴を上げた。庸に搾られて淫乳をひしゃげさせながら、ヒップを振り回し、自らも絶頂に達して庸の精液を受け止めた。

「ステキだったわ……」

エージエントAが吐息をつき、リモコンに手を伸ばした。解錠のスイッチをオフにする。庸の両手は、再び拘束されて一つに合わさった。脱出計画は完全に失敗したのだ。

聖ルミナは、夜の中を走っていた。身体が、軽い。飛ぶようにとよく言うが、本当に飛ぶように軽い。躍動感に溢れている。跳躍一つを取っても、軽く踏み切っても自分が高く飛んで行く。

乳雲寺の高いフェンスも、まるで縁石を飛び越えるように軽々と越えてしまった。背中には、ハンドロケットランチャーに詰める重力弾を九発分、ナツブサツクに詰め込んでいる。相応の重さがあるはずなのに、普通に走れる。

（庸くんのおかげ……？）

わからない。

中学時代から片思いしていた同級生に胸をさわらせるのは、本当に不安で、本当に恥ずかしかった。

胸をさわってくれなかったらどうしよう。おまえの胸なんか興味ない、さわる気になれないなんて言われたらどうしよう。わたし、死んじやう。誰にでも胸をさわらせるヤリマンに思われたりしないかな。庸くんだから許すのに。他の人になんか、絶対こんなことしないのに。

不安と葛藤で壊れてしまいそうだったが、庸は胸をさわってくれた。自分のオッパイを吸ってくれた。そして最後にはパイズリを求めてくれた。うれしくて、いっぱいパイズリでイカせてしまった。自分のパイズリを気持ちいいと、庸が認めてくれたのだ。その高揚が、自分の身体を軽くしているのだろうか？

自分に遅れて、ホワイトローズとブルーゴージャスがフェンスを越えた。自分と同時タイミングだったのは、ピンクボリス——爆乳アイドルの理奈だけである。

「ピンク！ ローズ！ あまり突っ走らないで！ 四人いっしょに行動することが重要です。今回の目的は——」
制しようとするブルーゴージャスに、

「庸クンを奪い返せないように、アイゼナハを叩く」

とピンクボリスがウインクをしてみせた。

作戦会議で先制攻撃を掛けると言い出したのは、ピンクボリスである。ホワイトグラスもそれに乗った。ブルーゴージャスも同意した。

明日は月曜日——庸には学校がある。本音としては、学校に行かせたくない。行かせれば、デモニア救星団が庸を奪還するために攻撃を仕掛けてくるかもしれない。

昼間は戦闘はしない？

だが、デモニアはすでにアイゼナハとインフィニアをクラリツサの親戚として護衛の形で送り込んでいる。次もまた同じことをしてくる可能性が高い。そして、隙を見て奪還——。

奪われれば、庸はまたポールシフトされてしまう。ポールシフトすれば、そのまま暗黒騎士になる可能性が高い。そうなってしまうば、もう庸を味方にすることはできなくなってしまう。自分たちに残されるのは、敗北の連続だ。その先には破滅しかない。

ならば、どうするか？

月曜日の朝が来るまでに、基地を破壊すること。完全に基地を破壊すれば、連中は別の拠点に移るしかなくなる。そうなれば、庸を奪い返すのも難しくなる。

明日からについては、日中は自分たちが庸をガードすればいい。その間に、詩鶴が特別生の特権を使って、庸を修道生から一般生に格上げするように申請する。クラリツサは断りづらくなるだろう。いくら庸がクラリツサ担当の修道生とはいえ、格上げに対して反対するのは難しいに違いない。もし反対すれば、せっかくのいい話をなぜ潰すのか、と学校から問い詰められることになるだろう。

庸を一般生に格上げしたら、聖母教会の監視の目が届いた場所に庸を居住させればよい。そうすれば、庸はずっとエージェントたちの味方でありつづける。

（庸くん、待っててね）

聖母教会の第二教会——秘密の隠れ家で待っているはずの庸のことを、ルミナは思った。

（せっかく庸くんにはさわってもらったんだもん……！　わ

たし、がんばる……!」

ルミナはいつもより気合を込めた。

「先頭はわたしとローズで行くよ」

と振り向きもせずにピンクボリスが告げた。

「わたしとホワイトグラスは後方支援に回ります」

とブルーゴージャスが改めて宣言した。

ピンクボリスが方向を変えて走りだした。ルミナはすぐにあとを追った。暗視ゴーグルのおかげで、暗闇でもよくものが見える。

胸はドキドキしていた。今回の作戦の可否は、自分に大きく関わっているのだ。背中のバックに、持てるだけ重力弾と無重力弾は詰めてきたが、数に限りはある。後々のことを考えると、あまり暗黒騎士や戦闘員相手に使いたくない。

久々に正義の味方に復帰したからか、ピンクボリスは気合充分だった。

突っ走って負ける？

ううん。

ピンクボリスは昔のピンクボリスではない。さっきだつて、アイゼナハとインフィニア相手に五角以上に戦っていたのだ。そして何よりも、彼女はデモニアの秘密基地の内部を知っている。その自信もあるのだろう。

真っ暗なブナの森を抜けて、池に出た。

この池は覚えている。自分が庸くんに押し倒された場所だ。あの時は、戦闘員βが庸くんだとは思っていなくて、知らない敵だと思っていた。だから、胸をさわられた時も、「もしさわらせるのなら、初めては庸くんに……」って思っていたのに、知らない敵にさわられちゃった」と泣きそうになっていた。だが、さわっていたのはその当の本人だったのである。

「来た」

ピンクボリスが立ち止まった。ルミナの後ろで、ブルーゴージャスとホワイトグラスも停止する。

池の向こうにデモニア救星団の連中が見えていた。暗黒騎士のアイゼナハとその部下三名。暗黒騎士のインフィニ

アとその部下三名。合計八名だ。

作戦会議で理奈が言った通り、二隊しかない。連中は常に二隊で夜警を務めている。庸を奪われても、体制に変化はなかったらしい。

庸はその程度の人物？ もっと大切な仲間だと思っているのに、デモニアにとってはその程度なの？

(わたしたちが庸くんを守ってあげなきゃ)

そんな思いにルミナは囚われた。

「いい？ 計画通り、こっちも二隊に分かれて引つけるよ」

理奈ことピンクボリスが言い、ブルーゴージャスとともに左手——池の東側へ向かった。ルミナはホワイトグラスとともに右手——池の西側に向かった。デモニアも二隊に分かれて、迎撃へ向かう。

(動き出した！)

「いいか。充分引きつけてから戻るんだ」

とホワイトグラスが囁く。

あまりホワイトグラス——白井京一郎のことは好きではない。京一郎は同じクラスの優待生で成績は優秀だが、自分の胸ばかり見ているし、性格も自分勝手に冷たそうだった。たとえば底辺に甘んじていても、温かそうな庸くんとは違う。

「戻ろう」

ホワイトグラスが反転した。後ろを気にしながら、元来た道に戻る。ホワイトグラスが池の東側に目をやった。ルミナも目をやった。

ピンクボリスとブルーゴージャスも反転を始めている。そのずっと向こうには、迎撃しようとしているデモニア人の戦闘員と暗黒騎士——。

「見てろよ」

ホワイトグラスが、池に向かってアイスフロストを放った。氷の壁が池を突っ切る。同時に水面が凍る。ホワイトグラスがさらにアイスフロストを連発する。さらに池の水面の色が変わった。

「走れ！」

ルミナは池に向かって走り出した。きっとピンクボリスも向かっているはずだ。

水面は――？

途中で氷が割れない？

足を着いた。

大丈夫！　ちゃんと凍ってる！　氷も薄くないみたい！

「おれが防御する！　振り返るな！　走れ！」

ホワイトグラスの声に、池の上を走る。走れば、きっと十秒も掛からない。

「ローズ！」

ピンクボリスが西の方から近づいてきた。

やった。

合流を果たせた。

「このまま行くよ！」

ピンクボリスが叫んだ。

ホワイトグラスが池の前で立ち止まり、アイゼナハと戦闘員たちに向かってアイスフロストを放った。それから自分も走り出す。ブルーゴージャスもすでに池に向かっている。

ピンクボリスの考えた作戦は、池を凍らせることだった。デモニアの秘密基地の区画で言うと、池はD4とE4を跨いでいる。池の向こうにD3があり、そこに秘密の入り口があるという。

普通に考えれば、エージェント側からすれば池は妨害、デモニアにとっては天然の楯である。ルミナたちが池に入れば動きは鈍り、デモニアの連中に狙い撃ちにされる。ルミナたちエージェントも池を迂回するしかない。

だが、池を凍らせてしまえば、池は強襲の最短ルートとなる。迂回して迎撃に来たデモニアの戦闘員たちを巻いて、一気に秘密の入り口に急行できる。

ルミナは立ち止まって後ろを見た。ホワイトグラスとブルーゴージャスは、まだ池の上だ。デモニアの戦闘員たちがわいわい騒ぎながらナムボールと拘束ボールを投げ込んでいる。

アイゼナハが鞭を振るうのが見えた。

(ブルー……！)

「止まらないで！ 基地を破壊すればなんともなるから！」

ピンクボリスの声に、ルミナはスピードを緩めずに走った。暗闇の中を抜ける。

「ここだ！」

ピンクボリスがしゃがみ込んだ。草を掻き分けてボタンを押す。

扉が開いた。

デモニアの秘密基地への扉だ。一度だけ中に入ったことがある。あれからどれくらいぶりだろう。また、あの敵の心臓部へ——敵の巣窟へ入り込むのだ。

待っているのは罠？

ううん。

今回の作戦は完璧。

ピンクボリスの後に つづいて、ルミナは階段を駆け下りた。

2

クラリッサは、アイゼナハ隊の待機室で警報を聞いた。

《エージェント侵入、エージェント侵入！ D3よりエージェント侵入！ 奉仕局員も迎撃に備えよ》

基地の女性要員の声が響く。

つづいて、待機室のコールが鳴った。

「クラリッサ、聞こえる？」

アイゼナハの声だった。

「エージェントが二人侵入したわ！ ピンクとローズ！ 奉仕局員を率いて待ち伏せをしなさい！ 自分からは攻撃を仕掛けないこと！」

「了解！」

出発前に待機室のモニターに目をやると、D3から延びる通路が映っていた。次々とシャッターが閉まっていく。

これで二人のエージェントを防げる？
いや。

きつと二人はやってくる。

クラリツサはアイゼナハ隊の待機室を飛び出した。蒲鉾の断面図のような、半円形の通路がオレンジ色の照明に照らし出されている。

エージェントがこの基地に侵入するのは、自分がデモニア救星団に入団して以来、二回目だ。一回目の活躍で、庸は正式に戦闘員に格上げになった。

（奉仕局員を集めなきゃ）

クラリツサは地下通路を走った。

奉仕局員の詰め所の場所はわかっている。かつて、自分もそこで奉仕局員として働いていたのだ。

詰め所には、男女四名の奉仕局員が詰めていた。

「迎撃するんだろ？」

と男性の奉仕局員が尋ねた。

「ええ。通路から居住エリアに出てきたところを待ち伏せ攻撃する。拘束ボールとナムボールを全部集めて」

早速もう一人の男性奉仕局員が、詰め所に備えつけてある拘束ボールを取り出す。このボールを工場で組み立てる時、庸に助けてもらったな……と懐かしいことを思い出す。でも、今は思い出に浸っている場合ではない。

クラリツサも拘束ボールの入った箱を担いで、地下通路に飛び出した。

ちょうど通路に掲げられたモニターが、D3から延びる通路の映像を映し出していた。ローズスコラがランチャを放っている。シャッターが揺れ、すうっと上にスライドした。

（無重力弾！）

シャッターは上下に開閉するものだった。無重力弾を撃ち込んで、扉を浮き上がらせているのだ。

（来る……！）

「急いで！ 来るわよ！」

クラリツサは四人の奉仕局員に命じて、居住エリアの入り口へ向かった。安全のため、通路は百八十度曲がってから居住エリアにつながっている。エリアに入ると少しして通路は右に曲がる。左手に奉仕局員の詰め所があり、右手

にはブルやビリヤードルームなどの娯楽室がある。

（奉仕局員四人を並べて迎え撃つ？）

いや。

エージェントたちも待ち伏せは読んでいるはずだ。

危険なのは、ピンクポリスのドリーム弾とローズスコラの無重力弾だとクラリッサは思った。ドリーム弾を撃たれると、夢見心地になってしばらくの間、戦闘能力を失ってしまう。無重力弾を撃ち込まれると、身体がふわふわと浮いて、ボールを投げられなくなってしまう。

ローズスコラの場合、重力弾も危険だった。天井に重力弾を撃ち込まれば、天井の崩落につながる。

（ドリーム弾にせよ無重力弾にせよ、直撃は危険）

とクラリッサは考えた。四人を横一列に並べていては、いい標的だ。

（だったら——）

3

ブルーゴージャスこと真王寺詩鶴は、ホワイトグラスとともに反撃しながら後退していた。

インフィニアは接近を狙っているようだった。アイゼナハが電光の鞭を放つ。ホワイトグラスがアイスフロストを放つと、直後に戦闘員たちが拘束ボールを投げる。その間に、インフィニアが走り出す。詩鶴が《拘束の矢》を、ホワイトグラスがアイスフロストを放つと、くると反転して二人の攻撃を躲す。またアイゼナハが電光を放ち、戦闘員が拘束ボールを投げる。そのくり返しである。

詩鶴たちは二名。

《拘束の矢》で、二人の戦闘員は葬り去ったが、残りは六名である。

「開いた空間より狭い空間で防御した方が有利だ。おれが防御する。入り口に逃げ込め」

ホワイトグラスの命令に、詩鶴は反論した。

「わたしが防御します。あなたが先に」

「いいから先に行け！」

「隊長はわたしです」

「足はおれの方が速いんだぞ！」

雷撃が飛び、ホワイトグラスがアイスフロストで弾き返した。インフィニアが走り出す。《拘束の矢》を放って、詩鶴は入り口に飛び込んだ。その後に、ホワイトグラスがつづいた。

4

ルミナは、居住エリアの最後のシャッターに辿り着いたところだった。ここまで来るのに、無重力弾を三発使ってしまった。背中のナツブサックに、詰め込めるだけ重力弾を詰め込んできている。

「わたしが開けるよ。ピンクは天井を」

ピンクボリスが言い、シャッターを開いた。ピンクボリスがコルトパイソンを握ったまま、飛び込む。くると回転して、拳銃を向ける。ルミナも後につづいた。

待ち伏せは——いない。

「今よ！」

女の声が聞こえ、斜向かいの扉が開いた。いきなり男の奉仕局員が二名、拘束ボールを投げ込んできた。

ピンクボリスが横っ飛びに飛んだ。二発、コルトパイソンで連射する。奉仕局員が惚けた表情を浮かべて転がった。

凄い。

横っ飛びの二連発で命中なんて、普通にできることじゃない。

ふいに右の方で扉が開いて、女の奉仕局員が姿を見せた。ルミナは慌ててハンドランチャーを向けた。重力弾を撃つ。

二人の女が途端にべしんと潰れたようにその場に落ちた。ピンクボリスがつづいてドリーム弾を撃ち込む。

（これで全滅？）

殺気を感じた。

顔を向けた先に、黒いライダージャケットを着た女戦闘

員が投球モーションに入っていた。豊かな胸が張り、腕がしなった。

凄いスピードで拘束ボールが飛んだ。

(ピンクに当たる……！)

その瞬間、ルミナはハンドランチャーを向けると同時に重力弾を放っていた。拘束ボールがピンクボリスに向かう。

二メートル手前で、重力弾が拘束ボールの横つ面を叩いた。拘束ボールが弾け、同時にドンと下に落ちた。ピンクボリスに命中するはずだった拘束ボールが、重力弾に弾かれて遙か手前で落下してしまったのだ。

(次！)

頭の中で考える前に、手が動いていた。引き金を引いた直後、ライダージャケットの女が膝から崩れ落ちた。重力弾が直撃したのだ。すぐにピンクボリスが止めを刺す。

「凄いじゃん！」

ピンクボリスが振り向いて顔を輝かせた。

自分でもびっくりしていた。どうしてあんなに速く反応できたのか、あんなに正確に重力弾を撃てたのか、自分でもわからない。

まさか、庸くんのおかげ？

きっとそうだ。

庸くんの力だ。庸くんにおッパイをさわってもらったからだ……！

庸くん凄い！

「三発、使っちゃったね」

とピンクボリスが言う。

「ピンクが捕まったら、大変だから」

「ありがとう。早く、天井を撃って」

「うん」

ルミナは弾を詰め込んで、天井にランチャーを向けた。

奥の方に狙いをつけて、引き金を引いた。

一発命中。天井が揺れる。

二発命中。

三発命中。

自分でも凄く冷静だ。こんなふうに計画って進むものなのだろうか？　こんなふうに勝利って訪れるものなのだろうか？

「次」

ピンクボリスが促す。ルミナはまた弾を詰め込んで、引き金を引いた。

四発目命中。

五発目命中。小さな亀裂が走った。

六発目命中。天井に大きな亀裂が走った。

（いける……！）

残りの重力弾は三発。作戦の成功はもう目の前だ。ルミナは初めて武者震いを覚えながら、ハンドランチャーに最後の重力弾を詰めはじめた。

5

真王寺詩鶴は、ホワイトグラスとともに狭い通路を走りながら《拘束の矢》を放っていた。かつて古代パルティ人は、馬で後退しながら馬上から後ろ向きに矢を放ったという。パルティアンショットというが、自分たちは騎行ではなく走りながらのパルティアンショットだった。自分が《拘束の矢》を、ホワイトグラスがアイスフロストを放ちながら、ひたすら逃げる。その自分たちを、アイゼナハの鞭が追いかける。

「右！」

ホワイトグラスの言葉に、右に飛んだ。詩鶴のすぐ左を、電光が駆け抜ける。

詩鶴は立ち止まって、《拘束の矢》を放った。インフィニアが簡単に躲す。だが、すぐ後ろの戦闘員に命中した。これで二対五。

それでも相手が数的に有利なのは変わらない。ずっと反撃しては逃げ、反撃しては逃げるくり返しだ。

戦闘員たちは背中のバックに大量の拘束ボールを詰め込んできていた。一人当たりもう十球以上は投げているはずだが、まだボールは残っているようだ。

早く合流しなければ、と詩鶴は思った。

ローズスコラとピンクボリスと合流すれば、四対五。数の上の不利は少なくなる。おまけに、パワーアップしたエージェントが自分たちには加わることになる。

パワーアップした暗黒騎士二名と雑魚三名。

パワーアップしたエージェント二名と自分たちエージェント二名。

合流できれば、勝てる。簡単に退けられる。だが、自分たち二人では限界がある。

二人の暗黒騎士は相当に手強かった。暗黒騎士一人に対して自分たち二人が相手して何とかなるようなレベルである。その場に留まっていれば、とつくの昔にやられている。自分がパワーアップしていれば何ということはない。たのかもしれないが、この暗黒騎士に勝つただけに修道生に胸をさわらせるなんて、絶対いやだ。

「もう逃げないの？」

とアイゼナハが尋ねてきた。いつもより目が鋭い。

庸を奪われた怒り？

恐らく。

インフィニア——二本角の暗黒騎士の方も、据わった目をしている。まるでゾーンに入ったような目つきだ。

詩鶴は《拘束の矢》を番えた。この矢を含めて、残りは三本。矢が尽きかけている。

「あなたたちの腹は読めているわよ。逃げて逃げて合流するつもりでしょ？ でも、そうはさせない」

ホワイトグラスがアイスフロストを放った。同時に詩鶴は走り出した。走りながらまた身をひねって、パルティアンショットを放つ。

インフィニアは無表情に矢を躲した。今日のインフィニアには、何本射ても当たらない。

「はあっ！」

ホワイトグラスがアイスフロストを放つ。氷の壁がインフィニアに向かって伸びる。

（躲したところを——）

《拘束の矢》を番えた詩鶴は目を疑った。己に迫る氷の壁

に、インフィニアがひよいと駆け昇ったのだ。

驚嘆と恐怖の中で、詩鶴は《拘束の矢》を射た。インフィニアが飛んだ。壁の上を疾走する。

(ひっ……！)

「くそっ！ くそっ！」

ホワイトグラスが走りながらアイスフロストを連続で放った。足音がすぐ近くで聞こえる。

きつと当たっていないのだ。

「ブルー！」

緊迫したホワイトグラスの声に振り返ろうとした詩鶴は、寒気を覚えた。

隣に、何かがいる。

ホワイトグラスではない。横にいるのは恐らく――。

顔を向けた詩鶴は表情をひきつらせた。すぐ真横を、インフィニアが並走していたのだ。

インフィニアがにたりと笑った。まるで地獄の底から這い上がってきたような笑みだった。詩鶴の背筋を悪寒が走った。詩鶴が弓矢に手を伸ばした直後、拳が襲いかかった。拳は顔ではなく、腹に来た。

(はうっ……！)

思わず足がもつれた。お腹を抱えて倒れた。間髪容れず、蹴りが腹部に襲ってきた。詩鶴は呻き声の後、唾液を洩らした。

もう立てなかった。腰まで衝撃が来ていた。身体力が抜けてしまっている。

とんでもないパンチと蹴りだった。前はこんなに凄くなかったはずだが……やはり、庸の力？

(わたし、やられちゃうの……？)

不安が襲いかかったその時、

「うりやああっ！」

ホワイトグラスが奇声とともにアイスフロストを放った。途端にインフィニアは片腕で詩鶴を抱き抱えてあどろさった。アイスフロストを軽々と躲す。

化け物だ。

とても人間とは思えない。普通のデモニア星人とも思え

ない。

「降伏しろ。こいつを殺すぞ」

詩鶴を片腕で抱えたまま、インフィニアがホワイトグラスに告げた。

6

ルミナは重力弾をハンドランチャーに装填したところだった。あとは天井に狙いをつけて――。

《ブルーが捕まった!》

突然、悲痛なホワイトグラスの声がインカムから飛び込んできた。

「捕まった!？」

ピンクボリスが聞き返す。

《鬼娘に捕まった! 降伏を要求されている!》

「そこにいて!」

ピンクボリスがドリーム弾を装填して走り出した。咄嗟にルミナも、

「わたしも行く!」

とあとを追った。

「ローズは基地をぶっ壊して!」

「でも、ブルーが捕まったんでしょ？」

「だって、もう少しで基地を破壊できるんだよ? 破壊の方が先だよ!」

とピンクボリスがルミナを説得しようとする。

「ピンク一人じゃ、二人の暗黒騎士は無理だよ。弾、三発しか残ってないの。全部使ったら、戦えない」

ピンクボリスが唇を噛んだ。あともう少しのところ
で……と思っているに違いない。

「ついてきて!」

「うん!」

ルミナはピンクボリスとともに走り出した。

惜しかった?

惜しかった。

あと三発撃ち込めば、確実に基地の天井は崩落していた

だろう。でも、それでブルーゴーギヤスを失っては元も子もない。ピンクボリスだけでは、あの手強い二人の暗黒騎士を相手に戦えない。

シャッターを抜けた。

ルミナは、暗い通路をピンクボリスとともに走った。生身の身体で走る時と感覚が違う。足が凄く回転している感じがする。どんどん前へと進んでいく。

（ブルーが捕まったことは、武器を奪われたのかな）

とルミナは不安に思った。

奪われたのかもしれない。ということは、味方の矢に狙われるということが起きるかもしれない。暗黒騎士たちも、《拘束の矢》でルミナとピンクボリスを迎撃することは考えているに違いない。

（このまままっすぐ行ったら、罠にはまっちゃうかも）

「ピンク、待って！」

ルミナは声を掛けた。

「止まって！ このままじゃ、罠にはまっちゃうよ！」

「作戦会議してる暇なんかないよ！ ブルーがやられちゃう！」

とピンクボリスが走りながら返す。ルミナも返す。

「《拘束の矢》、きつと射ってくるよ！ 電撃の鞭といっしょに！」

「躲せばいいじゃん！」

と走りながらピンクボリスが答える。

「躲すだけじゃ、ブルーは奪い返せない！ まともに戦えるのは、わたしとピンクしかないんだよ！ 作戦がないと、ブルーを助けられない!!」

ピンクボリスがようやく立ち止まった。ルミナもピンクのそばで止まった。ようやくルミナの説得に耳を貸したのだ。

「で、どうする気？」

仮面の下から、ピンクボリスが鋭い視線を向ける。

ルミナは考えた。

「どうやってブルーを助ける？」

ブルーが捕まったということは、デモニアは《拘束の

矢》を射ってくるということだ。直撃すれば、自分たちも拘束される。アイゼナハも電光を放ってくるだろう。長引けば、きつと不利になる。

「ブルーを助けるのが先決だと思うの」

「そんなのわかってる」

と不機嫌にピンクボリスが返す。ルミナは少し怯んだ。自然に声が小さくなる。

「最初の一撃でブルーを取り返せないかな？ わたし、まだ重力弾が三発残ってるの。それを使って——」

「当たるわけないじゃん」

「でも、ピンクがドリーム弾を撃てば——」

「そんなの躲され——」

反論しかけて、

「あっ……！」

とピンクボリスが声を上げた。

「そっか……！ それだ！」

「それって？」

「だから——」

とピンクボリスが耳打ちする。ルミナは目を輝かせて、うなずいた。

「ローズが弾を使い切ったら終わりだからね。ちゃんと当てるよ」

ピンクボリスの言葉に、ルミナはうなずいた。

とても重要な役目を負うことになった。うまくやれるだろうか？

わからない。

胸はドキドキしている。

失敗したら、打つ手がなくなる。

でも——。

今日の自分は違うはずだ。庸くんに胸をさわってもらったのだから。

「いくよ」

ピンクボリスが猛然と走りはじめた。

アイゼナハは、インフィニアから弓矢を受け取って確かめているところだった。矢が命中すると、矢が開いて一瞬のうちに拘束されてしまう。

おかしい飛び道具だった。デモニア星では、飛び道具は禁止されている。自分の筋力以外を使って投げるもの——弓矢や拳銃などは、たとえ他の惑星であっても使用禁止である。

だが、奪ったものは？

奪ったものを奪った時に使うことは禁止されていない。ただし、持ち帰って常備の武器とすることは禁じられている。

アイゼナハの隣で、インフィニアはがっかりとブルーゴージャスを捕まえていた。首を絞められて、ブルーゴージャスは悶えている。あまり抵抗する力はないようだ。

庸のことも心配だったが、基地のことも心配だった。先に侵入した二人はどんな破壊活動を行ったのか。

アイゼナハはホワイトグラスに目を向けた。もう一人のエージェントは、数メートル離れて自分たちと対峙している。

この男は氷の武器を使う。アイスフロストを放って、氷の壁で自分たちをぶっ飛ばそうとする。

だが、こちらには人質——ブルーゴージャスがいる。おまけに人数でも自分たちが勝っている。戦闘員たちはまだ二人残っているのだ。つまり、四対一である。

「早く降伏しろ」

とインフィニアがくり返した。

「仲間の到着を待っても無駄だ。時間稼ぎをするつもりなら、おまえから始末してやる」

インフィニアが目で合図した。

アイゼナハは矢を弓に番えた。ホワイトグラスが構える。

（これで終わりにしてやる）

突然、足音が飛び込んできた。アイゼナハは矢を放った。同時にホワイトグラスがアイスフロストを放つ。小さ

な氷の壁が矢を弾く。

（氷の壁が低い）

ホワイトグラスも疲れてきているのだ。

（いける）

アイゼナハが二本目の矢を向けた時、足音が飛び込んできた。いやあああつ！と威勢のいい怒号とともに、二人のエージェントが見えた。

ピンクボリスとローズスコラ——二人がブルーゴージャスを助けるために戻ってきたのだ。

（倒すのはこちらが先！）

アイゼナハは戦闘員に弓矢を渡した。

「射なさい！」

そして自分は鞭を振るった。激しい電光が飛ぶ。

ピンクボリスとローズスコラが二手に分かれた。かたや右の壁を、かたや左の壁を駆け上がる。割れた間を電光が抜け、氷の壁を粉碎する。

ピンクボリスがコルトパイソンの引き金を引いた。ほぼ同時にローズスコラがロケットランチャーを放った。

インフィニアが、ブルーゴージャスを抱えたままドリム弾を躲す。その躲した先に弾が向かっていた。

インフィニアがくると反転した。すぐ腕の横を弾が抜ける。

反転したインフィニアに、二発目の弾が迫っていた。だが、弾は少しずれていた。インフィニアではなく、ブルーゴージャスに炸裂したのだ。

（同志撃ち！ 愚かな！）

インフィニアの腕が一気に下がった。ブルーゴージャスの身体が引き下がる。

（重力弾!?!）

三発目の重力弾が、さらにブルーゴージャスに命中した。インフィニアの表情に苦痛が走った。腕がだらんと下がり、インフィニアの両腕からブルーゴージャスが転がり落ちた。

敵の狙いはインフィニアではなかった。ブルーゴージャスだったのだ。重力弾がブルーゴージャスに命中すれば、

ブルーゴージャスは重くなる。二発も当たれば、さすがのインフィニアもブルーゴージャスを抱えていられなくなる。エーリエントたちはそれを狙っていたのだ。

ピンクボリスがコルトパイソンを放った。作戦の意図に気づいたホワイトグラスが、最後の力を振り絞ってアイスフロストを連発する。

ブルーゴージャスを拾い上げている暇はなかった。インフィニアとアイゼナハは後退した。そしてその時には、ピンクボリスとローズスコラがブルーゴージャスに辿り着いていた。

ホワイトグラスがアイスフロストをさらに連発した。アイゼナハとインフィニアの前に、幾重にも氷の壁が立ち上る。さらに煙幕が立ち上った。

（こっちに来るつもりね！）

アイゼナハは鞭を振るって電光でぶち壊した。自分たちの脇を抜けようとしても無駄だ。猛然と動けば空気が動く。それで居場所がわかる。

だが――。

空気が動かない。

「基地に戻ったのか!？」

インフィニアの声に、アイゼナハは走り出した。煙幕はずっと基地へとつづいている。

アイゼナハはさらに走った。

煙幕が晴れた。エーリエントの姿はない。エーリエントたちは基地へ戻ったのだ。

（壊せるものか!）

そこでアイゼナハは気づいた。ピンクボリスは、庸の慰み物として何度も基地に来ていた。基地から外へと通ずる道は覚えているはずだ。

（そっちなか!）

「追うわよ、インフィニア!」

アイゼナハの言葉に、インフィニアが走り出した。一気にアイゼナハを追い抜く。

速い。

まだ庸の力が残っているのだ。

（追いついて！）

アイゼナハとインフィニアは基地に飛び込んだ。目にしたのは、またしても煙幕と氷の壁だった。壁を打ち払いながら、アイゼナハはインフィニアとともに基地を突っ切った。人間たちがいつも使っている通用口へと走る。

乳雲寺に出た。昏冥の闇が二人を出迎えた。すでにエージェントの姿はなかった。エージェントたちはまんまと逃走に成功してしまった。せつかく手に入れた人質を取り返されて、逃げられてしまったのだ。

「くそう！」

インフィニアが台詞とともに悔しさを投げ捨てた。アイゼナハも同じ思いだった。ブルーゴージャスを人質としてキープできていれば、庸との交換にも使えたはずなのだ。だが、最も重要な手駒を失ってしまった——せつかく苦勞して手に入れた人質を！

白井京一郎は、ルミナや理奈たちと第二教会へ向かっているところだった。ブルーゴージャスこと真王寺詩鶴は、ルミナと理奈に両側から支えられて屋根から屋根へと飛び移っていた。京一郎も、後衛として後方の警戒に当たりながら三人を追いかけていた。

気分は正直、複雑だった。

戦闘員βこと濁川庸は、同じクラスの最底辺男である。

学園のヒエラルキーでは最下層に属している。到底尊敬できないし、尊敬したくない相手だ。その上、恋敵でもある。京一郎はルミナのことをいいなと思っていたのだ。だが、ルミナはずっと庸に片思いしていた。それだけでも許せなかったのに、最底辺男は自分がさわりたいと思っていたルミナの胸をさわり、自分がパイズリしたいと思っていたルミナの胸でパイズリしたのだ。事実はルミナがパイズリを志願し、そして自ら庸に胸を揉まれることを望んだのだが、どちらが主体性を持っていたかは重要ではない。自分が欲していた女を、自分が軽蔑している男にものにされることほど、腹立たしいことはない。

（何が乳揉み係だ。何がエージェントをパワーアップできるだ。失敗しろ）

そう胸の中では暗黒エナジを發揮していたのだが、結果は正反対となった。庸のおかげでピンクボリスは復活し、ルミナことローズスコラはパワーアップした。

とんでもない効果だった。ピンクボリスもローズスコラもまるで別人だった。ピンクボリスにも驚いたが、ローズスコラの動きも、桁違いだった。壁を駆け上がってランチャーを撃った時には、目を疑った。しかも、砲撃は正確だった。詩鶴に重力弾を命中させ、見事に詩鶴を救い出したのだ。

ルミナ無双だった。庸に胸を揉まれただけで、ルミナは

世界クラスの凄腕エージェントに変身してしまったのだ。どうりでエージェントAが、卑猥な儀式を行ってでも庸を手に入れようとするわけだ。

庸はただものではない。胸を揉むだけでルミナを無双にするなんて、普通のやつのはずがない。あの男はデモニア救星団を無敵に変えた。だが、ルミナとピンクポリスも無敵に変えたのだ。自分たちエージェントは盛り返せるかもしれない。

だが、それは、庸の存在感がエージェント内で強まることを意味していた。ピンクポリスとローズスコラは、ますます庸にエツチなお礼をするだろう。高校入学以来ずっと京一郎が見とれてきたローズスコラの爆乳が、あの庸に、学園の最底辺野郎に、ますます揉みしだかれ、吸われることになるのだ。

(くそう……!)

聖ルミナは詩鶴といっしょにジャンプをくり返しながら興奮していた。血が、身体の中で躍っている。身体中の細胞が騒いでいる。

庸に胸をさわってもらって初めて迎えた出撃は、大成功だった。跳躍を始めた時から、もう違っていた。エージェント姿になれば運動能力は飛躍的に向上するが、それも桁違いだった。自分の身体とは思えないくらい、身体が軽かったし、走るのも速かった。ハンドランチャーも、標的を確認して引き金を絞れば当たってしまう。あの動きの速いインフィニア相手でも、正確に狙えた。普段の自分ならば、ブルーゴージャスだけに命中させるなんてことはできなかったに違いない。いや、できるできない以前に、放った重力弾はすべてインフィニアに躲されていたはずだ。

なのに、当てられた。

凄いと思った。

胸以外、ルミナは目立つ女ではない。名字こそ聖だが、目立たない昆虫のように地味な存在で、運動神経だって勉

強だって、特別秀でているわけではない。胸以外、卓越性からは縁のない存在として生きてきたのだ。だからこそ、卓越性を身にまとえるエージェントになったのだろうが、それにしても、今日の自分は凄かった。卓越性そのものだった。生まれて初めて、運動神経的に——戦闘的に——華々しい卓越性を発揮したのだ。それもすべて庸のおかげだった。

（庸くん、凄い……！）

とルミナは強く思った。庸くんを胸をさわってもらっただけで、こんなに強くなっちゃうなんて。

基地の破壊まではあと一歩だったけど——それは残念だったけど、また攻撃に行けばいい。次こそ、必ずデモニアの基地を破壊してやる。その前に——庸くんに会いたいとルミナは思った。自分が今日輝けたのは、庸くんのおかげなのだ。庸くんにお礼を言いたい。

あ。

敵を倒せたよ、ありがとうって言ったら、庸くん落ち込んじゃうかも。

（でも、庸くんにお礼はしたいな……）

3

秋元理奈は、ようやく第二教会に到着したところだった。玄関の扉を閉めると、ホワイトグラスが監視カメラを外を確認した。

「大丈夫だ。連中は尾けてきていない」

理奈は部屋に入った。

充実感よりは、悔しさの方が強かった。

勝てた戦いだった。ブルーゴージャスが敵に捕まって人質になることがなければ、デモニアの基地は破壊できていた……。

思わず、ブルーゴージャスの背中を見る。

（チームリーダーのくせに人質になるなんて）

基地を破壊できなかったのは、あんなのせいよ、と怒鳴りたくなる。それくらい、惜しかったのだ。もうちょっと

だったのだ。

でも、破壊できなかった。これで連中は警戒するだろう。普段は二隊が基地の警戒に当たっているが、明日からは三隊が増えるに違いない。

（やるなら今夜）

と理奈は思った。

（でも、今のメンバーじゃ、戦っても同じだ）

理奈はブルーゴージャスの背中に視線を突き刺した。いやだろが何だろが、チームリーダーには呑んでもらうしかない。

4

真王寺詩鶴は、応接間でソファに腰掛けてうつむいていた。とても顔を上げられなかった。周りのソファには、秋元理奈と聖ルミナ、そして白井京一郎とエージェントAが着席している。

報告は終わったところだった。

もう心臓は鳴っていない。インフィニアに捕えられている間は、喻えれば自分の中には不安と絶望で沸騰した熱湯だった。胸の中には不安と恐怖で沸き立っていた。今は落ち着きの冷水が注入されて温湯になったが、後悔と衝撃で胸はざわめいていた。

自分が捕まらなければ、基地を破壊できていた――。

そう、ピンクポリスが明言したのだ。あと三発重力弾を撃ち込めば、基地の天井は崩壊、基地も破壊というところまで進んでいたそうだ。

だが、自分が人質になってしまった。ローズは基地の破壊を命じたが、それではブルーを救えないからとローズが反論。天井の破壊を断念して自分の救出に来てくれたのだ。

第二教会へ向かっている間も、自分のせいで作戦は失敗したのではないかと気になっていた。

心配通りだった。自分が作戦を台無しにしたのだ。もう少しでつかめた勝利を、自分が潰してしまったのだ。チー

ムリーダーである自分が……。

「破壊してからの救出は不可能だった？」

エーリエントAの問いに、ルミナも理奈もうなずいた。

やはり、自分が絶好の好機を潰してしまったのだ。

「ブルーもチャージしていたら、絶対基地を破壊できていたと思う。チャージしたのが三人いれば、負けっこないもん」

と理奈は言い切った。

詩鶴は沈黙していた。

チャージを拒んだのは自分だ。チャージを受け入れたルミナは、凄まじいパワーアップを果たしてデモニア基地を破壊の寸前まで追い込んだ。ルミナの速さは、自分も見ている。自分を助けだしてくれたのは、チャージした二人だ。

自分がチャージしていれば、明らかに戦局は変わっただろう。自分もチャージしていれば、勝てたのは間違いない。

でも――。

そのためには、学園で最底辺の男に胸を揉まれなければならない。自分は処女なのだ。詩鶴は年頃の男の子と手を握ったこともない。彼氏だっていない。なのに、胸を揉ませるなんて……。

ルミナはまだいい。濁川はルミナの思い人だ。でも、自分はそうではない。濁川は、修道生だ。つまり、学園では最下層である。自分は学園では最上級の特別生――。特別生の自分が修道生に胸をさわらせるなんて、絶対いやだ。だが、それで拒んだことで負けてしまった。基地破壊の絶好の好機を失わせたのは、自分――自分が胸を揉まれたくないといやがったからなのだ。

「明日になったら、もう敵は監視を増やしてるよ。四人で攻撃しても、今度は基地の中に侵入すらできないかもしれない」

と理奈がつづけた。

「わたしとローズだけじゃ無理。ブルーにもがんばってもらえない」

詩鶴は沈黙していた。理奈が何を示唆しているのかはわかっていた。濁川に胸を揉まれろと言っているのだ。学園で最上級の自分が、最下層の修道生に胸を揉まれろと……いや。

胸の奥で感情が拒絶した。

揉まれるなんていや。あんな最下層の男に胸を揉まれるなんて……。

でも――。

そうやって絶好の好機を潰したのではないか。二度も好機を潰そうというのか？

それでも、やっぱりあの男に胸を揉まれるのは……。

詩鶴は唇を噛んだ。

また拒めば、チームは永遠に勝利を手にできない。別にキスをするわけでもなし、セックスをするわけでもなし、自分が少し我慢すれば済む話ではないのか？ 自分はチームリーダーなのだ。

あの男のことは嫌い。好きにはなれない。

でも、それを理由にチャージを拒めば、またチームに迷惑を掛ける。暗黒騎士が三人に増えた場合、チャージしたエージェントが理奈とルミナだけでは十分に戦いきれないだろう。自分と京一郎も捕まってしまうかもしれない。そうだったら――。

答えは一つしかない。自分がチャージするしかない。つまり、いやな最底辺男に胸を揉んでもらうしかないのだ……。

拒む？

チームリーダーなのに？

チャージされれば――あの男に胸を揉まれれば――勝利は手に入るのに？

「攻撃するのなら、今夜だと思う。デモニアが監視員を増やす前。向こうもまさか今夜中に攻撃するとは思ってないだろうから、今襲撃したら勝てる。でも、わたしとローズじゃ、また撥ね返される」

と理奈が力説した。

理奈はデモニア基地に何度も出入りしていた。だからこ

そ、デモニアの事情がわかるのだろう。言葉には、強い確信がある。かつてのピンクポリスではない。

「すぐブルーにチャージしてもらって、今夜もう一度襲撃するしかないってことね」

とエージェントAが確認した。

詩鶴は答えなかった。

答えが一つしかないのは自分でもわかっている。だが、感情的なしこりのせいで、自分からは言い出せない。

「どうするの？ また拒む？ 拒んだら、勝利はなしよ」

エージェントAが詩鶴に畳みかけた。詩鶴は、ちらりと仲間の顔を窺った。

理奈が鋭い眼差しを向けていた。

まさか、断るつもりじゃないよね？ と今にも絡んできそうである。心の声が聞こえてきそうだ。

《あんたが拒絶したから、基地の破壊に失敗したんでしょ！? あんたが拒絶しなかったら、失敗なんかしなかったよ！ 基地だって破壊できてたし、あんただって人質になってない！》

ルミナは不安そうだった。喧嘩になるのではと恐れているのかもしれない。

「ホワイト、あなたはもう思う？」

エージェントAに話を振られて、京一郎は口籠もった。

が、思い切って口を開いた。

「やるなら今夜だと思う。明日の夜になれば、デモニアの連中は絶対増員している。敵が三隊に増えたら、十二人になる。暗黒騎士が三人に増えたら、たとえブルーがチャージしても勝利するのは難しくなる」

京一郎の言う通りだった。

最大のチャンスは今――。

そのためには、自分が胸を揉まれるしかない。勝利の処方箋は一つしかないのだ。そして、それを自分が選ぶしかない……。

詩鶴は口を開き、言葉を呑み込んだ。胸の中では、やはり抵抗がある。庸は修道生――学園の最底辺。自分はその修道生に毎日出迎えをしてもらう、学園の最高位、特別

生――。

その自分が、最底辺の男に胸をさわらせるのか？

詩鶴は首を横に振った。

（そうやってまた自分が好機を潰すんだ！ わたしは、チームリーダーなのよ！）

詩鶴は口を開いた。すぐには言葉は出てこない。

「胸を……さわらせるだけでいいんですか……？」

エージェントAに尋ねた。

「ええ。もちろん、さわらせるだけじゃなくて、吸ってもらった方がチャージの効果は大きくなるけど」

エージェントAの返事に、詩鶴は少し沈黙してから、また口を開いた。

「相手に目隠しをさせてください。それなら――」

胸を揉まれてもいい。

ようやく応諾へ舵を切った瞬間、

「そんなのだめだよ。絶対、庸クン、さわらないよ」

理奈が冷水を浴びせた。詩鶴は驚いて理奈を見た。

（せっかく勇気を出して言ったのに、わたしを非難するの？ ひどいんじゃないの？）

だが、理奈は反論をぶつけてきた。

「ローズの時だって、庸クン、デモニアに悪いからって凄く抵抗してたもん。いっぱい色仕掛けをして、二段作戦でやっと庸クン、ローズの胸をさわってくれたんだから。」

『胸をさわって。でも、あなたは目隠しをして。わたしの胸を見ないで』なんて言ったら、絶対怒っちゃうよ」

まったくの正論だった。だが、性的なこととなると、正論は逆に感情を逆撫でする。詩鶴はむっとして言い返した。

「好きでもない男に胸を見せろと言うの？ そんな娼婦みたいな真似――」

理奈は怯まなかった。

「男を誘惑するのって、難しいんだよ？ 男って、どんな女にも勃起するわけじゃないし、自分の好みの女じゃないと全然靡かない男だっているし。だいたい男って、ブラインド高いんだよ？ 相手が上から目線かどうかはすぐ感じ

とエージェントAがこぼす。

「だから、それを逆利用すればいいと思うの」と理奈は提案した。

（逆利用？）

詩鶴は理奈の顔を見た。

「何か思いついたの？」

と少し不安げにルミナが尋ねる。理奈は自信ありげにうなずき、詩鶴に顔を向けた。

「娼婦にならなくていいからさ、生贄になってくれる？」

庸はプール付きの部屋で一人、ベッドの上に寝転がっていた。両腕の拘束は解いてもらったものの、事実上、部屋に軟禁状態である。少しゲームで遊んでみたが、気が乗らなくて飽きてしまった。プールでも泳いでみたが、やはり気は乗らなかった。

気になるのは、デモニアの仲間たちのことだった。アイゼナハはどうしているだろう、と庸は思った。インフィニアは？ クラリツサは、きっと自宅に戻ったに違いない。庸が誘拐されたのは自分のせいだと思っているのだろうか？ 戦闘員たちはどうしているだろう？ 理奈やルミナたちにやられて怪我してなきやいいけど。奉仕局員は大丈夫かな？ 基地は破壊されたりしてないよね？

船を沈没させ、海底に沈んでもなお塩を碾き出しつづける潮吹白のように、不安はどんどん湧き出してくる。

ふいに解錠の音が聞こえて、庸はベッドの上で顔を向けた。

理奈とルミナが部屋に入ってくるところだった。理奈はオレンジ色のホルターネックのビキニを着けていた。Iカップのオッパイがいかに重そうに弾んでいる。ルミナは紺色のスクール水着を着ていた。それでも、バストは盛大に隆起している。胸にはジッパーがついていて、ジッパーを下げられるようになっていた。

庸の視線は思わずバストに吸い寄せられた。さんざんエージェントAの超乳にバイズリされた後でも、オッパイに惹きつけられてしまう。オッパイ星人の性である。

庸がベッドの端に移動して寝台から両脚を下ろすと、

「ただいま〜」

と理奈が抱きついてきた。オレンジ色のビキニの上から、庸の顔にオッパイを押しつける。瑞々しいIカップ球がむっちりとしたわむ。

むらっと欲望が湧いた。理奈の乳房を揉みたくなる。
(さわったらずい?)

一瞬考えて、今日はもうチャージしているから関係がないことに気づいた。庸は両側から理奈のオッパイに手を当てた。

「ンフン、だーめ♪ ローズの胸にも顔をうずめてあげて」

理奈のすぐ後ろに、ルミナが来ていた。いつものように地味な顔を紅潮させて、もじもじしている。

理奈が場所を譲り、

「ほら、ローズ」

と急かした。ルミナは赤面しながら、胸を突き出した。

スクール水着に包まれたすばらしい隆起が眼前に迫る。ルミナが出撃前に、最初に着てきた水着である。あの時は我慢してさわらなかったが、今ならさわれる。

(やっぱり、聖っておっきい……!)

そう思ったら、庸は自分から顔を押しつけていた。あんな、と甘さと驚嘆の入り交じった声を洩らして、遅れてルミナが庸の後頭部に手を回す。

庸はルミナの背中に腕を回した。スクール水着にたっぷりと顔を押しつける。紺色の生地の下には、豊かな乳球がたっぷりと詰まっている。

でも、物足りない。水着の上からではつまらない。じかに、オッパイを味わいたい。

庸は顔を離した。

(抵抗する?)

一瞬、ルミナの顔を見た。ルミナは控えめながらも、表情を弾ませていた。羞じらいの中にも、悦びが見える。庸に顔を押しつけられてうれしかったのかもしれない。

(なら――)

庸はジッパ―に手を掛けた。ルミナは驚いたが、抵抗しなかった。庸はジッパ―を一気に引き下ろした。生々しい乳肌と谷間が覗いた。まぶしいばかりの同級生の素肌である。

庸は再び顔を押しつけた。ムチムチの同級生の素肌が顔

面に密着する。庸と同一年の十五歳だけに、肌の張りや瑞々しさは段違いである。

(はぁ……気持ちいい……)

夢中になって、庸は一メートルオーバーの爆乳に顔をこすりつけた。逃げないようにルミナの背中に腕を回して、同級生の爆乳の質感と量感を味わう。

(もっとオッパイを味わいたい……揉んでしゃぶりたい……)

庸は思った。すでにルミナはチャージを終えている。いまさら揉んだり吸ったりしたところで、さらにルミナがパワーアップするわけではない。

庸は、さらにオッパイに顔を押しつけた。スクール水着の下でIカップ球がたわみ、弾む。顔が凄い乳圧で押し返される。

(やっぱりさわりたい……オッパイ、しゃぶりたい……!)

こうと欲望が込み上げて、庸は顔を上げると同時にバストを揉みしだいた。親指は生乳に触れた。だが、中指や薬指は水着である。すべて生乳をつかみきれないのが、もどかしい。

(じかにさわりたい……!)

庸は肩紐に手を掛けた。紺色の紐を肩から外して生乳を露出させる。美しい半球形に近い一〇センチのIカップ弾が溢れ出した。すばらしい隆起具合である。爆乳の持ち主の場合、多くはそれほど高さのない柔乳だが、ルミナの美爆乳は非常に高さがある。張りと弾力に満ちあふれている。日本人では珍しい、乳腺質の爆乳だ。

(ほんとに凄いオッパイ……!)

激しい欲望を覚えて、庸は両手でバストをつかんだ。指が、ずぶずぶと張りのある乳球にめり込む。豊球がひしやげながら、すばらしい反発力で指を弾き返す。その反発力に抗いながら、さらに乳房深くへと指をめり込ませる。十指がピチピチの弾力とポリウムと戯れながら沈み込む。

「あん……あぁん……」

ルミナが照れながら、甘い声を洩らした。手に広がる快感にますます欲情しながら、庸は淫靡な円を描いて乳球を



「ああん、庸くん……！」

ルミナがビクンと身体をふるわせた。エージェントAの超乳もおつきくて気持ちよかったが、同級生のオツパイもおつきくて気持ちいい。不思議な安心感と劣情感がある。安心するのに、催淫させられてしまうのだ。

「庸くん、エロすぎ。そんなことしてると、ブルーにお仕置きできないよ」

と理奈が笑う。

（お仕置き？）

庸は顔を上げた。

（ブルーにお仕置きって、何だろう？）

「ブルーがへまやったから、これからお仕置きするの。庸くんもいっしょにやる？」

と理奈は笑顔で誘った。

庸は一瞬、呆気にとられた。頭の思考がいきなり鈍化する。

（おれがお仕置き……？ ブルーがへま……？ おれがブルーをお仕置きする……？）

「エッチなお仕置き。興味あるでしょ？」

庸は返事しなかった。形式上、ブルーゴージャスは自分の仲間、自分の味方になっているが、心の中ではいまだ敵である。その敵にお仕置きするというのは、正直、惹かれる。だが、同時に、日本人らしい遠慮も自分の中で生じてしまう。

（エージェントの一員になったばかりなのに、おれがお仕置きなんかしていいの？）

そう思ってから、

（もしかして、おれ、胸をさわることになる？）

その途端、庸は警戒した。うっかりブルーゴージャスの胸をさわったら、ブルーゴージャスをパワーアップすることになってしまう。デモニアのみんなに迷惑を掛けたくない。

「別に胸さわる必要ないから。わたしの助手をするだけでいいから」

と理奈が庸を安心させようとする。

「またメジャーで計らせる？」

「ううん、庸クンはわたしのそばにいてくれればいいから。行こ」

理奈が腕を取った。乳房に手を押しつける。

どうしよう、と庸は迷った。罌にはあまりたくない。それに、目の前のルミナのオッパイをしゃぶりたい。同時に、手に触れている理奈のオッパイもさわりたい。

「お仕置きに付き合ってくれたら、あとでローズとわたしでダブルバイズリしてあげる」

(二人いっしょに……!?)

その言葉に、ようやく庸は決心した。自分が胸をさわるわけではないみたいだし、それなら大丈夫かもしれない。

「じゃ、出発前に」

と理奈がくると背中を向けた。庸に身体を預ける。庸はすぐに乳房に手を回した。オレンジ色のピキニの上から乳房をこねまわす。

大きくて重い。しっとりとした量感と弾力が両手に広がっていく。

「手は中々」

ピキニに手を滑り込ませる。若々しいIカップ乳が手の中で充滿する。

「あん♪」

理奈が甘い声を上げた。アイドルの爆乳を思うままに揉みしだいている快感に、庸は勃起した。後ろからペニスを押しつけながら、さらに乳球に十指をめり込ませる。理奈がさらに甘い声を洩らした。バストがひしゃげて、両手の中ではちきれそうになる。

庸のペニスはさらに鋭角に勃起した。

(たまらない……)

絶対、あとで二人にバイズリされて射精しようと庸は思った。

ぬ光景にたじろいだ。白い天井に白い壁。腰壁はブルーグレーに塗装されていて、木の床が張りめぐらされている。そして少し殺風景な広さ八畳ほどの空間には、鎖で吊り下げられた女がいた。天井から目隠しをした青いボディコンドレスの女が、両腕を拘束されて鎖で吊り下げられていたのである。ボディコンドレスがびったりと身体を覆って、豊かなバストラインをくっきりと浮き上がらせている。

エージェントの一人、ブルーゴージャスだった。

（おれたちを苦しめてきたやつだ）

と庸は思った。憎らしさはなかったが、懲らしめてやりたくなる。

セイント・エージェントが目隠しをされて両手を拘束され、鎖で吊り下げられている姿は、そのものがあつた。デモニアの基地なら、容赦なく颯り立てているところである。

理奈が鎖を下ろした。ブルーゴージャスの足が木の床に着く。

「いい格好ね、ブルー」

と理奈がSっぽい声で話しかけた。

「今日、作戦が失敗したのは誰のせいかな、わかってる？」

ブルーゴージャスは答えない。

「庸くん、箱を開けて」

と理奈が顔を近づけて囁いた。庸は小箱を開けた。

中に入っていたのは、セックス玩具だった。一セットは、ピンク色のミニローターだった。きつと乳首を攻めるためのものだろう。そしてもう一セットは、白いお碗形のカップだった。カップの一番凹んだところには、透明の樹脂でつくられたやわらかいイボイボがついている。

「これ、何？」

庸が尋ねると、

「ニップルカップとか言われてるやつ。これでブルーのオッパイをいじめるの」

と理奈は答えた。庸は目が点になった。

（エージェントって、こういうエロいお仕置きをやったのか……？）

とても正義の味方とは思えない。むしろ、性義の味方と
言うべきである。あまりに意外すぎて、正直、引きそう
だ。

「今日もオッパイいじめてあげるからね」

理奈はブルーゴージャスの後ろに回り込んだ。

（本当にやるのか……？）

庸としては信じられない気持ちである。正義の味方が仲
間にエロいお仕置きをするなんて、漫画すぎる。

理奈の両手がバストを握り締めた。女の十指が、キラキ
ラの青いコスチュームに包まれた爆乳にめり込んでいく。

「ンンッ……」

ブルーゴージャスがびくつとふるえた。理奈が何やら囁
く。ウイスキーの内容は聞こえない。

「ブルーもオッパイおっきいね。わたしと同じくらいある
んじゃない？」

と話かけながら、理奈がブルーゴージャスのバストを
こねまわしていく。青いボディコンドレスに覆われた双球
が、むっちりと変形する。

（け、結構おっきいな……）

庸は唾を飲みそうになった。同僚にバストを搾られるブ
ルーゴージャスの姿は、そえられるものがあつた。正直、
勃起してしまいそうだ。

（やばい。これ、絶対、理奈の罠だぞ。おれが欲情するよ
うにしてるんだ。その手には乗らないぞ）

理奈が庸に手招きした。

（え？ まさか、さわれ？）

そうではなかった。

「箱、持ってきて」

と理奈が囁いた。

（何だ、そっちか）

庸はほっとすると同時に、少し残念な気がした。残念な
気分を味わってから、自分で自分の気持ちを否定した。

（理奈ちゃんの手には乗らないぞ）

庸が箱を近づけると、理奈はミニローターを取り出し
た。スイッチを入れると、ブウウン……と振動音が鳴りは

じめた。

「今、いいところにいいものを押しつけてあげる」

S っぽくブルーゴージャスに言って、理奈が二つのミニローターをバストに近づけた。庸は、吸い寄せられるようにバストに視線をやった。

いったいブルーゴージャスはどんな反応を見せるのか。乳首を責められて悶えるのか。それとも、クールにやりすごすのか。

理奈が、ボディコンドレスの上からバストトップに押し当てる。びくっとブルーゴージャスの身体がふるえた。

(感じてる……)

「乳首、ここなんだ」

S っ気のある口調で言って、理奈がさらに二つのミニローターを乳首にこすりつける。バストがたわみ、ブルーゴージャスがピクン、ピクンと身体をふるわせた。ミニローターに反応している。理奈が乳首に向かってミニローターを執拗に押しつけると、ブルーゴージャスはふるえながら身体をくねらせた。快感から逃れようとしているらしい。だが、その程度でミニローターが外れるものではない。身体を右に向けても左に向けても、理奈は追いかけて乳首にローターをあてがっていく。ブルーゴージャスの上体がうねった。腰をくねらせ、何とかミニローターの刺激から逃れようとしている。

(乳首を責められて感じてる……！)

ズボンの中で、ペニスがふくらんだ。股間が充血していく。かつて敵だったブルーゴージャスが、理奈の乳首責めに悶えているのだ。

「乳首、どうかした？　ね？　ね？　ね？」

わかっていくくせに、理奈がミニローターを乳首に押し当てる。いやらしい振動とともに、ローターが乳首を刺激する。

「んあっ……あっ……ピンク、やめてえ……」

ブルーゴージャスが、透き通った声で喘いだ。さらにいじめたくなるような、美しい声だ。上体がクネクネと蠢いている。

「やめていいの？」

理奈が乳首の周りをローターでくすぐって、突起に押し当てる。

「んああっ……！」

ブルーゴーギヤスが大きく上半身を波打たせて腰をくねらせた。鎖が軽く音を立てる。

「あ。乳首、勃ってる」

理奈がミニローターを離していた。青いボディコンドレスに、双つの大きな突起が突き出している。ミニローターで刺激されて、すっかり感じてしまったのだ。

（凄なおっきな乳首……）

思わず庸は唾を飲んだ。見ているだけで、乳首をつまみたくなってくる。服の上からコリコリ弾きたくなってくる。

（でも、おれがさわったらパワーアップになるし……）

待てよ、と庸は考え直した。

（ローターでいじめるのなら、おれがさわってるわけじゃないからパワーアップにはならない……？）

理奈が庸を見た。

手招きする。

（え？ おれにもさわれ？）

「箱」

と理奈が口を開いた。

（何だ、違うのか）

がっかりしながら、庸は箱を差し出した。理奈はミニローターの電源を切って箱に戻した。

（もう終わり？）

これからじゃないか、と思う。もっとオッパイをいじめまくらなきや。

理奈がブルーゴーギヤスの胸元に手を掛けた。庸に視線を向ける。

（なんでおれを見るんだろ……？）

思った直後、理奈は隠れていたジッパーをつまみ、一気に引き下ろした。白い胸の谷間が露わになる。

さらに理奈は、服を開いた。現れたのは、驚くほど左右

対称な、ツンと高く盛り上がった美すぎる爆乳だった。左右同じカーブを描いた双つのバストは、立体感たっぷりに突き出している。その双乳の真ん中に、まるでこぶのようにはく高く盛り上がった乳暈と乳首がついていた。

桁違いに立体的な乳暈——乳輪——に、立体的な乳首だった。

英語で *puffy nipple* ——ぷっくり乳輪である。しかも、乳輪の直径はかなりある。非常に目立つ乳輪と乳首である。デモニア救星団を苦しめてきたブルーゴージャスは、見事な三段ロケット乳の持ち主だったのだ。しかも、乳房の形は完璧な左右対称、乳輪もほぼ左右対称。類まれな美と対称性を有した、完全美の爆乳である。

庸は思わずそのバストの美しさ、突出ぶり、そしてエロさに魅入った。これだけオッパイも乳輪も乳首も突出していて、なおかつ左右対称のオッパイは初めてだった。いじめてくださいと言わんばかりのエロオッパイとエロ乳輪とエロ乳首である。理奈もルミナも淫乳の持ち主だったが、ブルーゴージャスも、とんでもない淫乳の持ち主だったのだ。

庸は唾を飲んだ。

さわりたい、という欲望が起こった。

(こんな凄い乳輪と乳首、見たことない……)

さわりたい。

思い切りしゃぶってみたい。

「ほんと凄いオッパイ。三段ロケットがくつついてるみたい」

と理奈が笑う。

「いくつあるんだっけ？」

と理奈が、庸をじらすように言う。

(い、いくつあるんだ?)

また唾を飲みそうになる。早く答えを知りたい。ブルーゴージャスのバストサイズは……?

「九十五センチだったっけ? 絶対Gカップあるよね?」

理奈が乳首をつまんだ。

「んあ……!」

ブルーゴージャスが乳房をブルンと揺さぶって悶えた。
非常に敏感な身体である。

理奈は後ろからびったり身体を押しつけた。両手を前に
回す。三段ロケットオッパイに、理奈の手が近づく。

どんなふうにオッパイがひしゃげるんだろう、と庸は期
待した。

ドキドキする。

両手がバストを包み込んだ。三段ロケット乳が、理奈の
手の中でひしゃげていく。

「やめて……」

「やめて？」

理奈が人差し指で乳輪に触れた。輪郭を指でなぞる。

（おっきいな……）

興奮しながら、理奈が指先でじらすのを見る。理奈がち
らっと庸を見て、乳首を弾いた。

ピクンとブルーゴージャスの身体がふるえる。

「もっとして、の間違いじゃないの？」

と理奈がさらにコリコリとつづけて人差し指で乳首を弾
く。盛り上がった乳輪からそり立った乳首が薙ぎ倒さ
れ、

「んあっ、あっ、あっ、やめてえ……」

ブルーゴージャスがブルンブルンと三段ロケット乳を揺
さぶって、乳首の快感から逃れようとした。ブルーゴ
ージャスのオッパイは、ただ盛り上がっているだけでなく、
感度も抜群らしい。

「へまをしたのは誰のせい？ 誰のせいで作戦がうまくい
かなかったの？」

言葉で責めながら、理奈が乳首を引っ張った。

「んああっ！」

「誰？ 誰のせい？」

さらに畳みかけながら、さらに乳首を引っ張ってバスト
を揺さぶる。

「んああっ、ああっ、わたしいっ、やめてえ、ピンク
ウウ……！」

「気持ちいいくせに」

理奈が思い切りバストを搾った。ただでさえ突出したバストが、搾られて指の間からさらに突き出す。こぶのように盛り上がった乳輪と乳首が、庸に向かって迫り出す。

(さわりたい……)

強く思った。片足を踏み込んで手を伸ばせば、届く距離にブルーゴージャスの胸はある。

さわる？

否。

さわったら、ブルーゴージャスをパワーアップしてしまう。デモニアの仲間たちに迷惑を掛けてしまう。

でも――。

こんなオッパイは、めったにあるものではない。オッパイ自体の突出度はクラリッサの方が上だが、乳輪の突出度はブルーゴージャスの圧勝だ。乳輪は大きく、抜群に目立っている。見ているだけで、さわりたくなってしまう。

理奈が双つの人差し指を、乳輪に突き刺した。指が、ずぶずぶっと埋まる。

「んはあっ……」

またブルーゴージャスが呻く。

(さわりたい……!!)

股間が熱くなる。

理奈が乳首をぐりぐりと攪拌した。指先を沈み込ませたまま、指で円を描く。バストが卑猥な円を描いて揺れる。ブルーゴージャスが悶え、鎖がガチャガチャと音を立てた。

「ふあっ……くあっ……ピンク、やめて……そこばかり……」

「そこってどこ？」

と理奈がさらに乳首に指を突き刺して、バストを揺さぶりまわす。

「んああっ……そこお……」

「どこか言わないと、やめてあげない」

理奈がSっ気たつぷりに囁く。二本の指は、ひっきりなしに乳首を颯りまわしている。双つのバストが乳首を奥にめり込ませたまま、ブルンブルンと揺れた。

「ピンクウウ……!」

切ない声を上げて、ブルーゴージャスがゾクゾクと身体をふるわせた。すばらしい隆起乳がぶるぶると弾む。

理奈はようやく乳首から手を離した。理奈に嬲られて、さらに隆起した乳輪がぶっくりと盛り上がり、乳首を突き立たせている。被虐美に溢れた乳首である。

(凄い乳首とオッパイ……)

理奈が、庸が持つ箱に手を伸ばした。プルルル……とコイル音が鳴った。理奈が壁に据えつけられたインターホンを取る。

「はい……。え？　今から？」

と理奈が尋ねる。

(何だろう?)

「わかりました」

と理奈が答えてインターホンを戻した。

「ちよつとエージェントAのところに行ってくる。庸くん、ニップルカップつけておいてくれる？」

と理奈が囁いた。

え？

おれが？

ブルーゴージャスに？

「つけたら、スイッチ入れていいから。お願い」

と理奈が両手を合わせる。アイドルにお願いされると、断りづらい。

「すぐ帰ってくる？」

と庸は確認した。

「うん。すぐだと思う」

わかった、と庸は答えた。

「お願いね」

理奈は庸に抱きついた。ぎゅつと胸を押しつけ、身体を揺らしてバストをこすりつける。

「あとでいっぱい挟んであげる」

耳元に囁くと、理奈は殺風景な部屋を出ていった。あとには、目隠しをして吊り下げられたブルーゴージャスと庸だけが残った。見事な三段ロケットのオッパイは剥き出し

のまま、被虐美をまき散らしている。

いきおい、庸は興奮と緊張を覚えた。

誰も見ている者はいない。今なら自由にオッパイをしやぶれる。揉みまくれる。

（いやいやいや！ デモニアのみんなに迷惑を掛けるから！）

とにかく、さっさとニップルカップを装着させてしまおうと庸は思った。箱からお椀形のカップを取り出して、ブルーゴージャスに近づく。ぶっくりふくらんだ乳輪とGカップの巨乳が、庸に迫った。

間近で見ても、凄いオッパイだった。高く豊かにオッパイが突き出していて、その上にさらに大きなこぶのような乳輪が載っている。まるで新鮮な卵みたいだと庸は思った。普通の卵は卵黄が盛り上がっていない。だが、もの凄く質のいい新鮮な卵黄は、卵白から一際高く盛り上がっている。ブルーゴージャスの乳暈は、盛り上がった卵黄みたいだと庸は思った。カップで覆ってしまうのがもったいないくらいである。

（さわろうか……？）

ふと思って、庸は首を横に振った。

（だめだだめだだめだ！ オッパイをさわったらだめだ！ この女をパワーアップしてしまう！）

庸はカップを近づけた。あとは装着するだけだが、やはりカップで覆うのはもったいない美球である。

（ちよつとミニローターでいじめてみようか？）

そんな気持ちが湧き起こった。ローターならば、パワーアップはしないはずだ。

（じゃあ、ちよつとだけ……）

庸はカップを箱に戻して、ミニローターをつかんだ。スイッチを入れると、すぐにブウウンと振動音が響きはじめた。

庸はミニローターを乳輪に近づけた。乳輪がぶっくりと隆起して、その上にはっきりと乳首が突き立っている。いやらしい乳輪に、いやらしい乳首だ。パワーアップさえなければ、さわってしまいたい。誰もいない間に、こっそり

揉みまくって、いじめたい。

でも、それはできない。

(できないのならば、せめてローターで……)

庸は、ミニローターを右の乳輪に押しつけた。ブルーゴージャスが身をくねらせた。身体をよじって、ローターから逃げようとする。

(そうはいくか)

逃げる身体を追いかけて、乳輪の円周沿いにローターを当てる。

「ンッ……!」

ブルーゴージャスが身体をくねらせて逃げる。

(逃がすか!)

庸は、今度はローターを乳首に押しつけた。振動を発生しながらローターが乳首に接触し、ブルーゴージャスの身体が跳ねた。腰を突き出してヒクヒクさせる。本当に敏感なおっぱいだ。

(こっちもいじめてやれ)

庸は左の乳輪にも、もう片方のミニローターを押しつけた。

「やめて、ピンク……!」

ブルーゴージャスがまた身体をクネクネさせて、ローターから逃れようとする。どうやらブルーゴージャスは、理奈が自分をいじめていると思込んでいるようだ。庸が代わりに責めているとは、少しも思寄らない様子である。

(なら、理奈のふりをしていじめてやる……!)

加虐心を覚えて、庸は乳首にローターを押し当てた。

高い悲鳴とともに、ブルーゴージャスがバストを突き出した。腰がヒクヒクと蠢く。庸は両方のローターを、執拗に乳首に押し当て、ローターで乳輪の真ん中をえぐった。ブルーゴージャスは悲鳴とともに尖った乳房を突き出し、また腰をひくつかせた。胸を責められる快感に、じっとしてられないのだ。

ブルーゴージャスが上半身をよじり、左右の乳首からローターが外れた。すぐに庸がローターを乳首に押し当て

ると、ピクンと身体をふるわせて、ローターから逃れようとバストを揺さぶる。一瞬、乳輪がローターから離れる。逃がすかとまたローターを押しつけると、またピクンと身体をふるわせて身体を横に向けて快感から逃げようとする。鎖が音を立てた。

ほんと敏感な乳首……と庸は興奮した。正直、たまらない。少し前まで敵だった女エージェントを責めているのだ。デモニア救星団の一員だった時の気持ちに蘇ってくる。ローターではなく、じかに指で乳首をいじめたらどうなるだろう？ 吸ったらどんな反応をするだろう？

しゃぶってブルーゴージャスを悶えさせたいくなる。でも、しゃぶるわけにはいかない。その鬱憤をぶつけるかのようにローターで乳首をぐりぐりと責め立てると、ああっ、ああっと声を上げてブルーゴージャスが身をクネクネさせる。高く隆起した乳輪が、まるで舌でいじめたと訴えるかのようにさらに盛り上がり、乳首が突き立った。

(凄い乳輪に、凄い乳首……しゃぶりたい……!!)

欲望で下半身が爆発しそうになった。

目の前に、隆起した乳輪と乳首があるのだ。こんなオツパイを自由にできるチャンスなんて、もう手に入らないかもしれない。

ローターを乳輪に押しつけ、さらに乳首をえぐるようにこすりつけると、また声を上げてブルーゴージャスが庸に向かって乳房を突き出した。高く隆起した乳輪が庸に迫る。まるでしゃぶってとおねだりするように――。

(やっぱりしゃぶりたい！)

次の瞬間、庸はローターを手にしたまま、ブルーゴージャスの右の乳輪――庸から見ると左の乳輪――にしゃぶりついていた。

「あああゝっ！」

ブルーゴージャスが今までになく激しく高い声を放っていた。

とても美しい声だった。透き通った、透明感のあるソプラノボイス。いじめたくなるような美人の声である。

乳首は実にぶっくりしていた。コリコリに硬く尖っていた。

る。乳輪も張りがあって、乳輪だけでも美味しい。女の甘い味がする。

（これがブルーゴージャスのオッパイなんだ……！）

庸は顔を押しつけて、ブルーゴージャスのGカップの弾力を味わった。味わいながら、舌で乳輪を舐める。ピクツ、ピクツとブルーゴージャスのお腹がひくつく。

（感じてるぞ……！）

理奈やルミナの乳輪よりも、張りが強い感じがする。

庸は舌で円を描きながら、半径を狭めた。ブルーゴージャスがゾクツと身体をふるわせた。

ああ。

乳首に来る。

乳首を舐められてしまう。

きつとそんな期待と不安をブルーゴージャスは懐いているに違いない。身体がピクツ、ピクツと小さくふるえる。

（今だ……！）

庸はついに、舌を乳首に押し当てた。ぶりぶりの肉突起が舌に触れる。

「あっ……」

ブルーゴージャスが細い声を洩らした。

舌を止める。

一旦停止してから、一気に乳首を弾いた。凄い速さでびちゃびちゃと舌をふるわせる。口の中で乳首が軽く弾けた。敏感な肉突起が薙ぎ倒され、執拗に舌に翻弄される。

「ああっ……！ あああっ！ やめてえ、ピンクウウ……」

乳首ばかりいやあ……！

ブルーゴージャスがまた身をよじった。腰をひねって、ヒクヒクさせる。まるで身体がうねっているようだ。

（乳首美味しい……！）

庸は乳首を吸引した。ちゅゅつと乳輪ごと乳房をバキュームする。あああつと切ない声を洩らしながら、ブルーゴージャスが腰をヒクヒクさせた。上半身をつっぱらせて、身をよじる。鎖を鳴らし、右に身体をひねって乳吸いから逃げようとする。

（誰が逃すか……！）

庸はミニローターを離し、両手でブルーゴージャスのヒップをつかんだ。華奢なお尻を捕まえて逃げられないようにして、高速で舌をふるわせ、甘美な舌の拷問を浴びせる。

「あぁっ、あっ、あぁっ、やめてえ、ピンク、それやめてえ……！」

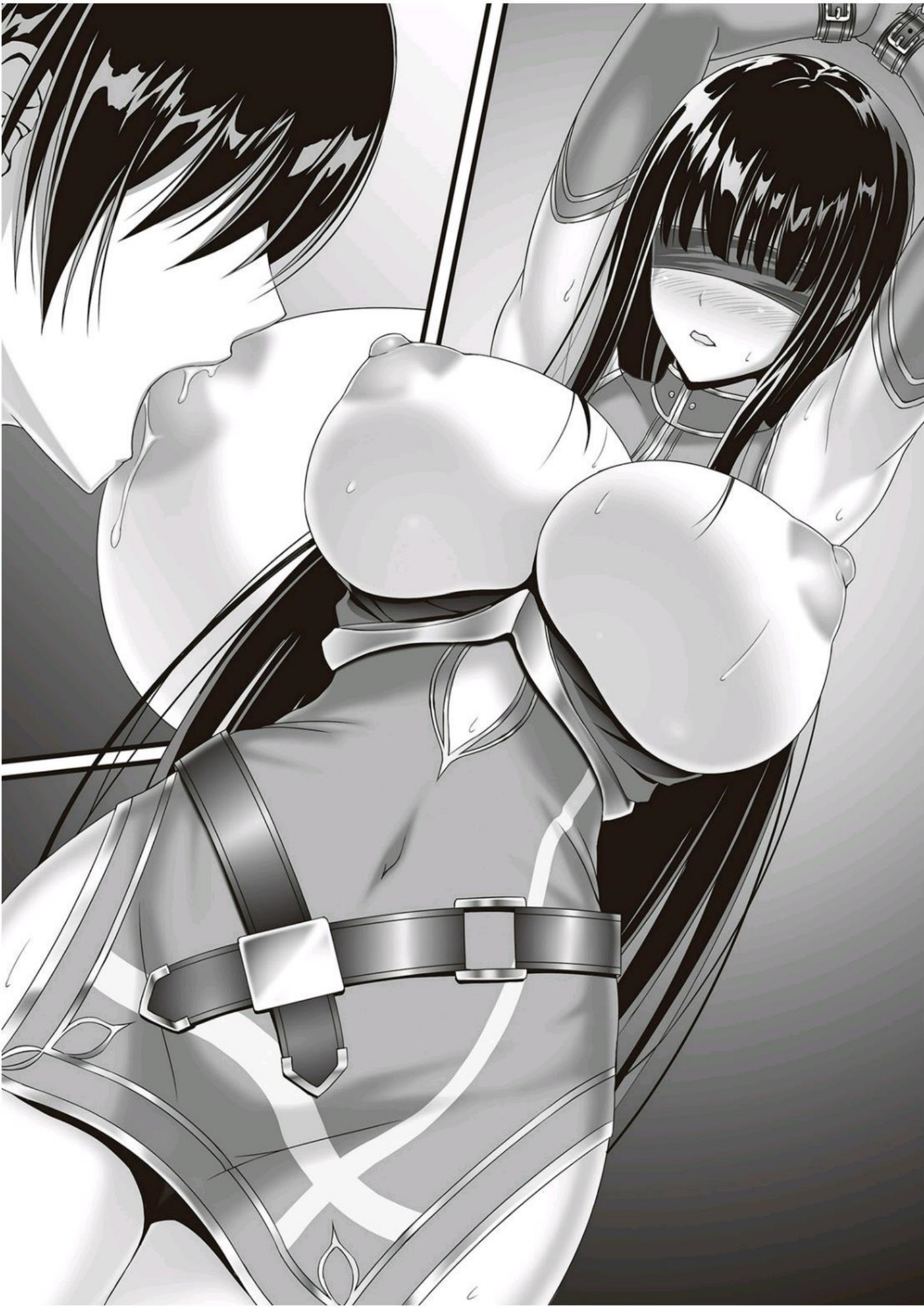
ブルーゴージャスが吸われている方の乳房を突き出しながら、吸われていない方の乳房を後ろに引いて、身をよじった。腰がヒクヒクと蠢く。面白いくらいの反応である。なんとかして快感から逃れたい。その一心なのだろうが、乳首は、もっと愛撫をおねだりするかにように口腔の中でそそり立ってくる。

ブルーゴージャスの身体を抱き、捕まえながら、庸は激しく欲情した。あのブルーゴージャスを、両腕で虜囚にしているのだ。敵エージェントを捕まえて、乳首を舐めまくっているのだ。

もっといじめたくなつて、庸は乳首を咥え込んだ。フェラチオでペニスをしやぶり立てるように、舌で乳首を捉えてフェラチオのように口唇でしごいてやる。

「あぁあっ、それ、やぁっ、やぁあぁあぁっ！」

ブルーゴージャスの悲鳴が響きわたった。口唇で乳首をしごかれて、ブルーゴージャスの乳首がどんどん高く突き立っていく。乳房もふくらみ、乳輪も盛り上がっていく。庸の乳首責めに感じているのだ。



庸は腰から右手を離して、左の乳首をつまんだ。乳首はコリコリである。指と指の間でこすり潰すと、

「あああつ、それもやあつ、やあつ、やあつ……！」

鎖が激しく音を立てた。乳首をしこらせながら、庸の乳首責めから逃れようとブルーゴージャスの身体が暴れまわる。だが、庸はさらに指と口唇で双つの乳首をしごいていく。敏感な胸の生贄を、指と口唇で颯つていくのだ。

「やあつ、やあつ、変になるからやああつ、乳首やめてええっ……！」

口の中で、指の間で、双つの乳首がさらにしこった。ブルーゴージャスが激しく喘ぐ。それでも庸の乳首責めはやまない。さらに激しく乳首を指でしごき、口唇でしごいていく。右に、左に、ブルーゴージャスが身体をひねった。

豊満な肢体がうねる。それでも庸は、フェラチオのように乳首を口唇でしごきつづける。指でも手コキのように乳首をしごきつづける。双つの乳首がさらにしこっていく。やあつ、やあつ……と高い声がつづき、ふいに声が消失した。首が後ろに倒れ、ブルーゴージャスの上半身が反った。腰が突き出され、ブルーゴージャスの半裸の身体に激しい痙攣が襲いかかった。乳首を颯られて、ブルーゴージャスが絶頂に達したのだ。

庸は驚いた。

まさか、ブルーゴージャスが乳首だけでイクとは思ってもみなかったのだ。だが、目の前の反応は明らかに絶頂である。

（やった！ イッた……！）

驚きの後に、歓喜と征服感が到来した。正義の味方を性技で倒したのだ。

（もっとイカせてやる……！）

庸は今度は乳首を替えてしゃぶりついた。双つの乳首はコリコリである。左の乳首を咥え込み、舌でびちゃびちゃと連打した。そして左手で、ブルーから見て右の乳首をこすり潰す。

「やあつ、やっ、やあつ、また変になるからやあつ……！ ピンクウウッ……！」

ブルーゴージャスが、またがちゃがちゃと鎖を鳴らして身体をふるわせる。腰を突き出して、もうイキそうになっている。

庸はまた左の乳首を咥え込んだ。フェラチオのように乳首をペニスに見立てて口唇でしごく。同時に、右の乳首を左手の指で手コキよろしくしごき立てる。

細い歓喜の悲鳴が上がった。肉体はもう絶頂寸前である。片方の乳首は口唇でフェラチオ責めされ、片方の乳首は指で手コキ責めされているのだ。

「やあつ、やめてえ……何でもするからあ……!」

ブルーゴージャスが首を横に振った。黒いロングヘアがばさばさと揺れる。

股間に来る言葉だった。

何でもするから……。

目隠しをした敵エージェントが、乳首を責められてイキそうになって、自分に懇願しているのだ。

(パイズリしてって言ってみる?)

いや。

自分が理奈でないことがバレてしまう。

庸は思い切り乳首を吸い込み、引っ張った。同時に、指でも乳首を引っ張った。やめてええ、とブルーゴージャスが身をひねった。Gカップのボディがうねり、鎖が鳴る。唐突にブルーゴージャスの声が消え、また身体が暴れまわった。再び絶頂に達したのだ。

たまらなかった。

少し前まで敵だったエージェントのオッパイを責めまくって、イカせまくっているのだ。

(もっとイカせたい……!)

片方ずつオッパイをいじめるなんて、我慢できない。両方いじめたい――。

庸は両方の乳房を両手で寄せ、双つの乳首にしゃぶりついた。チュルッ、チュルッといやらしい音を立てて吸引する。吸引しながら、舌で双つの乳首を連打する。

「ああああつ! やめてえ、両方なんていやああつ!」

双つの乳首が口の中で弾け、長い悲鳴がほとばしった。

ブルーゴージャスの身体が弓なりに反り返る。腰がビクビクとふるえる。鎖が激しく鳴った。

（思い切り感じて……！　またイキそうになる……！）

イッチまえ、と庸はさらに双つの乳首を吸い込んだ。吸いながら、さらに高速で乳首を舌で舐る。

上から下から、容赦なく双つの乳首を連打されて、ブルーゴージャスは悲鳴を上げた。双つの突起をしこらせながら、やああっ、やあああっ、やああと絶叫し、胸を突っ張ったまま首を左右に振りまくる。それでも双つの乳首は、庸の舌に殴打される。さらに悲鳴が上がり、また唐突に声が消えた。双つのオッパイを責め立てられて、またブルーゴージャスが絶頂に達してしまったのだ。

3

詩鶴は双つの乳首を責められて、思い切りイキまくっていた。

気持ちよかった。

自分を黽っているのは、間違いなく濁川庸だ。股間に変な硬いものが当たっている。きつと男性器だ。

下男に乳房を弄ばれるような、おぞましい状況だった。

だが——おぞましいはずなのに、感じていた。理奈にオッパイをいじめられている時も気持ちよかったが、濁川の乳首舐めはそれ以上だった。

こんなやつに感じたたくない。

こんなやつに乳首をいじめられたくない。

そう思うのに、身体は感じてしまう。乳首を吸われると、身体がとろけそうになって、ゾクゾクふるえてしまう。オマンコがきゅんきゅん疼いて、勝手に腰がひくついてしまうのだ。

理奈の計画は、詩鶴をお仕置きすることだった。始めは、理奈が乳首を責める。揉んだり服の上から乳首を責め立てたりして、生乳を露出させる。その後、ミニローターで乳首をいじめる。そこで連絡を入れてもらって、理奈は

立ち去る。生乳を目の前にして、濁川庸はじっとしていられないはずだ。きつと乳房に触れる――。

理奈からそう聞いた時、もちろん抵抗した。オッパイなんか見せたくない、と詩鶴は突っぱねた。だが、見せないと絶対に庸は胸をさわらないと反論された。

《ローズの時も、すぐ目の前で胸を見せられて反応したんだもん。ブルーの時もそうだよ》

それでもいやだと詩鶴は拒絶した。修道生を前に胸をさわられたくない。

《胸を見せるだけじゃ、絶対庸クン、何もしないよ。わたしがさわるのが条件なの。わたしがさわったら、絶対庸クン、さわりたくなるもん。さわってもらえなかったら、凄惨めだよ？》

それでも、顔を見られたくないと詩鶴はいやがった。目隠しをするから平気だよ、と理奈は答えた。結局、顔バレしないのなら……と理奈に押し切られる形になったが、理奈の言う通りだった。

理奈が入室した時から、詩鶴は緊張していた。理奈のそばには庸がいるはずだ。庸に恥ずかしいところを見られてしまう。

いや。見ないで。

胸を揉まれると、逃げたくなった。でも、理奈が励ましてくれた。自分をいじめる振りをして、こっそり耳打ちしてくれたのだ。

《ブルー、凄い勇気あるよ。わたしだったら逃げ出してる。庸クン、今、連れてきたからね。庸クン、見とれる。きつとブルーの胸をさわってパワーアップしてくれると思うよ。いっしょにデモニアの基地をぶっ潰そうね》

自分が乗り切れたのは、理奈のおかげだ。でも――今は崩れそうだった。乳首を吸われるのがこんなに気持ちいいものだとは思ひもなかった。双つも乳首を責められると、もうだめだった。自分でもびっくりするくらい思い切り声を出してしまった。本気で感じて、本気でイッてしまった。相手は修道生なのに――。

すでに、庸には四度イカされていた。最初は右の乳首

で。次は左の乳首で。次は両方の乳首で。そしてまた両方の乳首で――。

まだ庸はいじめる？

今度は――。

庸が自分の後ろ側に回り込んだ。両手がいきなりバストを握り締めてきた。後ろから自分のオッパイをいじめてきたのだ。

やめて。

胸をさわらないで。

二本の人差し指が、いきなり乳首を突いてきた。乳首が乳房の中にめり込む。指がぐりぐりと双つの乳首を軽く押し潰す。

「あぁっ……!!」

思わず声が出てしまった。やっぱり気持ちいい。

庸はバストを揉みながら、同時に乳首をいじめてきた。

大きなGカップのオッパイが、男の手でブルンブルンと揉みまわされる。揉まれながら、乳首をぐりぐりとほじくられる。

だめ……気持ちいい……。

ふいに庸が離れた。

え？

どこへ行ったの？

今度は前の方からオッパイをつかまれた。つかまれたオッパイを揺さぶられた。乳房がブルンブルンと揺れる。乳首も揺れる。

ふいに、乳首が舌に当たった。思わず身体が反応した。庸は舌を突き出したまま、乳房を揺さぶって乳首を舌に当ててきたのだ。

「あぁっ、やめてえ……!!」

詩鶴は悶えた。

さらにGカップの乳房はブルンブルンと揺さぶられて、双つの乳首はぬめぬめの舌に押しつけられる。下級生の舌が、何度も絶頂を味わってイキやすくなっている乳首を執拗に舐める。そのたびに逃げたくなるような鋭い快感がほとばしり、ゾクゾクと心地よい戦慄が背中を走ってオマン

コへ抜ける。

(だめえ……本当にだめえ……！)

詩鶴は太腿をこすり合わせた。オマンコの奥がきゅんきゅんする。双つの乳首をひっきりなしにしゃぶられて気持ちよくてたまらない。耐えようとするのに、べろべろと乳首を舐められると、大きく上半身をうねらせ、下半身をクネクネさせてしまう。

やめて……！

乳首気持ちいい。

そんなに舐めちゃいや。オッパイ揺さぶらないで。

だめ。

またイッちゃう……！

乳首だけでまたイッ――。

庸がさらにバストを激しく揺さぶった。舌を真横に振幅させる。バストは揺れて、乳首は上下動。縦に揺れて舌に舐められる。同時に舌自体は横に揺れている。縦舐めと横舐めとが同時に乳首に襲いかかり、乳首がとけそうになった。今までの快感よりもさらに強烈な快感が乳首を凌辱した。心地よい痺れと陶酔とが乳首で爆発し、

「あああつ、やああつ、やあああああああああつ!!」

自分でもびっくりするくらい激しい嬌声を上げて詩鶴はのたうちまわり、そして――声を失った。

また、絶頂が襲いかかっていた。理性の制御を離れて身体がひくつき、腰が激しくバウンドする。上半身もぶるぶるとふるえ、波打つ。それでも庸はバストを揺さぶっている。縦方向と横方向の乳首舐めが、バストの頂点を凌辱しつつける。

「らめえ、またイク、またイクからああ、やめてええ……！」

懇願しながら、また詩鶴は絶頂に達した。自分の身体が、自分のものでないみたいに暴れ、跳ねまわる。自分ではどうにもならない。そして身体がバウンドしている間も、庸は双つの乳首を、縦方向と横方向から颯りつつけている。



「やめてえ、何でもするからあぁっ、やめてえええええっ……！」

泣きそうな声で懇願した。乳房がさらに激しく揺さぶられ、舌で玩弄された。舌が横方向に激しく往復し、乳首を凌辱した。

詩鶴は絶叫し——頭の中が真っ白になった。気持ちよくて呼吸が苦しい。でも、オッパイが気持ちよくてならない。肢体がのけぞり、腰がヒクヒクとひくついた。身体が波打ち、何度も何度も絶頂の波に痛打される。その間も、乳首は舌で二方向にわたって凌辱されつづける。乳首は縦方向に颯られ、さらに横方向にも颯られる。バストは快感ではちきれそうになり、頭の中で放電が走った。白い光がスパークし、詩鶴は意識を失った。

4

庸は驚嘆していた。ブルーゴージャスの身体は力が抜け、首は後方に垂れている。乳首を吸っても、反応はない。

(え……？ まさか、気絶した？)

「おい」

声を掛けてみた。

反応はない。

やはり、気絶しているらしい。

(どうしよう)

と不安が湧き起ると同時に、

(これはチャンスでは……？)

という悪意が目覚めた。オッパイを吸いまくって、チンポはすっかり勃起しまくっている。もう爆発寸前である。

(ブルーゴージャスにパイズリしてみる……？)

思った直後、

(いやいやいや！ そんな人でなしの行為を……！)

庸は首を横に振った。でも、相手はかつて敵だったブルーゴージャスだ。やっつけてやりたい気分は胸に残っている。

庸は電動ボタンを押して、詩鶴を下ろした。詩鶴の膝が地面に着く。

（これでバイズリできる……）

その前に、顔を見ようか、という気になった。黒いロングヘアの持ち主だということはわかってる。恐らく自分と同じ高校生か女子大生だ。自分のことを知っているような感じだったから、もしかすると、同じ高校の人間かもしれない。

（どんな顔か……拝んでみようか……？）

庸は目隠しの後ろに手を回した。目隠しは簡単なものがある。外せば取れてしまう。

胸はドキドキしていた。

相手は誰なのだろう？

知っている顔？

まさか。

どんな顔をしているのだろうか？ 聖ルミナみたいに地味な感じ？ それとも、派手な感じ？ クラリツサみたいな美人顔？

（起きたりしないよな？）

庸は唾を飲んだ。

相手は気絶しているのだ。見るなら、今しかない。

思い切って、庸は目隠しを外した。

白い肌が目に飛び込んできた。目は閉じている。眉は美しい柳眉である。普段なら、きりっとした美しさを放っているのだろう。

（え？）

庸は一瞬、凍結した。

知っている顔……？

（あれ？）

知っている顔じゃないのか、という声がする。確か、この顔は――。

「ん……」

ブルーゴージャスが呻いた。

（やばっ！）

目隠しを着け直す前に、女が目を開いた。庸は固まっ

た。相手の視線が下を彷徨い、それから上を向く。庸の顔にぶつかった。

「濁川——」

庸は声を放てなかった。相手は、真王寺詩鶴——同じグロバリア国際学院の三年生——クラリッサと同じ特別生だったのだ。一度、庸とクラリッサの関係に対して文句をつけた女である。

（あの上級生……!!）

「きゃ~~~~~~~~~~~~っ！」

真王寺詩鶴は素っ頓狂な悲鳴を上げた。

「何してるのよ！ この無礼者~~~~~~~~っ！」

「うわああああああああああっ！」

庸は目隠しを放り投げて部屋を飛び出した。隣の部屋に飛び込んだところで、なんでおれは逃げなきゃいけないんだ？ と庸は自問した。でも、おれ、こっそり胸さわっちゃったし、思い切り胸吸っちゃったし。

あ。

胸さわった。胸を吸っちゃった。敵エージェントをチャージしてしまった。

「ああああああああああああっ!!」

庸はもう一度絶叫して頭を抱え込んだ。

1

真王寺詩鶴は憤怒の化身となって夜闇を駆けていた。顔バレしないというから、渋々承諾したのだ。なのに、ピンクボリスが席を外していたせいで、顔を見られてしまった——学院で最下層の修道生に！ 自分がブルーゴージャスだっことがバレてしまった！ 胸を吸われてイッてしまったことも、知られてしまった！ これであの修道生は言いふらすに違いない。おれ、あの真王寺の胸をしゃぶったんだぜ！ 思い切りイキまくってたぜ！

最悪だった。性ほど、人を——女を——貶めるものはない。性は、女の聖性を剥ぎ取る。詩鶴は激しく後悔した。どんなにエージェントAから説得されようとも、娼婦みたいな真似をしてはならなかったのだ。

エージェントAにはすではつきりと告げた。自分は今二度とあんなことはしません！ あんなことをするのなら、エージェントを辞めます！ あの男は我がチームには不要です！

変身して第二教会を出発しても、詩鶴はむかむかしていた。ピンクボリスの背中を眺めていると、怒りが込み上げてくる。ピンクボリスがしっかり見張っていなかったから、自分は顔バレしたのだ。すべてはこの女が——！

ピンクボリスとローズスコラが立ち止まった。フェンスの向こうは真っ黒の森——デモニア基地の敷地だ。

ピンクボリスが詩鶴とホワイトグラスに顔を向けた。

「みんな、行くよ。今度こそ、デモニアをぶっ潰すよ」

2

庸は寝室のベッドに突っ伏していた。頭の中は後悔でいっぱいだった。理奈からのお願いはニップルドームを着させてということだったのに、あの三段ロケットのオツ

パイを見せつけられてブルーゴーギヤスのオッパイをさわ
りまくってしまったのだ。

人を最も裏切るのは感情ではなく、欲望である。デモニ
アのみんなに迷惑を掛けたくないと思っていたのに、また
自分は――。

（変なことにならないかな。みんな、平気だよな？）

満潮へ向かう波のように、不安が押し寄せる。

（仲間の戦闘員、大丈夫かな？ アイゼナハとインフィニ
アは……）

3

デモニアの第〇八一基地の深部には、デモニア星人の居
住エリアがある。非番の時、デモニア星人の戦闘員や暗黒
騎士たちは、デモニア星人だけが使うエレベーターで降下
して、地下深部の居住エリアに引きこもっている。

アイゼナハは、その居住エリアに戻っていた。誰もいな
い直線道の真ん中で、派手な水色のミディアムヘアの女暗
黒騎士と紫色のロングヘアの女暗黒騎士に話を終えたところ
だった。

「おまえとインフィニアで防ぎきれぬとはな……」

と紫色のロングヘアの女暗黒騎士がつぶやいた。エー
ジェントたちの侵入について、説明したばかりだった。

「ベルゼリア様がいらつしやれば……」

と悔しそうにこぼしたのは、水色のミディアムヘアの女
暗黒騎士ゼルシアである。基地の実質ナンバーワンのベル
ゼリア戦闘局長は、濁川庸の昇格手続きで隣の基地まで遠
出していて不在である。ベルゼリアの不在中に濁川庸を奪
われ、さらに基地を襲撃されたということになる。

「これ以上の攻撃は防がなければね。二隊待機から三隊待
機に切り替なければ」

と水色のミディアムヘアのゼルシアが言った。

「次の番からか？ それでは遅いぞ。エージェントはまた
攻撃を仕掛けてくるかもしれぬ。部下たちにすぐ準備させ
よう」

と紫色のロングヘア、ゾシアが言い出した。

「ありがとう」

思わずアイゼナハは安堵の笑みを浮かべた。仲間が、すぐに部下を率いて駆けつけると言ってくれたのだ。これですべて防衛できる。

「わたしは先に地上に戻っているわ」

「わたしも部下を率いてあとで行く」

とアイゼナハの言葉に紫色のロングヘアが答えた。アイゼナハは二人と別れて、エレベーターに戻った。

かつてこのエレベーターに庸とインフィニアで乗ったことが思い出される。銀行強盗側と保安官側に分かれて、アイゼナハは保安官の衣装を着て庸たちとやり合った。庸を捕まえてオッパイでたっぷりいじめて、その後、庸にたっぷりいじめられて……。とても熱い、楽しい時間だった。やっぱりこの子が好きだと改めて思った時間だった。だが、その庸は――。

（待ってて。絶対、助け出してあげるから）

エレベーターが基地に到着した。エレベーターを出ると、途端に緊急ブザーが飛び込んできた。

（また敵襲!?）

居住区へ走ると、ちょうどインフィニアたちと出くわした。

「どうしたの!？」

アイゼナハの問いに、

「またエージェントが来た!」

とインフィニアが答えた。

アイゼナハは息を呑み、そして唇を噛み締めた。せっかく仲間の助けを引き出して戻ってきたのに……!! 敵の方が動きが早かった!

「ゾシアが隊を率いてくれるって言ってるの!」

「いつ来る!？」

「あとでって――」

インフィニアが唇を噛んだ。医務室から、心配してルクレツィアが出てきた。

「ルクレツィア! すぐ地下に行行ってゾシアを呼んでこ

い！ ゾシア一人でもいいからすぐ来てくれって、言っ
てこい！」

4

クラリツサは一人、アイゼナハ隊の居室に残っていた。
三人の戦闘員とアイゼナハは出掛けていった。クラリツサ
も出撃すると言ったのだが、基地内に一人も戦闘員がいな
いのはまずい、万が一、敵が侵入した時には奉仕局員の指
揮を執れと命じられてしまった。

戦闘員として、自分は期待されていない？ それとも、
自分がデモニア星人ではなく、地球人だから、アイゼナハ
なりの思いやり？

孤独は人を不安にさせる。それだけでなく、庸を失って
からの展開は急激だった。庸を失うまではデモニアが圧倒
的な優勢に立っていたのに、庸を奪われてから形勢が逆転
してしまったのだ。さきほどは基地への侵入を許してし
まった。危うく天井を破壊されるところだった。

またエーリエントたちは基地に侵入するだろうか？ ア
イゼナハ隊とインフィニア隊の二隊だけでは、きっと防げ
ない。ルクレツィアはもう一人暗黒騎士を呼びに行ったよ
うだが、間に合うのか……？

5

真王寺詩鶴はすでに仲間とともに敵陣に入っていた。
フェンスを越えて、D5からD4へ向かっているところ
だった。

不思議な感じだった。走っていて、身体が軽いのだ。跳
躍一つにしても、ふわっと身体が浮かぶ。飛ばうと自分が
決めて身体が反応するまでのレスポンスが違うのだ。

(まさか、これが濁川の効果……？)

まさか、と詩鶴は思った。

(気のせいよ)

前方に池が見えてきた。池の向こうに、暗黒騎士二人と

は重力弾をセーブしておかなければならない。地下に侵入するまでは、自分と理奈が前衛だ。

理奈がアイゼナハにコルトパイソンを向けた。三回トリガーを引く。その瞬間、弾道がわかつているかのようにアイゼナハが右に、左に反転してドリーム弾を躲した。その後ろで、アイゼナハ隊の戦闘員たちが恍惚とした表情を浮かべて倒れた。理奈が狙っていたのは、アイゼナハではなく、アイゼナハ配下の戦闘員だったらしい。

凄

い。三発撃って全弾命中だ。濁川の効果は持続している。

「おのれっつ！」

インフィニアの声が響きわたった。割れた氷の上を次から次へとジャンプしながら、猛烈な勢いで近づいてくる。

インフィニアの双眸が、詩鶴を捉えた。

また捕まえてやるからな。

そう言っている。目が、自分を狙っている。

ゾクツとした。

またやられる……？ 捕虜にされる……？

インフィニアはそのつもりだった。割れていない氷の上に着地した途端、猛然とダッシュしてきたのだ。

速い。

ピンクボリスがコルトパイソンを向けた。続けて引き金を引く。スローモーションで、インフィニアの動きが見えた。最初に右に躲して、次に左に躲す。引き金を引いた途端、軌道が見えているようだ。

速い。

でも、その動きが——完璧に見える。動きの先も見える。敵はこつちに動いた。じゃあ、次はこう。そして次はこう。

見える。動きが見える。動きが読める。前回の出撃では読めなかったのに、今回は読める。

詩鶴は《拘束の矢》を二本抜いた。ピンクボリスがコルトパイソンをさらに撃つ。

タン。

タン。

アイゼナハは呆然としていた。目の前の事実には、自分が置いていかれている。

こんなはずがない。自分が一人だけ生き残るはずがないのだ。インフィニアがやられるなんて、ありえない。戦闘員を全員倒されるなんて、ありえない……。

だが、ありえないことが起きてしまった。自分の配下の戦闘員とインフィニア配下の戦闘員が、戦闘不能になってしまった。インフィニアも倒されてしまった。

なぜ？

あいつのせいだ。

ブルーゴージャス。

きつと庸がチャージしてしまったのだ。二人のエージェントが庸にチャージされただけでも、二隊でぎりぎりだったのだ。三人もチャージされたとなれば、守りきるのは不可能――。

どうする？

自分一人で何とかする？

敵エージェントは四人――しかも、そのうち三人は庸にチャージされている。

（開けたところで戦うのは不利。撤退するしかない）

アイゼナハは一步後退した。

基地に戻るしかない。基地の狭い通路なら、まだ迎撃できる。そこで時間稼ぎをして、ゾシアの到着を待つしかない。

「奉仕局員は全員、通路へ。わたしが通路に誘い込む」

とインカムにアイゼナハは命じた。もはや基地には、自分と奉仕局員しかない。ルクレツィアはまだ地下深部か。

「逃げられないから」

とブルーゴージャスが《拘束の矢》を向けた。ピンクポリスもコルトパイソンを向ける。ローズスコラもランチャーを構えた。

《拘束の矢》が飛んだ。同時に、ドリーム弾が飛んだ。続けざまに鞭を振るって電光を放つ。

《拘束の矢》とドリーム弾が光って消えた。その時には、

すでに二射目の《拘束の矢》と二発目のドリーム弾が飛んでいた。

アイゼナハは鞭を振るった。防ぐのに精一杯で、地下への入り口に戻れない。

ピンクポリスとブルーゴージャスが池の上を走ってきた。左右に分かれる。

（挟み打ちにするつもり？）

両側から攻撃されれば、鞭で防ぐのは難しくなる。

（今しかない……！）

アイゼナハは背中を向けて走り出した。コルトパイソンが鳴った。右に飛んで振り向いた。

《拘束の矢》が迫っていた。

「くっ！」

鞭を振るった。雷撃の音に、コルトパイソンの銃声が二発、重なった。地面へ飛んで銃弾を躲す。

くるっと回転して膝立ちしたところで、鈍い衝撃が走った。《拘束の矢》が広がり、一瞬にして網に自分の身体が拘束された。網に締めつけられて、身体が自由が消えた。

（このっ……！）

アイゼナハは網の中で唇を噛んだ。こんなにもたないなんて……。こんなにすぐ自分がやられてしまうなんて……。自分はこんなに弱かったの？

違う。

相手の粒が揃いすぎたのだ。どんなに庸にチャージされた自分でも、庸にチャージされた敵が三人もいては、ひとたまりもない。それがわかっていたから、自分は地下深部まで降りて救援を求めたのだ。でも、遅かった……。

もう基地には、まともに戦える者は残っていない。基地を守る者はいない。

「クラリッサ！ ルクレティアから連絡は!? ゾシアは!?」

インカムに叫んだ。

「ルクレティアは戻っていないわ！ ゾシアって、誰？」
万事休すだった。ルクレティアはまだ戻っていない。ゾシアの救援はまだ来ていない。

ゾシアを待つ？

ゾシアが来るまで、奉仕局員全員で防衛するように命令する？ でも、ゾシアの到着が遅れたら？ エージェントたちは二分もしないうちに地下基地に辿り着くだろう。そして破壊を始めるに違いない。救援が来ない限り、この基地は破壊される。そして、救援がいつ来るかはわからない。そんな不確実な中、奉仕局員たちに死守しろと命令する？

そんな命令は発せられない。奉仕局員は地球人なのだ。地球人に、殉死せよなんて命令は出せない。連中はよくやってくれたのだ。

アイゼナハはインカムに向かって命令を発した。

「クラリツサ、すぐに全奉仕局員を連れて基地から退避しなさい！ エージェントに破壊される前に逃げなさい！」

叫んだ直後、動けなくなった彼女の脇を、四人のエージェントたちが走り抜けた。四人は地下への入り口に飛び込み、見えなくなった。

7

詩鶴は理奈とともにデモニア第〇八一基地の地下通路を走っているところだった。

鼓動が激しく鳴っている。

とうとう敵を粉碎した。自分を捕え、敗北を味わせたインフイニアを拘束し、さらにアイゼナハも封じ込めた。

二隊の戦闘員は全員捕えた。菌向かう敵は、基地内に残る者のみ――。

まだ敵が大勢待ち伏せしている？ 奉仕局員たちがナムボールや拘束ボールを手迎撃の準備をしている？ 来るなら来いだ。

何が来たって、今の自分たちなら怖くはない。濁川のおかげで、三人もパワーアップしているのだ。三人が無双状態である。

詩鶴は静かに興奮していた。

いよいよ自分たちが勝利を収める時が近づいてきたの

だ。セイント・エージェントになってから、どれほど夢見たことか。いつかは敵基地を粉砕したいと思っていた。でも、それは夢のまた夢だった。それが——今叶おうとしている。

シャッターは半分ほど壊れたままだった。前回、ルミナに無重力弾で破壊されたままの状態に残っている。すべて修理する時間はなかったらしい。

基地の居住エリアへとつながる最後の扉を抜けた。

理奈がコルトパイソンを抜いた。詩鶴は、『拘束の矢』を構えた。後ろには、ルミナと京一郎——。

「行くよ！」

理奈が躍り出た。くると回転してコルトパイソンを構える。詩鶴も素早く『拘束の矢』を向けた。

居住エリアには、誰もいなかった。奉仕局員の姿も戦闘員の姿もない。

四人は拍子抜けした。てっきり奉仕局員が集まって最後の抵抗を試みていると思っていたのだ。

(まさか、罠……!)

詩鶴は反転した。確か、基地に入って近くにレクリエーションエリアがあったはずだ。ここに隠れている？

静かに近づいた。

誰かいそう？

わからない。

さっと中に飛び込んだ。すばやく『拘束の矢』を向ける。

やはり無人だった。

「クリアー！」

理奈の声が、奉仕局員の詰め所から聞こえた。

「無人だぞ！」

と京一郎が叫ぶ。

「逃げたの？」

と理奈が尋ねた。

「待ち伏せしているかもしれない。とにかく、ローズ、基地の破壊を」

と詩鶴は命じた。

「破壊に備えて。天井が壊れたら、逃げられなくなるから」

理奈の言葉に詩鶴はうなずいた。

ルミナがハンドランチャーを天井に向けた。引き金を引く。重力弾が命中し、地面が揺れた。基地の終わりが近づいている。

さらに一発、また一発、ルミナが重力弾を天井に撃ち込む。ガクツ、ガクツと基地が揺れた。ルミナが手早く重力弾を詰める。

また天井に向けた。



引き金を引いた。天井が大きく揺れ、奉仕局員の詰め所の近くの天井が崩れ落ちた。

「壊れる……!!」

理奈が口を開いた。

「退避準備」

詩鶴は命令を発した。基地の破壊に成功しても、自分たちまで生き埋めになっては仕方がない。

ルミナがまた天井に重力弾を撃ち込んだ。天井が崩れ、土が落ちてきた。

「退避開始!」

京一郎が走りはじめた。詩鶴も理奈と後退を始める。ルミナも後ずさりながら、また天井に向かって撃ち込んだ。天井全体が地面に向かってふくらみ、突き出した。天井が臨界点を迎えようとしている。

「退避~~~~っ!」

ルミナが背を向けて走りだした。詩鶴も理奈もいっしょに一目散に逃げる。天井がついに落ちて、凄まじい土煙が舞った。煙が四人を追いかける。詩鶴たちは、一気に地上への通路を走った。

「早く!」

先を走る京一郎が叫ぶ。通路を半分走ったところで、すぐ後ろで自動でシャッターが閉まった。土煙が止まる。それでも、四人はそのまま走りつづけ、乳雲寺の脇に飛び出した。

(基地は破壊されたの……?)

確かめるため、四人は再びフェンスへ向かった。フェンスに飛び乗る。広大な森の一部で木々が斜めに傾いているのが見えた。きつと天井が崩落して、基地が陥没したのだ。

思わず強烈な歓喜と充実感が湧き上がった。四人は一斉にハイタッチを交わした。出撃前はむかっていた理奈とも、ルミナとも、相性の悪かった京一郎とも、派手にハイタッチする。

やった。とうとうデモニアの基地をぶっ潰した。正義が勝利したのだ。

（わたしたち、勝ったんだ……！）

今までに経験したことのないほどの高揚が、詩鶴を襲っていた。

エーリエントAは正しかった。濁川を誘拐するまでは、敗北の危機に瀕していたのは自分たちの方だったが、濁川を手に入れてから逆転した。そしてついに、決定的な初めでの勝利まで辿り着いたのだ。

なんてすがすがしい気分だろう、と詩鶴は思った。正義の味方がこんなに気持ちいいものだってことを、忘れていた……。

あとがき

本当にお待たせいたしました！ 本当です！ やっと『揉ませてよオレの正義』の第五巻です！ 第四巻は平成発売でしたが、第五巻は令和元年です！ 原稿は平成には上がっていたのに、なんでこんなに遅くなるんだ……!? 明治神宮まで御祓いに行った方がいいのかな。でも、あそこは縁結びだし……。仕事となると、鶴岡八幡宮かな……。

二年間も楽しみにして待っていてくださった方、そして今この本を手にとっていただいた方、レジまで持っていていただいた方、本当にありがとうございます！ ひたすら感謝、感謝です！ 「八月三〇日発売が決まりました」ってツイートした時、いっぱいリプライがついていて、「こんなに待ってくれている方がいらっしやっただ」って、凄くうれしくなりました。と同時に申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。ほんと、去年のうちに出了かった……。

原稿は二〇一八年には上がっていました。でも、なかなかイラストが上がらず、「●月までには絵を上げます↓完成しない↓●月までには↓完成しない」の残念なコンボで平成を超えて令和発売になってしまいました。でも、やつと完成です！ 牡丹さん、おつかれさまでした。

第五巻は、ついに超乳が登場します。超乳ですよ、超乳。ぼくが小説で超乳のエッチシーンを書くのって、初めてじゃないかな。そしてセイント・エージェントのあの人もエッチシーン初登場です！ お楽しみに！

実は最近、『エロラノベバイブル(仮)』という本をPDFで出しました。そのために今のエロラノベを調べてみたんですが、だいたいプロローグとエピソードを除いてチャプターが五つか六つ。章よりも小さな単位を節と言いますが——「1」「2」とか数字で区切つてあるところですよ——ほとんどのエロラノベには節がないんですね。複数視点の作品も少ない。ぼくは章が多くて——本書でも九章——節もついていて、なおかつ三人称複数視点なので、凄く珍しい部類です。節をつけた方が物語をスピーディー

に進められるし、複数視点の方がワクワク感やヒロインの
気持ちを書きやすくなるんだけどね。

ともあれ、ようやく発売までこぎ着けました。すべて編
集のMさんのおかげです。Mさん、本当にありがとうございます！

最後に改めて編集のMさんとイラストの牡丹さんと校正
さんにお礼を申し上げて、いつもの締めで終わりたいと思
います。

じくじくく・ポイン！

令和元年（二〇一九年）七月三十一日、皇琲亭でキリマン

ジャロを飲みながら

ぶちばら文庫 Creative

揉ませてよオレの正義5

2019年8月30日 E P U B版発行

■著 者 鏡裕之

■イラスト 牡丹

発行者 久保田裕

発行所 株式会社パラダイム

〒166-0011

東京都杉並区梅里2-40-19 ワールドビル202

TEL 03-5306-6921

©HIROYUKI KAGAMI ©BOTAN

この本は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。

● 著作権に関して

本作品の全部または一部を複製、編集、修正、変更、頒布、貸与、公衆送信、翻案、配布する等の著作権及び著作人格権侵害となる行為、および有償・無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することは禁止いたします。

● お断り

本作品を電子書籍にて発行するにあたり、簡体字・繁体字などの電子書籍として表現できない文字、ルビ、記号、表組み等、または電子書籍として表現がむずかしい部分等は、印刷出版と異なる表記になっている場合があります。また本作品で紹介したwebサイトのURLは印刷出版した時点の情報となります。リンク切れや情報が異なる場合があります。